ISSN 0386－6009

サイコアナリティカル
英　文　学　論　叢
―英語・英米文学の精神分析学的研究―

第 40 号

The Journal of Psychoanalytical Study of English Language and Literature

No. 40

サイコアナリティカル英文学会

The Society for Psychoanalytical Study
of English Language and Literature

目　　次

（アメリカ文学）
1. “Delta Autumn” における過去と未来と老人 …… 1
有働　牧子
2. Sherwood Anderson に見る Oedipus Complex
—— 創作と実人生と —— …… 13
小園　敏幸
3. エディプス惨劇の不条理性を読み解く
—— ホーソーンの「ロジャー・マルヴィンの埋葬」—— …… 39
佐々木英哲
4. 結婚劇の二人の犠牲者
—— マーク・トウェインの「ワッピング・アリス」に関する
精神分析学的一考察 —— …… 63
鈴木　　孝
5. Alma の自己の超克
—— *Summer and Smoke* の精神分析学的考察 —— …… 81
平　恵理子
（イギリス文学）
6.『闘技士サムソン』におけるダリラの両極性
——「太母像」に焦点をあてて —— …… 105
野村　宗央
7. モダニズムと危機の時代 ——『ユリシーズ』再考 —— …… 117
松山　博樹
8. D・H・ロレンス『恋する女たち』をユング心理学で読み解く（Ⅲ）
——「星の均衡」におけるアニマとアニムス —— …… 133
森岡　　稔
（アメリカ文学）
9. 魂の闇との対峙 —— 正に満ちた世界を希求するメルヴィル —— … 163
横田　和憲
（研究ノート）
10. 学問の Borderless 化と「人間の心」…… 179
倉橋　淑子
11. SYNOPSIS …… 183
12. 執筆者紹介 …… 194
13. サイコアナリティカル英文学会会則 …… 197
14.『サイコアナリティカル英文学論叢』投稿規定 …… 201
15. サイコアナリティカル英文学会の図書出版に関する規定 …… 204
16. 編集後記 …… 205
小園　敏幸

SYNOPSIS

1. Past, Future and the Old Man in "Delta Autumn" ····· 183
Makiko Udo

2. Sherwood Anderson's Literature and his View of Womankind ····· 184
Toshiyuki Kozono

3. Absurdities of an Oedipal Story: Hawthorne's "Roger Malvin's Burial" ··· 186
Eitetsu Sasaki

4. Two Victims in the Theatrical Wedding:
A Freudian Analysis of Mark Twain's "Wapping Alice" ····· 188
Takashi Suzuki

5. A Psychoanalytical Consideration on *Summer and Smoke* ····· 189
Eriko Taira

6. Dalila's Polarity in *Samson Agonistes*:
Focusing on the Image of the Great Mother ····· 190
Toshihisa Nomura

7. Modernism and the Crisis in the Interwar Period
—Rethinking James Joyce's *Ulysses*— ····· 191
Hiroki Matsuyama

8. A Jungian Approach to D. H. Lawrence's *Women in Love* (III)
—The Anima-Animus in "Star-Equilibrium" — ····· 192
Minoru Morioka

9. Confronting with the Blackness of the Soul:
Melville's Persistent Pursuit of a Positive World ····· 193
Kazunori Yokota

“Delta Autumn” における過去と未来と老人

有　働　牧　子

William Faulkner（1897-1962）の短編 “Delta Autumn” は、1942 年に雑誌 *Story* に発表され、ほぼ同時に *Go Down Moses*（1942）に収められた。その後、Malcolm Cowley の編纂による *The Portable Faulkner*（1946）や、狩猟物語を集めた *Big Woods*（1955）にも組み入れられた。

書きあげてから雑誌に売るまでの間に、Faulkner は “The Bear” の続編として読めるようにこの作品を改訂している[1]。“The Bear” では、狩りを習得し、森に魅了された 10 代の Isaac（Ike）McCaslin が描かれており、その後 20 代で土地の相続を放棄して従兄違いに譲った後、“Delta Autumn” においては 80 歳という老齢を迎えた姿が描かれている。田中久男が指摘するように、遺産放棄から以降の約 60 年間についてはほとんど触れられることなく、すっぽりと抜け落ちていると言ってよい。「その欠落は、仮借のない歳月の経過の速さと、Ike の言わば『過去の人』としての老齢ぶりを読者に印象づけ、おそらく内面的には彼が不変であったことを保証するように働いている」[2]。

そこで本稿では、主に “The Bear” で描かれている Ike の子供時代も視野に入れながら、彼が長年にわたり留まっていた心的状態について精神分析の理論を援用しながら分析し、生まれたばかりの混血児（＝未来）との思いがけない邂逅によって起こった、死を目前に控えての変化について明らかにしたい。

老齢に達し、かつてその腕を誇っていた狩りでも、同行はするが戦力ではなくなった Ike にとって、森への遠征は空間的な移動というよりは時間

的な退行になっていた。

> . . . the retrograde of his remembering had gained an inverse velocity from their own slow progress, that the land had retreated not in minutes from the last spread of gravel but in years, decades, back toward what it had been when he first knew it . . .[3]

そして、辿り着いた先には、不死身のものたちが倒れてはまた起き上がる永遠の世界が広がっていた。

> . . . the names, the faces of the old men he had known and loved and for a little while outlived, moving again among the shades of tall unaxed trees and sightless brakes where the wild strong immortal game ran forever before the tireless belling immortal hounds, falling and rising phoenix-like to the soundless guns.（354）

ここから分かるように、Ike は単に現在の地点に立って遠い過去を振り返っているのではなく、時間の感覚から解き放たれて、幻想的なイメージの中に没入していた。以下のジジェクからの引用に従えば、現実の「身体（感覚）」を伴った「自我（意識）」が不在となっている。後述するが、Ike は、いわゆるメランコリーに陥っている。そのため、彼の自我は「貧困」の様相を呈しているのである。

スラヴォイ・ジジェクは「幻想」における「主観的立場」について次のように述べている。

> 外傷に対するひとつの反応は、幻想のなかへ逃避すること、つまりわれわれの主観的地平を超えて、世界そのものを想像することであ

る。・・・最近、アラン・ワイズマンの『人類から消えた世界』はこのロジックを極限まで突き詰めた。もし人類が（しかも人類だけが）突然地球上から消えたらどうなるか。多種多様な自然がふたたび栄え、自然はじょじょに人工物を覆い隠すことだろう。人間のいない世界を想像するとき、われわれ人間は、身体的基盤を失った純粋な視線となって、自分自身の不在を凝視する。そしてラカンが指摘したように、これこそが幻想の基本的な主観的立場である。主体が存在しない状態で世界を見つめるということだ・・・。[4]

先に引用したIkeの幻想をみても、「彼が愛着を感じていた昔の人々」や「獲物」や「猟犬」は出てくるものの、彼自身の姿はない。彼は、昔の人々に思いを馳せているように見えて、実のところ「身体的基盤を失った純粋な視線となって、自分自身の不在を凝視」していたのである。

Ikeは、子供の頃に初めて自分の手で鹿を仕留めた際、ある儀式を体験した。Sam Fathersという、狩りの師匠であり、黒人とネイティブアメリカンの血を引く男に、仕留めたばかりの鹿の血を顔中に塗ってもらったのである。このことが象徴するのは、森の一部である動物や、Samが血肉として湛えている先住民や黒人との密接な結びつきであり、土地に纏わる暗く血みどろの過去についての、知識というよりは感覚を伴った認識である。以来、白人たちが私利私欲に基づき先住民から不当に奪い開墾してきた土地は、Ikeにとって、森が誇る豊かさなど微塵も感じられず、過去の「過ちと恥」の象徴でしかなかった。そのため、Ikeは自らの祖先に、そしてその祖先の血を引く自身の白人としてのアイデンティティに嫌悪感と罪責感を抱く結果となった。だからIkeは、せめてもの償いとして、代々続く土地の所有権を放棄したのである。

. . . that day and himself and McCaslin juxtaposed not against the wilder-

> ness but against the tamed land, the old wrong and shame itself, in repudiation and denial at least of the land and the wrong and shame even if he couldn't cure the wrong and eradicate the shame . . . but at least he could repudiate the wrong and shame, at least in principle, and at least the land itself in fact, for his son at least: and did, thought he had . . .（351）

こうしたIkeの行動で思い出されるのは、精神分析理論における「去勢不安」の考え方である。すなわち、自分をファルスと同一視している男児が、女性（母親）にファルスがないことに気付いたときに抱くとされる、自分の存在がなくなる（去勢される）かもしれないという不安である。

森に魅了されたIkeが目の当たりにしたのは、白人に奪われる前の土地（wilderness）の計り知れない豊かさだった。自分の生まれた家がこのような土地を不当に奪って繁栄を遂げてきたと知って、彼は自分の存在が足元から揺らぐのを感じたに違いない。実際に、当時のことを描いた短編 "The Bear" には次のような記述がある。

> It seemed to him that something, he didn't know what, was beginning; had already begun. It was like the last act on a set stage. It was the beginning of the end of something, he didn't know what except that he would not grieve.（226）

獰猛な犬がSamによって調教され、幻の大熊を仕留めることが現実味を帯びてきたとき、Ikeは「終わりの始まり」を感じていた。"wilderness" を象徴する大熊との来るべき対面が、先祖から受け継ぐべきアイデンティティへの不信とその崩壊を決定づけるに違いないことを、子供ながらに予感していたのである。この予感ないし不安は、まさに、ファルスを持たない女性の体を前にした男児が覚える「去勢不安」と重なるものである。た

だし、去勢不安に苛まれた男児は、ふつう、それまでのようにファルスであることを断念し、父親と自分を同一化する。つまり、父親のようにファルスを持つことによって不安の解消を試みる。ところが Ike の場合、父親をはじめとする自分の先祖に甘んじて従わず、上の引用部の “he would not grieve” という記述からも窺い知れる通り、この後 21 歳のときに土地の所有権を放棄するのである。

こうした所有権の放棄、すなわちファルスを持つことの拒否は、その後彼が自分の子供を持たなかった事実に暗に示されている。

> . . . then (married then) in a rented cubicle in a back-street stock-traders' boarding-house, the first and last time he ever saw her naked body, himself and his wife juxtaposed in their turn against that same land, that same wrong and shame from whose regret and grief he would at least save and free his son and, saving and freeing his son, lost him.（351、下線筆者）

先祖が重大な罪を犯して繁栄し、その延長線上に自分がいるという恥ずべき事実から目を背けることなく、相続を放棄した Ike であったが、象徴的に解釈するならば、皮肉にもその放棄によって彼は、本来ならば個人的欲求や愛情に基づいてよいはずの生殖の権利をも放棄したのである。後に、老齢を迎えた Ike は混血の女性に “Old man, …have you lived so long and forgotten so much that you dont remember anything you ever knew or felt or even heard about love?”（363）と憐みの言葉をかけられるが、彼は愛を知らないというより、まだ見ぬ子孫を後悔や悲しみから救うために愛を断念していたのである。このようにして Ike は「メランコリー」に陥ったと思われる。

フロイトはメランコリーについて、悲哀（喪）と比較しながら考察している。曰く、喪もメランコリーも「苦痛に満ちた不機嫌と外的世界への関心の撤去」[5] や「愛情能力の喪失」[6] を共通の特徴として持っているが、唯一、

喪にはなくてメランコリーの症状として特徴的に発現するのが「自尊感情の障碍」[7]、すなわち自我の貧困化である。加えて、喪が「愛された人物や、そうした人物の位置へと置き移された祖国、自由、理想などの抽象物を喪失したことに対する反応」[8] であるのに対し、メランコリーは「より観念的な性質の喪失が問題となっている」[9]。

> 対象は、たとえば現実に死んだのではなくて、愛情対象であるかぎりにおいて失われてしまったのだ（たとえば婚約者が捨てられるといった例）。さらに他の諸症例では、わたしたちは、なんらかの喪失があったと想定すべきだと確信しているにもかかわらず、何が失われたのかをはっきりと認識することができない。そして、そういう場合にはいっそう容易に、患者もまた自分が何を失ったのかを意識的に把握できずにいると想定することが許される。・・・すなわち、メランコリーは意識から取り去られた対象喪失と何らかの仕方で関連しており、その点で、喪失に関わることは何一つ無意識的ではない喪とはことなっている・・・。[10]

先に挙げたように、作中では、Ike が子供をもうけなかったことを説明する際に “lost him” という表現が用いられている。息子を「持たなかった」のではなく、存在すらしていない息子を「失った」のである。フロイトの理論を踏まえて考えると、この表現が示唆しているのは意識されない対象の喪失にほかならない。このことによって Ike はメランコリーに陥り、自我は貧困化し、狩りに行くたびに「自分が存在しない世界」に思いを馳せるようになっていたのである。

フロイトはまた、メランコリーにおいて「自我感情の障碍」が起こるメカニズムについて、放棄された対象の影が自我の上に落ちて、自我と同一化されることによるものだと説明している。つまり「対象選択の一つの型

から根源的なナルシシズムへの退行」[11] が起こっているのである。Ike もまた例にもれず、こうした状況にあった。

> . . . the trembling and sleepless ardor of a boy; already the tent, the rain-murmured canvas globe, was once more filled with it. He lay on his back, his eyes closed, his breathing quiet and peaceful as a child's, listening to it—that silence which was never silence but was myriad.（353、下線筆者）

狩りの間、Ike が身を横たえるこのテントは、別の個所では "the motionless belly of rain-murmured canvas"（350）と描写されている。"globe" や "belly" という比喩から真っ先に思い浮かぶのは子宮である。Ike は、「子供のように静かで穏やかに息をしながら」、「根源的なナルシシズム」、すなわち母子の二者関係の舞台でもある子宮の中に退行していたのである。

ところが、テントの入口——解剖学的用語を使えば、陰裂——から、失われた対象が思いがけず到来する。Ike の親類である Roth と関係を持った女性と、彼らの間にできた、つまり Ike の血を間接的に受け継いでいる生まれたばかりの混血児である。興味深いことに、子供のようにベッドに横たわっていた Ike の目の前に現れたのは、同じく「子供のような」と何度も表現される女性であった。

> . . . he became aware of her eyes, or not the eyes so much as the look, the regard fixed now on his face with that immersed contemplation, that bottomless and intent candor, of a child.（357、下線筆者）

> . . . he saw again that grave, intent, speculative and detached fixity like a child watching him.（359、下線筆者）

まるでラカンのいう鏡像段階を思わせるようなこの対面は、Ike とこの女性、そして混血の乳児との象徴的なつながりを暗に示唆している。すでに説明した通り、女性には黒人の血が流れていた。しかも、偶然にもその血は、Ike がかつて一緒に狩りをしていた黒人 Tennie's Jim を祖先に持つものだった。一方で Ike は、先述のとおり、Sam Fathers によって血の印を刻まれたことで、wilderness や黒人や先住民との皮膚感覚にもとづく結びつきがあった。Ike と混血の女性やその子供が似たような描写をされているのはこのためである。

したがって、この女性が生んだ混血児は、Ike が失わずして「失った」息子と解釈できる。つまり、この混血児こそ、自分の祖先を批判する Ike の理想を体現する存在であり、貧困化した彼の自我を埋めてくれるはずのものだった。にも関わらず Ike は、その女性と赤ん坊の正体に気づいたとき、次のような反応を示す。

> . . . the pale lips, the skin pallid and dead-looking yet not ill, the dark and tragic and foreknowing eyes *Maybe in a thousand or two thousand years in America*, he thought. *But not now! Not now!* He cried, not loud, in a voice of amazement, pity, and outrage: "You're a nigger!"（361）

「一～二千年先ならありうるかもしれないが、今じゃない！」というどっちつかずの叫びには、彼の祖先への反抗が中途半端なものだったことが表れているとも言えるし、重く暗い歴史にたった一人で立ち向かってきた彼の苦悩と無力感が表れているとも言える。ここで、自我に関するラカンの次のような考えを挙げたい。

> 自我とは存在の真実に完全に対立するものである。自我は個人の理

想とするものの一切を、すなわち、個人がそうありたいと欲するものあるいはまた個人がそうであると思っているものの一切を、自我のうちに凝集する。自我は、われわれ自身とは別ものであって、なにかぴったりしない鋳型として自己に似せてとってつけたようなものである。

主体は、自分の幻想や夢のおもむくままに少しずつ自分を加工し、それとして生きてゆく。しかしながら、そうすることで、主体は、自らに対しても他者に対しても、自分を偽り隠す結果になってしまう。この坂道を下り始めると、主体はもはやそこからひき帰すことがむずかしくなり、主体を真実から引き離すあの距離は、時がたつにつれて、ますます開いていくことになる。[12]

Ike の自我が貧困化していたことはすでに何度も指摘したが、混血児によって補填されても良かったはずの自我は、蓋を開けてみれば Ike 自身の真実とはかけ離れたものだった。こうした隔たりが生じてしまっていたことは、物語の前半からすでに伏線として仄めかされていた。

> Now they went in cars, driving faster and faster each year because the roads were better and they had farther and farther to drive, the territory in which game still existed drawing yearly inward as his life was drawing inward . . .（335）

そしてクライマックスが訪れる。

> . . . the gnarled, bloodless, bone-light bone-dry old man's fingers touching for a second the smooth young flesh where the strong old blood ran after its long lost journey back to home. "Tennie's Jim," he said. "Tennie's

Jim.”（362）

Millgate は Ike と女性との出会いを指して “the point at which all the threads of the novel seem to cross, at which the whole pattern of the book emerges with final and absolute clarity, is that of Ike’s encounter with Roth’s mistress”[13] と述べているが、女性とのこの接触によって、Ike は幻想を通り抜けたものと考えられる。「幻想を通り抜ける」とは、「自分を幻想に完全に一体化させること」[14] であり、「これまで以上に幻想の要求を受け入れることであり、想像を超越した幻想の真の核との、これまで以上に親密な関係に身を委ねること」[15] である。

> ここではじめてわれわれは、幻想を通り抜けるというのがどういう意味なのかがわかる。それは幻想を通して、幻想によってぼかされた現実を見てとることではなく、幻想そのものとじかに直面することである。いったんそれをやってのければ、幻想の呪縛は解かれる。なぜかというと、われわれの経験の透明な背景として機能するときにのみ、幻想は機能するからである。[16]

本稿の冒頭で、Ike の脳裏に浮かぶイメージが幻想的であることはすでに指摘した。そしてそれは、80 年に及ぶ彼の生きざまを反映したものであった。自らが属す人種の過去の過ちに反発を覚え、メランコリーないしはナルシシズムへの退行に甘んじていた Ike であったが、幻想そのもの、すなわち混血児を産んだ女性とじかに触れ合うことで、その呪縛を解かれたのである。

このことを象徴しているのは雨の描写の変化である。作中でしばしば “murmured”（350、353、363）と修飾されていた降りやまない雨が、最後には次のように描写されている。狩りの途中、Roth のナイフを取りに戻っ

てきた Legate との会話に続く場面である。

> “Who killed it?” McCaslin said. “Was it Roth [Edmonds]?”
> “Yes,” Legate said, raising the flap.
> . . .
> “Just a deer, Uncle Ike,” he said impatiently. “Nothing extra.” He was gone; again the flap fell behind him, wafting out of the tent again the faint light and the constant and grieving rain. McCaslin lay back down, the blanket once more drawn to his chin, his crossed hands once more weightless on his breast in the empty tent.
> “It was a doe,” he said.（364-365）

Ike は、土地にまつわる暗い過去や恥辱に反発を覚えることはできても、それが具体的に何につながり、何を求めればよいのかを思い描くことまではできなかった。だからこそ、過去に囚われ、「何らかの意識されない対象の喪失」にかかわるものであるメランコリーに陥っていた。しかし、その得体の知れない空隙を埋めてくれるポテンシャルをもった混血の女性やその子どもと出会い、別れた後、「深い悲しみの雨」に打たれる「空っぽのテント」の中で Ike は、人生で初めて喪失による悲哀を味わっていたに違いない。精神分析的に言えば､喪失は人間にとって存在の出発点である。死を目前に控えた Ike が味わった悲哀のうちに、Faulkner は控えめな希望を滲ませたと思われる。

Notes

1　日本ウィリアム・フォークナー協会『フォークナー事典』（松柏社、2008 年）, p145.

2 田中久男「*Go Down, Moses* の主題と構造」*The Hiroshima University Studies Faculty of Letters vol. 51*, 1992, pp. 233-255, p. 247.
3 Faulkner, William. *GO DOWN, MOSES*. New York: Random House, 1942, p. 341. 以下、同書からの引用は引用末尾の括弧内に頁数を記す。
4 ジジェク、スラヴォイ『事件！哲学とは何か』（河出書房新社、2015 年）, pp. 33-34.
5 フロイト、ジークムント『フロイト全集 14』（岩波書店、2010 年）, p. 274.
6 *Loc., cit.*
7 *Loc., cit.*
8 *Ibid*., p. 273.
9 *Ibid*., p. 276.
10 *Loc., cit.*
11 *Ibid*., p. 282.
12 ルメール、アニカ『ジャック・ラカン入門』（誠信書房、1983 年）, p. 109.
13 Michael Millgate, *The Achievement of William Faulkner*. New York: Vintage Books, 1966, p. 211.
14 ジジェク、p. 39.
15 *Loc., cit.*
16 *Ibid*., p. 40.

Sherwood Andersonに見るOedipus Complex
―― 創作と実人生と ――

小　園　敏　幸

Ⅰ．序論

アメリカ文学史を考えるとき、Sherwood Anderson（1876-1941）は如何なる立場にいたのであろうか。

Sherwood Anderson の作家としての評価について、Walter Allen は次のように述べている。“Though there had been great American short story writers …Hawthorne, Poe, James …before Anderson, he stands out as the founding father of the modern short story in America”

Faulkner は次のように語っている。

“He［Sherwood Anderson］was the father of my generation of American writers and the tradition of American writing which our successors will carry on….Dreiser is his older brother and Mark Twain the father of them both.”

しかし、Faulkner は先のインタビューの中で、Anderson は未だ正当な評価を受けたことがない、と言っている。

1920 年代には、Anderson の名声が極めて高かったことを物語っているのは、彼が T. S. Eliot を抜いて、1921 年 12 月に第１回『ダイアル』誌賞として 2,000 ドルを受賞したことである。そして T. S. Eliot が第２回『ダイアル』誌賞の栄誉を得たのである。

Anderson が『ダイアル』誌賞に輝いた、その２、３年後に、Virginia Woolf（1882 － 1941）は *The Saturday Review of Literature* の中で、次のように語っている。

“Of all American novelists the most discussed and read in England at the

present moment are probably Mr. Sherwood Anderson and Mr. Sinclair Lewis.”

Anderson の文章スタイルの影響を受けた作家としては、William Faulkner（1897-1962）、Ernest Hemingway（1899-1961）、John Steinbeck（1902-68）、Thomas Wolfe（1900-38） などがいる。Anderson は Hemingway と Faulkner を作家として世に送り出した人物でもある。

Ⅱ．精神分析

アメリカの作家 Sherwood Anderson は 64 年間の生涯に 4 人の女性と結婚し、１人の女性とプラトニック・ラブ（Platonic love）を経験したが、彼が女性遍歴をしてきた原因は何であろうか、そしてそのことが彼の作品に何らかの影響を及ぼしてはないのだろうか。

「人間は時に運命を支配する」とは William Shakespeare（1564-1616）の言であるが、Sherwood Anderson の場合は、何か得体の知れないものによって人生が翻弄させられた、という感を抱かざるを得ない。

具体的には、Ferdinand Scheville（1868 ～ 1954, history teacher at the University of Chicago）に宛てた 1929 年 1 月 16 日付の Anderson の書簡から、そのことが推測できそうである。

> I only mean that poor E. is very, very nice ― much nicer than I will ever be ― and I do not want her any more. C. and T. were nice too. Why should I not face myself ― a wanderer.[1]

Anderson は、最初の妻 Cornelia も、再婚相手の Tennessee も、結婚３回目の妻 Elizabeth も素晴らしい女性であると認めていながらも、彼女たちと別れて a wanderer にならざるを得ないと認識している。Anderson は自分の心の内が分らないのである。

Sherwood Anderson の心の内を見るには、抑圧（repression）され無意識に

押し込められてコンプレックスの基になった幼児の性的体験を精神分析学的に見る以外にない。

フロイトは心的過程を、「意識」、意志的に意識化し得る「前意識」、精神分析による以外は意識化し得ない「無意識」に分けた。その無意識化されたものの意識化を目的としたものが精神分析である。

幼児が母乳を吸うという行為は、単に栄養摂取を意味しているだけではなくて、同時に幼児は母親の胸への接触により快感を味わっているのである。即ち、授乳は人間の性的快感の第一歩を意味している。この授乳期を口愛期（oral phase）という。この段階を過ぎると、幼児は排泄に興味と快感を覚えるようになる。この時期を肛門愛期（anal phase）という。幼児は 3，4 歳頃になると、やがて性器に興味と快感を覚えるに至る。この時期を男根期（phallic phase）と言い、それが 6, 7 歳まで続く。これら三段階は前生殖器段階（pregenital phase）と言われている。

この頃になると今まで身体の部分衝動として発現していた幼児欲求は、次第に統合されて一つの対象愛が生まれる。幼児の対象愛は、まず異性の親に向けられる。これをエディプス・コンプレックス（Oedipus complex）[2] という。特に女児が父親に対する場合をエレクトラ･コンプレックス（Electra complex）というが、一般的にはこれをも総称してエディプス・コンプレックス（Oedipus complex, 1900 年にフロイトが命名）という。

男児は母親になつき依存し、母親を愛し、父親に対しては反抗的競争的態度をとる。女児は逆に父親に愛を向けるのである。この時期は 5 歳をもって頂点として、その後幼児は次第にこの幼児性を克服する。そして、6, 7 歳になると、男児は母親に愛されんがためには父親のような人間にならねばならぬと考えて、父親を模倣し父親に近づくのである。女児は逆に母親を模倣し母親に近づくようになる。こうして男児は父親と、また、女児は母親と妥協してエディプス・コンプレックスを脱却するのである。

斯くして、幼児の性衝動を発現させるリビドー（libido）は準備的段階、

即ち、口愛期、肛門愛期、男根期の段階を通過進展し生殖期段階に至るのである。その場合、子供のリビドーが準備的段階を順調に通過進展して行けば、正常な人間として思春期には正常な性発現をみることができる。しかし、ここで注目すべきことは、各個人には体質的要因と環境的要因とにより、個人差が生じる場合があるということである。即ち、リビドーの一部がある準備的段階を通過進展することができずにその個所に定着する場合もあるだろうし、また、リビドーのほとんど全てがその段階を通過することができずに定着する場合も考えられる。例えば、リビドーが口愛期に定着すると口愛性格（oral character）になる。口愛性格の人は依存的な愛情欲求を抱いたり、口達者になる、所謂「自己愛的な人格」となる。リビドーが肛門愛期に定着すると肛門愛性格（anal character）になる。その特有な性格傾向としては、倹約、頑固、几帳面、礼儀正しさ、従順、服従、サディズム（躾をする母に対する攻撃と反抗に由来）、マゾヒズムなど。

リビドーが準備的段階に定着すると、神経症（neurosis, 心因性に生じる心身の機能障害）の素因になったり、倒錯的性欲として発現することもある。更に、注目すべきは「同性愛」である。エディプス・コンプレックスの段階で、男児が女性性（feminity, femininity）に向かう強い本能的素質を持っている場合には、去勢不安に脅かされると、母親を愛して父親と競争するよりも、自ら進んで父親への敵対心や男性らしさを放棄し、母親と同一化することによって父親に愛されようとする退行的な口愛願望を強く持つようになり、男性性は失われて同性愛傾向が強まるのである。

Sherwood Anderson を精神分析するために必要と思われる彼の生活史を、特に誕生から幼児期に至る過程をみてみよう。

Sherwood Anderson はオハイオ州プレブル郡キャムデン（Camden）で、1876 年 9 月 13 日に生まれた。Sherwood は第三子として生まれ、結局 7 人の子供が生まれたのである。（しかし、幼少期に一人が死亡、故に子供は 6 人。）それは、農本主義から機械工業による資本主義への移行という

激動の時代であった。父親の Irwin M. Anderson（1845-1919）は有能な馬具製造業者であった。しかし、やがて馬具なども機械量産されるようになり、父親の仕事は急激に減っていった。それと共に、彼は飲酒と饒舌に耽溺していった。キャムデンで馬具店をやっていけなくなると、仕事のありそうな場所を求めて、Anderson 家の居所はオハイオ州の町々を転々と変った。ついに自分の店がもてなくなると、父親は小さな工場で働いたり、ペンキ屋になったりした。1884 年、一家をあげて *Winesburg, Ohio*（1919）のモデルとなったオハイオ州のクライド（Clyde）という町に居を定めた。だが、満足のいく仕事に就くことが出来ず、父親は益々飲酒に耽り、仲間達を集めてはあいも変らぬ饒舌に耽溺していった。そのために、母親の Emma Smith Anderson（1852-1895）が父親に代って一家の支柱にならなければならなかった。Sherwood Anderson の母親は *Death in the woods*（1933）の主人公と同様に、所謂 bound girl であった。彼女は幼少の頃から困窮した状況の中で育ったので、どのような仕事であろうとも金になる仕事であれば忍耐強く行ない、苦しい家計の中で、献身的に愛情をもって子供達を養育した。

Sherwood Anderson は幼児期において、母親に懐き母親を愛し、父親に対しては反抗的態度をとったのである。その後、普通ならば、男児は母親に愛されたいという願望のために、母親が愛している父親のような人間にならなければならないと考え、次第に男児は父親に近づき父親を模倣するのである。しかし、Anderson 家においては、父親は家族を顧みないで飲酒にふける利己的な男であるために、夫婦間の精神的絆はなかったと考えられる。従って、Sherwood Anderson は、父親を軽蔑し、母親を我が物にし、母親の愛だけを享受して育ったに相違ない。それ故に、彼は母親への依存性が強く、母親と自分とを同一視（identification）し、母親の考え方、感じ方、行動の仕方等をそのまま取り入れようとしたのである。故に、母親が賃仕事に精を出すように、彼は金になることならどんなことにでも飛び付

いてアルバイトをやり、しかも、そのやり方が機敏で抜け目がなかったので、町の人達から“ Jobby ” Anderson と呼ばれたのである。1880 年代から 1890 年代の初めにかけては、Anderson 家の収入は不安定であったために、子供達も母親を助ける傍ら、様々なアルバイトをして小学校も欠席しがちな中でどうにか続ける。特に、Sherwood は母親に感化され、あらゆる賃仕事を――例えば、道路の清掃、他家の庭の芝刈り、新聞の売り子、馬の世話、ポップコーンやピーナッツ売り、使い走り、牛追い、下僕、配達少年、給仕、トウモロコシの茎切り、キャベツ畑の労働、自転車工場のアルバイト、印刷屋のアルバイト、診療所の清掃等――精力的に引受けたのである。

1895 年 5 月 10 日に、一家の支柱であった母親 Emma が過労のために肺結核にかかって亡くなると、父親 Irwin に甲斐性がないために、やがて一家は離散してしまった。母親の死は、18 歳の Sherwood Anderson にとって特に痛ましく、まるで恋人か愛する妻と死別したかの様に悲しみは大きかったに相違ない。

父親 Irwin はオハイオ州を去ってインディアナ州に行き、1901 年に Minnie Stevens（ca. 1870-1939）と再婚する。1903 年 3 月 21 日に男子 Harold が生まれた。しかし、1928 年に 25 歳という若さで死去している。父親は 1919 年 5 月 23 日に死亡したが、その死因は再婚して住んでいた旧兵舎の屋根のペンキ塗りをしていて梯子から落ちたことに拠るものであった。1919 年は、皮肉にも、 Sherwood Anderson の最高傑作である *Winesburg, Ohio*（New York: B. W. Huebsch,1919）が出版された年である。

Sherwood Anderson は自分の父親が多弁家で話をすることが非常に上手であったことを認めていた。次第に Sherwood はそういう父親に対して親しみを感じ始めたが、同時に、一家の支柱としての重荷を母親に背負わせ、家庭を顧みない父親に対して、Sherwood は憎しみと軽蔑の念を抱かざるを得なかった。ここには情動の両価性、所謂 ambivalence をみることができる。

父親と同様に Sherwood Anderson もまた story-telling の才能を持ちあわせていたことが Anderson の友人 Ben Hecht によって証明されている。即ち、彼は Sherwood Anderson について次のように述懐している。

> You couldn't tell whether Sherwood was lying or telling the truth when he spoke of himself….He talked of himself like a man strumming a mandolin. The strumming was not for listeners. He liked to hear stories about himself. I don't know if he talked about himself out loud when he was alone. But that's what he seemed to be doing when others were around.[3]

Sherwood Anderson は非常に話好きで、自分の人生を語る時には、imagination と fancy を十分に織りまぜて語っていたのである。即ち、彼のリビドーは口愛期に定着しており、彼は口愛性格の持主であった。

口愛性格としては、獲得した対象を確保する欲求、しがみつきたいという欲求、快楽主義傾向、娯楽欲、好機嫌、情操豊かであること、気まぐれ、対象を失うのではないかという不安等が考えられるが、その反面、孤独、隔絶、放棄、放浪、焦燥、性急、外界との非現実的な結合等も表裏一体として包含しているのである。

Sherwood Anderson が居所をシカゴ、クライド、ニューヨーク、クリーヴランド、エリリア、ニューオーリンズ、マリオンなど転々と変えたのは、取りも直さず口愛性格に特有な放浪癖に原因を見ることが出来る。

Sherwood Anderson の長編小説には、多すぎると思われるほどのエピソードが鏤めてあり、そのために全体としての構成力の弛緩を招いている。ところが、エピソードの一つ一つについて眺めてみると、そこには実に精彩がある。即ち、Walter Allen も指摘しているように Anderson が描くのは「長編小説よりも短編小説向き」である、と言える。それも、リビドーが口愛期に定着した口愛性格特有の「放浪癖」に拠るものである。

さて、Sigmund Freud（1856-1939）理論を通して、Sherwood Anderson の生活史を見ると、ここに Freud の主要命題の一つである “Oedipus complex” の典型的な実例があることに気づく。

所謂 Sherwood Anderson のリビドー（libido）は “Oedipus complex” の段階に定着しているのである。リビドーがエディプス・コンプレックスの段階に定着したまま成人した場合、その男性の恋愛態度[4] における特徴は、次の通りである。

1. 彼の性発現は性倒錯（sexual perversion）か、あるいは母親に似た性格を持つ女性にみる。
2. 彼は既に思春期になっても、その対象を二つに区別する。一方では彼は対象を高尚な、純潔な女として、それを性交と結びつけて考えるというような事は思いもよらないものとして考える（所謂、プラトニック・ラブ）、他方ではただ性欲の対象であるに過ぎない普通の女を認識すること。
3. 彼はその恋人に対して非常に忠実であって、決して恋人から離れられない心情を抱いているにも拘わらず、他方では幾多類似の恋愛事件を次から次へと惹起して行く傾向を持っていること。
4. 彼は誰か所有者のある女に対して興味を持つ。その女と関係を結べば、必ず「憤る第三者」のいるような、そういう女に対して強く引かれること。
5. 性的に悪い評判のある女に興味を持つこと。
6. そういう悪い評判や悪い境遇にある女を救うことによって、その女を恋人とすること。

Sherwood Anderson のリビドーがエディプス・コンプレックスの段階に定着していることに、彼は気がつかないまま 64 年間の生涯を終わった。彼は 4 人の女性と結婚し、1 人の女性と所謂プラトニック・ラブを経験し

たが、彼女達は誰も彼を憎んではいなかった。否、憎めなかったのであろう。リビドーがエディプス･コンプレックスの段階に定着しているが故に、Anderson には優柔不断の陰があり、それを返せば、所謂甘えの要素を彼女達が見抜き、母性愛（maternal love）を意識したのであろう。これは勿論、母親への依存を意味している。彼は彼女達に母親の imago（C. G. Jung, 1911）を無意識的に追い求めていたのであろう。

Sherwood Anderson は 64 年間の生涯に、結果的には 4 人の女性と結婚し、１人の女性とプラトニック・ラブを経験したことは既に述べたが、彼が如何なる状況で彼女たちとの関係が成立したのか具体的に見ていく。

Ⅲ．初婚の妻 Cornelia Lane

Sherwood Anderson の初婚の相手は Cornelia Lane である。彼女は、1854 年にトリード（Toledo）に設立された靴問屋の娘で、1877 年 5 月 16 日に生まれた。彼女は、以前にクライドに住んだことのある Mrs. Jennie Bemis Weeks から 1903 年に Sherwood Anderson を紹介された。

Cornelia は 1900 年 6 月に Western Reserve University を卒業したが、1904 年 5 月 16 日の結婚まで、彼女が一体何をしていたかは明らかではない。しかし、*The College Folio* の 1901 年 11 月号 76 ページと、1902 年 5 月号 326 ページによると、1901 年 6 月から 1902 年 3 月まで、ヨーロッパにいたと記されている。そして 1901 年 11 月にはパリに滞在していたこともそれに記されている。

Cornelia は、Anderson と結婚するにあたり、彼が非常に貧乏な家庭に生まれたが、母親は美しい悲壮的なタイプの女性で、父親は無責任なお人好しであったということも、予め知っていたようである。また、彼が新聞の売り子をしていたことも、更に彼が物事に非常に熱中するタイプであるということも、彼女は熟知していた。

1906 年 9 月、Anderson は United Factories Co. の宣伝販売会社の社長に

なる。

Anderson は Cornelia と一緒に Stevenson の作品をよく読んでいたが、次第に Carlyle, Hazlitt, Tolstoy, Dostoevsky, Borrow 等の作品へと変っていった。彼女は Anderson に diction や rhetoric 等について熱心に　教えたようである。

1907 年 8 月 16 日に長男 Robert が、その翌年 1908 年 12 月 31 日には次男 John が、そして 1911 年 10 月 29 日には長女 Marion が誕生した。

Anderson はアメリカの物質主義の好況時代の波にのって、実業家として一廉の成功をおさめたけれども、徐々に神経衰弱（neurasthenia）になり、1912 年 11 月 27 日に自分の会社から姿を消してしまった。2, 3 日後にクリーヴランドで発見されたが、その時彼は一時的に、健忘症（symptom of amnesia）を患っており、そのまま近くの病院に運ばれた。退院後、彼は自分の会社には戻らずにシカゴに行き､広告会社に勤めることになった。1913 年に家族をシカゴに呼び寄せたが、その年の末に彼は再び神経衰弱症状を呈した[5] ために、その翌年の夏、彼は家族と別居した。Cornelia はインディアナ州の学校教師になって､3 人の子供を連れてシカゴを離れた。

Cornelia には、忍耐と自己犠牲の生涯を送った Anderson の実母の姿を見ることができる。Anderson は Cornelia に自分の母親のイマーゴを認知し結婚したはずであったが、Anderson のリビドー がエディプス・コンプレックスの段階に定着しているが故に、既に述べたように、Anderson は「その恋人に対して非常に忠実であって、決して恋人から離れられない心情を抱いているにも拘わらず、他方では幾多類似の恋愛事件を次から次へと惹起して行く傾向」を持っているのである。即ち、Anderson は自分自身の不完全さを棚に上げておいて、完全な女（母）の観念をもって恋愛に臨んでいるために、永久に自分の期待は満たされることがないのである。Anderson と Cornelia の離婚は 1916 年 7 月 27 日に認められた。それ以前に、彼は Cornelia の親友である Tennessee Mitchell と既に恋愛中であった。

彼と Tennessee の間で結婚の意志が固まった後に、彼の方から Cornelia に離婚を申し出たのである。Cornelia は理知的な女性で、Anderson と Tennessee との関係を直ぐに察知し、彼らの結婚を心から祝福したのである。

彼のリビドーがエディプス・コンプレックスに定着していることを、彼は認識していないので、離婚に対してあまり罪の意識はなかったが、生まれた 3 人の子供と別れたことは、とりわけ深い罪悪感を覚えたに相違ない。1923 年 12 月、Nevada 州の Reno から Roger Sergel 宛に出した Anderson の手紙に彼の心情がよく表われている。

> Well, you have an understanding wife and your children. That is much. I also have three children, but cannot live where they are. I see them but two or three times a year.[6]

Anderson は Cornelia との間に生まれた子供達が学校に入学した頃から、最愛の情をもって、Cornelia とも、3 人の子供達とも文通を始め、彼が死ぬまでそれは続けられた。Cornelia と子供達は、その後 Anderson が結婚した女性たちとも生涯良い友達であった。

長男 Robert は Anderson の跡を継いで、*Smyth County News* と *Marion Democrat* の editor となったが、1951 年マリオンで死去した。次男の John はシカゴの Kennedy-King College で教師をし、長女の Marion は Russell Spear と結婚してノースカロライナ州のマディソン（Madison）に住み、夫と共に *Madison Messenger* の編集をしていた。Cornelia と Anderson の 4 人目の妻 Eleanor Copenhaver の 2 人はヴァージニア州マリオンで、ある一時期一緒に住んだことがあり、Cornelia が 1967 年 6 月に死去する迄、彼女達は非常に仲良しであった。

Ⅳ．2 度目の妻 Tennessee Mitchell

Anderson の再婚の相手は、彼が *Poor White*（1920）を献じた Tennessee Mitchell である。Tennessee Mitchell は 1874 年 4 月 18 日生まれのミシガン州出身でピアノ調律師と音楽教師をして自活していた。彼女を Anderson に紹介したのは Cornelia である。彼が 1913 年にエリリアからシカゴに転居して Chicago　Renaissance に加わった折に、Tennessee は小説を書くように彼を勇気づけた。

彼が Tennessee と結婚したのは、1916 年 7 月 31 日であるが、それは彼と Cornelia が離婚してわずか 4 日目であった。Cornelia は彼らの結婚を祝って、子供達にプレゼントをさせた。Anderson と Tennessee は新婚旅行中に Cornelia と子供達を訪問し楽しく過した。その翌年の夏には Cornelia と子供達が Anderson と Tennessee を連れ立ってシャタギー湖に旅行している。

Tennessee は彫刻と創作に興味を抱き始め、性格的にも明朗でユーモアがあったので、芸術家達にも人気があり、彼らにとって彼女は理想の女性であった。

Tennessee はアラバマ州モビール（Mobile）の近くで彫刻を始めた。彼女の最初の作品は、Anderson の *The Triumph of the Egg*（1921）のイラストレーションであり、彼女の “clay　poople” は常に *Winesburg, Ohio* 的な特徴があった。[7]

Anderson は無意識的に実母のイマーゴを追い求めているが、Tennessee にその影を見出せず、1922 年 Tennessee に離婚を迫る。しかし、彼女はそれを拒否した。彼は、一方的に Tennessee と別れてシカゴを去り、ニューヨークに行き、そこで Elizabeth Prall と出会う。Tennessee は離婚に反対であるため、彼は 1923 年 2 月から 1924 年 4 月迄、離婚裁判で有名なネヴァダ州リーノーで余儀なく過さねばならなかった。

I was in Reno, Nevada. I was getting a divorce from a woman. I rented a

> little house in a row of many little houses. I had very little money. The woman loved another man. She wanted me to divorce her.[8]

これは、Tennessee との離婚裁判で Anderson が述べたものであるが、Tennessee には他に愛する男がいたという証拠は何もない。しかし、Anderson が Tennessee と結婚した情況をみると、彼の離婚請求に使われた文面は一見真実性を漂わせている。何故なら、Anderson と Tennessee との結婚は、彼女と *The Spoon River Anthology* の著者である Edgar Lee Masters とのスキャソダルが表面化しそうになったので、彼女を守るための手段であったからである。このことは、Anderson が生涯を通して親密な友人であった Marco Morrow に結婚後数年して語っている。[9]

Tennessee に対する Anderson の恋愛態度は、先に述べた「性的に悪い評判のある女に興味を持つこと。そしてそういう悪い評判や悪い境遇にある女を救うことによって、その女を恋人とすること」に該当する。

Tennessee の結婚生活は Anderson の利己主義の故に失敗に終わった。彼女は 1924 年 4 月、仕方なく離婚を承諾した。

その後、彼女は誰とも再婚しなかったが、一方 Anderson は Elizabeth Prall と恋愛中で、既に結婚の意志も固まっていた。

Tennessee がその後如何なる生活をしていたのか知る由もないが、1929 年 12 月 27 日付の *New York Times* は 12 ページに “Ex-Wife of Anderson, Novelist, Found Dead.” という見出しで、Tennessee が自殺をしたことを報道している。それによると、12 月 26 日、Tennessee Mitchell Anderson は肺出血で眠るように死んでおり、彼女は Anderson の条理のたたない一方的な理由で、1924 年に離婚させられた、とある。

Tennessee Mitchell は Sherwood Anderson との離婚裁判に勝ちはしたが彼に同情し、渋々離婚することを承知したのである。故に、現実には彼は既に Tennessee の元を去って行ってしまったのに、彼女の内的な幻想の世界

では依然として彼への思慕の情が続き、それによって引き起こされる苦痛が悲哀である。所謂「対象喪失」（object loss）である。それに耐えられなくて Tennessee Mitchell は自殺したのである。

Tennessee は Anderson と知り合う 5 年前に Edgar Lee Masters と恋愛をしたが、その頃のことを Masters は *Across Spoon River*（New York: Farrar & Rinehart, 1936）の Chapter XIV（PP.295-315）で再現している。Masters と Tennessee の関係は、この作品に於ける彼と Deirdre のそれに見ることが出来るが、Tennessee と Deirdre とを同一視することは出来かねる差異も存在している。しかし、Masters は Deirdre を描くにあたり、Tennessee をモデルにしたのだと断言している。具体的に、Deirdre について、「彼女は生まれつき淫乱症で、しかも冷淡で不可思議なとらえどころのない女」である、と Masters は説明している。更に、「彼女は私と離別して数年後に結婚したが、やがて彼女の夫は彼女にひどい仕打ちをして離婚した。後に、彼女は自殺した」と述べている。

Masters は William L. Phillips に宛てた 1949 年 5 月 25 日付の手紙で、Deirdre という女性は Tennessee をモデルにしたものであるということをやはり強調している。

Ⅴ．3 度目の妻 Elizabeth Prall

Anderson の 3 度目の結婚相手は Elizabeth Prall で、彼は彼女に *Tar: A Midwest Childhood*（1926）を献じている。

Anderson が Elizabeth と知り合ったのは、ニューヨークで彼女の経営する Lord and Taylor bookstore であった。彼が Tennessee との離婚の件でリーノーに行った時には、彼と Elizabeth は既に熱烈に恋愛中 [10] で 1924 年 4 月に彼は Tennessee との離婚が成立すると、その後すぐに Elizabeth と結婚をした。

Elizabeth はミシガン大学出身の元教師で図書館学に造詣が深く、知識人

との交際もあり、世話好きな女性であった。

劇評論家で作家でもある Stark Young は作家志望の William Faulkner（1897-1962）を Elizabeth の経営する書店で雇って欲しいと彼女に紹介した。彼女は Faulkner の将来を考えて、彼の処女作を発表出来るように Anderson に頼んでいる。[11] Anderson は Elizabeth の頼みを快諾し、Faulkner の処女作 *Soldiers' Pay* を Liveright に推薦して、1926 年にそれは出版の運びに至った。[12] 1924 年 9 月には、Anderson と Elizabeth はニュー・オーリンズに転居し、その頃から彼は講演旅行を始めるようになった。1926 年 5 月にはリプシン（Ripshin）に転居した。1927 年にはマリオンの週刊新聞 *Marion Democrat* と *Smyth County News* を買い取り、Anderson が自ら編集と執筆を始めた。

1969 年、Elizabeth は Gerald R. Kelly と共著を出版しているが、それは Anderson との結婚生活から離婚後の生活にも触れている。[13] 更には、Anderson と Elizabeth が Stein, Hemingway, Faulkner 等その他有名な作家と交友関係にあったことにも触れている。

Elizabeth は、1924 年から 1933 年まで Anderson の 3 度目の妻であったが、実際には 1929 年 1 月に彼と別居することになった。その時、彼は彼女に自分のもとには二度と戻らない方が彼女のためだと忠告している。

Elizabeth は「無一文の Sherwood Anderson」が好きであったが、離婚理由は Anderson が Elizabeth の水準に合わせることが出来なかったからである。[14]

Elizabeth Prall は Sherwood Anderson を心から愛していたので離婚することに直ぐには納得出来なかったが、彼女は彼に同情して離婚してしまったのである。Elizabeth に対象喪失が起こる。Anderson は現実に喪失されているのに、Elizabeth の内的な幻想の世界では依然として彼に対する思慕の情は続き、生涯消えることはなかったのである。

Elizabeth は離婚後、当時メキシコの Tulace　University で建築学の教授

をしていた William Spratling という友人の居所の近くに転居した。

Elizabeth は、1947 年にある若い人文系の学者に “I really loved Sherwood, but he got tired of me, ….”[15] と語ったそうである。

彼女は再婚せずに 1976 年に死去した。

Elizabeth も Cornelia と同様に理知的でしかも世話好きで包容力があり、Anderson にとって彼女は、彼の幼年時代に Anderson 家の支柱として家族を養い子供達に限りない愛を与えた正に実母的存在であったのであろう、と推測できる。

Anderson は Elizabeth にも、やはり母親のイマーゴを無意識的に追い求めていたのであろう。故に、Cornelia に対すると同様に、Anderson は Elizabeth に対しても彼の心情としては離れ難いが Eleanor Copenhaver と結婚するためには、その犠牲もやむを得なかったのである。

Ⅵ．4 度目の妻 Eleanor Copenhaver

Anderson は Elizabeth と離婚する数年前に、正確には 1929 年にヴァージニア州マリオンで Eleanor Copenhaver と知り合った。1931 年 5 月 11 日付の Roger Sergel と Ruth Sergel に宛てた Anderson の手紙 “I’ve never been able to work without a woman to love…. They are earth and sky and warmth and light to me…. I live by the woman loved.” からは、Eleanor との熱烈な恋愛による至福の境地を覚える。

Eleanor に様々なことで勇気づけられて、Anderson はマリオンで午前中執筆に精を出した。[16] 彼らは親子ほどの年齢差があったが、やがて熱烈な恋をし[17]、結婚を決意した。1933 年 6 月 Anderson は Eleanor の父親 Bascom E. Copenhaver に手紙を出しているが、その中で Eleanor と恋愛中であり、彼女との結婚が最高の幸福だと考えていることや、自分達の結婚を承諾して欲しいと記している。[18]

1933 年 7 月 6 日、Anderson と Eleanor は結婚した。その後、彼は精力的

に *No Swank*（1934）や *Puzzled America*（1935）や *Home Town*（1940）といったエッセイ集や戯曲 *Plays: Winesburg, Ohio and Others*（1937）を出版したり、講演も続けた。1939 年には *Sherwood Anderson's Memoirs* の準備に取りかかり、1940 年には意欲的に執筆した。しかし、Anderson は不慮の事故によりパナマ運河地帯のコロンで他界した[19]ために、その大冊については彼の存命中には日の目を見ることは出来なかった。彼が他界した翌年 1942 年にそれは *Sherwood Anderson's Memoirs* という書名で刊行され、遺言によりそれを Eleanor Copenhaver Anderson に献じている。

Sherwood Anderson's Memoirs の中で、Anderson は "I am reluctant to discuss my marriages." と前置きして *Vanity Fair*（1914-1935）の編集長をしていた Frank Welch Crowninshield（1872-1947）と結婚について話合ったことがある。結婚について Anderson のような考え方をしている男は間違っているし、もっと人生を真剣に考えなければいけないと彼は Anderson に忠告している。更に、Anderson はこの本の中で "My first three marriages each lasted exactly five years."[20] と述懐している。

Eleanor は社会的意識の強い女性で、Anderson もまた自らの幼年期を振り返った時、有能な馬具製造業者であった父親から仕事を奪い取った時代の趨勢、所謂農本主義から機械工業による量産体制へと化していく資本主義を憎まずにはおれず、社会主義ないし共産主義に次第に傾倒していった。Eleanor と Anderson は南部の工場を多く訪れ、労働者やストライキをしている人達を励ました。

Anderson は Eleanor と同じ目的意識を抱いていたために、彼女との結婚生活は彼の過去のそれらと比較すると、おそらく最も有意義で心に張りのあるものであったであろう。

Anderson が Eleanor と熱烈な恋愛をし、結婚をしたのは、彼のリビドーが依然としてエディプス・コソプレックスの段階に定着しているので、無意識的に母親のイマーゴを彼女に求めた結果であろう。

Ⅶ. Marietta D. Finley

Sherwood Anderson が Marietta D. Finley に「ある特殊な感情」を抱いていたようである。それを解明するには、既に見てきた「Sherwood Anderson のリビドーがエディプス・コソプレックスの段階に定着している」という精神分析学的仮説に立ち返らなければならない。

先ずは、Sherwood Anderson と Marietta D. Finley との関連する事柄を見てみよう。

Marietta D. Finley（後の Mrs. E. Vernon Hahn）宛の Anderson の書簡は 1917 年から 1930 年代にかけて約 300 通あり、それらはシカゴの Newberry Library に寄贈されている。[21] ところが、Marietta D. Finley の承諾を得て、Eleanor Copenhaver Anderson の協力の下に、William A. Sutton は 1985 年に *Letters to Bab —Sherwood Anderson to Marietta D. Finley, 1916-33 —*[22] と題して編集出版した。

Anderson が Marietta D. Finley に最初に会ったのは、1914 年の秋である。彼らの交際は約 2 年間続いた。しかし、1916 年 11 月に、Anderson から、今後は文通による交際をしたいと提案され、彼女はそれを仕方なく受け入れる。しかしながら、彼女の本心は Anderson を真剣に愛していて彼との結婚を望んでいた。しかし、彼には全くその気がなかったのである。

Anderson が Tennessee Mitchell と結婚したその 4 年後の 1928 年に、Marietta D. Finley はインディアナポリスの医者 E. Vernon Hahn と結婚した。

Anderson は Marietta を Bab と呼び、*Letters to Bab* に収められた手紙は 309 通である。

Anderson の Marietta D. Finley への手紙の内容は主として自分の妻や子供や著書に関するものである。彼は Marietta D. Finley を M. D. F. と略して *Sherwood Anderson's Notebook*（1926）を献じている。フルネイムでないのは人目を避けてのことであろう。

上記の内容から判断すると、「Anderson は、Marietta D. Finley に対して高尚な純潔な女性として、それを性交と結びつけて考えるというような事は思いもよらないものと考えている」のである。所謂、プラトニック・ラブである。Anderson にとって Marietta は手の届かないまるで夜空の美しく輝く星のような存在なのである。あるいは、Anderson と Marietta の関係において、これを断定することは出来ないが、Marietta は Anderson にとって自分を見守っている母親的存在であったのかもしれない。いずれにしても精神的には、夫婦関係以上の絆が一方的に Anderson から Marietta に向けられていたのであろう。

Marietta D. Finley は、何故 Anderson が Tennessee Mitchell と結婚したのか、どうしても腑に落ちなかったようである。 そして、Marietta D. Finley は、Anderson が 1933 年 7 月に親子ほどの年齢差のある Eleanor Copenhaver と 4 度目の結婚をしたことを知り、漸く「Anderson の結婚観」に疑問を抱き、1933 年 11 月 7 日を最後に Anderson との文通を絶つ。Marietta D. Finley は 1969 年に死去した。

Ⅷ. 結論

Sherwood Anderson は 64 年間の生涯に 4 人の女性と結婚し、１人の女性とプラトニック・ラブを経験した。本稿では、彼が何故、女性遍歴をしたのか、その原因を解明するために、抑圧され無意識に押し込まれてコンプレックスの基になった Anderson の幼少期に於ける性的体験を精神分析し、結果的に Anderson のリビドーがエディプス・コンプレックスの段階に定着していたことが判明した。彼が女性遍歴をしたのも、それが原因である。ただ、Anderson は「フロイトを読んでない」と言い切ったのは真実であった。彼がフロイトを読んでいたら、女性遍歴は無かったであろう。

I hadn’t read Freud (in fact, I never did read him) and was rather ashamed

of my ignorance.[23]

Marietta D. Finley said, “I discussed Freud with him (Anderson), and he knew a lot of the answers. At least he hit the high places in Freud.” [24]

Anderson は自分のリビドーがエディプス・コンプレックスの段階に定着していることに気づかなかったが故に、母親 Emma の死がもたらす対象喪失に伴う彼の悲哀の心理過程には「母親に対する思慕の情を断念する、それに伴う激しい絶望と失意、不安、不信、あるいは思慕の情の断念に基づく新しい対象の発見と再建」など複雑・多岐・交錯なものがあったであろう。ここには、Anderson が生涯固執しつづけた作品のテーマも潜んでいる。即ち、Anderson は精神的には母親と夫婦関係にあったが、彼女の他界を区切りに彼女のイマーゴを追い求めるようになったのである。母親の不幸の原因を考えると、自然に父親への憎しみを誘発し、同時に有能な馬具製造業者であった父親から仕事を奪い取ってしまった機械工業の到来に強い反発を覚えたに相違ない。故に、作品において、Anderson は機械工業以前の社会への復帰を主張し、人間性の回復を望み、人と人との真のつながりをテーマとしているのである。

Anderson の創作活動は 27 年間であったが、Cornelia Lane の指導を受けながら、屋根裏部屋で夜を徹して創作の勉強をした期間を考慮すると約 30 年間の執筆生活であった。彼が小説家を志したのは 1910 年で、処女作は “The Rabbit-Pen”（1914）と題した短編小説である。これは、檻の中で暴れるウサギに託して、ある作家の不毛の愛を象徴した作品である。これは勿論、Anderson の Cornelia に対する frustration であり、自叙伝的要素を多分に含んでいる。ついでながら、Anderson の処女作である長編小説は 1916 年に出版された *Windy McPherson's Son* も、自叙伝的要素を含んでいる。その改訂版が 1922 年に出たが、これは最終章を新しく書き加えた

ものである。因みに言えば、主人公サムは遊覧船で一人の女を知る。彼女は 3 人の子供の母親であるが、売りに出ている酒場を買って経営したいと言う。サムはその女に金を渡し、足手まといになるという 3 人の子供を引き取って、妻の元へ帰る、という梗概である。主人公サムは、言うまでも無く Sherwood Anderson の分身である。これは、取りも直さず、最初の妻 Cornelia Lane と離婚した時に 3 人の子供と別れたことに対する Anderson の後悔の表れであり、せめてもの償いであり、愛情である。Anderson は、それ故に 2 番目 3 番目 4 番目それぞれの結婚相手との間に子供を意識的に作らなかったのであろう。Anderson の頭の中は、現在の妻との離婚に対する罪悪感や不安よりも既に恋愛中の新しい女性との結婚に夢を追い求めていたのであろう。

人間は乳幼時期に精神的な発達段階に沿って身体部が口、肛門、性器など快感帯（erotogenic zones）が順次性愛化（erotization）されていく。つまり幼児性欲の変遷、発達に沿って、身体各部が性愛化されていって快感追求の部位となるのであるが、Sigmund Freud によると生物学的に観察する時、性欲と恋愛とは、発生の時間においては性欲の方が早く、性欲は生物学上、本能の一種である。正に Sherwood Anderson の人生は、Freud の主要命題の一つである “Oedipus complex” の典型的な実例であると言っても過言ではないであろう。

Anderson は *Winesburg, Ohio* を母親 Emma Smith Anderson に捧げており、その献辞には次のように記している。To the memory of my mother, EMMA SMITH ANDERSON, whose keen observations on the life about her first awoke in me the hunger to see beneath the surface of lives, this book is dedicated. 即ち、Anderson は母親譲りの洞察力と人並み外れた直感力とを駆使しつつ、父親に対する情動の両価性と、一家の支柱となり貧困の中で薄幸な生涯を終えざるを得なかった母親に対する憐れみと、更には Anderson 自身

の体験とを土台として人間の心の内面に焦点を当てて小説を書いたのである。

実際、Anderson の作品は自叙伝的要素を多分に含んでいる。即ち、彼は自分の人生に基づいた imagination の世界と fancy の世界とを織り混ぜて書いたのである。小説とは本来 fiction でなければならない。しかし、fiction は creative imagination から生まれたもので、外郭は虚構性を帯びているが、その根底は人生体験に根差している。故に William Faulkner が指摘しているように、作家は経験と観察力と imagination の三つを必要とすることは自明の理である。

自らの経験を imagination により加工し、作品へと仕上げていく Anderson の手法については上述の通りであるから、最後に素材選びの Anderson の観察眼、選んだ素材から主題を導き出す Anderson の imagination について言及しておきたい。単刀直入に言えば、Sherwood Anderson が作品の素材を求めようとしたのは、市井の人々である。つまり人間を規格化する機械文明の社会に即応出来ずに孤独と欲求不満に喘ぎながら、それでも尚、人間性の回復を求めて精一杯に生きようとしている素朴な人々である。アメリカでは、産業主義によって物質が重視され、そのことが人間性の衰微を助長し、やがては人間性の喪失や自己疎外を招きかねない、と Anderson は懸念していたのである。Anderson は彼らや彼らの生活を単に新聞記者的に外面描写するのではなくて、その内面を捉えて、所謂、当時流行をきわめた Freud 理論の援用により、人間の無意識的抑圧から生じる心の歪みや願望の追求を心理描写している。

Sherwood Anderson の epitaph は "*Life Not Death Is the Great Adventure.*" (Anderson's Grave in Marion, Virginia) である。

無論これは非常に意味深長な言葉である。Anderson の宗教観、家族、友人、女性、物質主義、grotesque などの観点から、利他および利己を内包した判断の下に、決定した墓碑銘である。当然ながら Anderson は、Life

というものは希望、未来、光明、夢、再会、活動、前進を、所謂プラス思考を意味しており、Death というものは頽廃、過去への執着、暗黒、退行、失望、断絶、怠惰などを、所謂マイナス思考を意味している、と捉えている。Anderson が 1934 年 7 月 9 日付の Jasper Deeter に宛てた手紙で “People are brought close to each other through some common passion.” と断言していることから判断すると、Anderson の墓碑銘の真義として、筆者は「人間には愛と理解と優しさと同情などを湛えた心情が無意識的に存在しているが故に、互いに他者を思い遣る心が如何に平和をもたらすかを認識し、そうした人間性の回復を願い、それを成就させることこそがアメリカ人に、否世界中の人々にとって最も大切な生き方である。生きること即ち生は食に、性に、生命に、子孫繁栄に通じ、世界平和の希求に通じる偉大な冒険である。換言すると、Sherwood Anderson は、Freud を読んでいないので Oedipus complex を全く認識せずに、自我に忠実に生きてきた結果が女性遍歴であり、ひけらかすことも、気負いも、照れ臭さもなく、懸命に恋愛をし、そこで学んだことが生きる糧となったのである。性は人間の生命の根源であり、エロスこそ生命力の源泉である。生と性を謳歌することは即ち恒久平和への希求に通じる偉大な冒険である」と解釈したい。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

（本稿は、2019 年 4 月 13 日「東風塾主催　研究発表会 (於　熊本市国際交流会館)」、2019 年 7 月 15 日「第 31 回愛知サマーセミナー実行委員会・愛知県私立学校教職員組合連合・NPO 法人アスクネット他主催　第 31 回愛知サマーセミナー 2019」および 2019 年 7 月 17 日「桃山学院大学　国際教養学部主催　公開講演会」でのそれぞれの講演を骨子に加筆・修正したものである。尚、論理の展開上、過去の拙著と重複部分があることを付記する。）

Notes

1　E. は Elizabeth を、C. は Cornelia を、T. は Tennessee を指す。

2　Raymond E. Fancher, *Psychoanalytic Psychology — The Development of Freud's*

Thought (New York: W. W. Norton & Company, Inc., 1973), p. 142. 参照。

3 Ben Hecht, *Letters from Bohemia* (New York: Doubleday & Company, Inc.,1964), p. 87.

4 大槻憲二著 『愛慾心理学 総論篇』（育文社、1971）、pp. 35-122. 参照。

5 拙著 『シャーウッド・アンダソン――精神分析学的作品研究――』（名古屋：明治出版 1979 年 3 月）、p. 24-30. 参照。

6 *Letters of Sherwood Anderson*, (Boston, Mass: Little, Brown, 1953); p. 112.

7 Ernestine Evans, "A Lively Sculptor," *Nation 124* (16 February, 1927), pp. 192-194. 参照。

8 Martha Mulroy Curry, *The "Writer's Book" by Sherwood Anderson* (Metuchen. N.. J. The Scarecrow Press, lnc.,1975), pp. 72-73.

9 William A. Sutton, *The Road to Winesburg* (N.J.: The Scarecrow Press, Inc.,1972), p. 250.

10 *Letters of Sherwood Anderson*, p. 103.
(Letter from Anderson to Lucile Blum, Reno, July 1, 1923) E [Elizabeth] is well. She makes me always happy to be in her presence. l love her as I have no one else. It is rather odd how little influence any of my other women have had on me.

11 Stark Young, *The Pavilion: Of People and Times Remembered, Of Stories and Places* (New York: Charles Scribner's Sons, 1951), pp. .59-60. 参照。

12 フォークナーの処女作 Soldiers' Pay が日の目を見るに至った経緯は次の書簡に見ることができる。
Letters of Sherwood Anderson, pp. 145-146.
(Letter from Anderson to Phil Stone, August 17, 1925) l had a letter from Mr. Liveright, who said that two of his readers were enthusiastic about Bill's novel, the third reader not so enthusiastic. He was to read it himself and decide. I have a hunch he will take it.

I am very sure, however, that Bill's novel neither wants or needs an introduction by me. If Mr. Liveright wants me to write a blurb for the outside paper jacket, I'll be glad to do it, as I certainly admire Bill's talent. The jacket serves the purpose wanted without being a part of the book itself.

13 Elizabeth Anderson and Gerald R. Kelly, *Miss Elizabeth: A Memoir* (Boston: Little, Brown and Co.,1969).

14 Meg Donaghev, "Taxco: The Silver City." *Mexico City News Vistas* (December 8,

1974) pp.3-4. 参照。

15 Kim Townsend. *Sherwood Anderson* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1987), p. 250.

16 Meg Calhoun, “Authentic American Voice.” *Smyth County News* (25 July, 1972), Supplement, p.16. 参照。

17 *Letters of Sherwood Anderson*, p. 220.
(Letter from Sherwood Anderson to Ferdinand and Clara Schevill, Troutdale, Virginia, after July 13, 1930)

Of course I’m in love. A little dark-eyed, Italian-looking woman. I dare say I have to love. I can’t go out indirectly in work unless, as a relief, I can go out directly to one person.

If I don’t do it, nothing sings in me, nothing flames up。

I go stale and limp like an old man’s pecker.

So I love again and work, and it seems to me. I never love before.

18 *Ibid*., pp. 289-290. 参照。

19 1941 年 3 月 5 日に Anderson は Eleanor Copenhaver を伴って、国務省派遣の非公式親善使節として、南アメリカに向ってニューヨークを出発した。ところが，翌 6 日発行の *New York Times* の 23 ページに、“Sherwood Anderson Ill” という見出しで、Anderson がパナマ運河地帯で腹部の激痛のために船から降ろされたということが報道された。更に、7 日付の *New York Times* の 13 ページには “Anderson Has Peritonitis” という見出しで、Anderson の腸の病気は腹膜炎を誘発していることがパナマ運河地帯で公式に発表された。そして、その翌翌日の 9 日発行の *New York Times* の 41 ページには “Anderson Is Dead; Noted Author, 64” という見出しで、Anderson がパナマ運河地帯のコロン (Colon) で腹膜炎のため、その前日 3 月 8 日に他界し、64 歳であったことが報道された。検死の結果については、1941 年 4 月 10 日発行の *New York Times* の 15 ページに “Explains Writer’s Death” という見出しで報道されている。それによると、出発前の壮行会で彼はオードブルについていた木製の爪楊枝をうっかり呑み込んでしまい、それが腸に穴をあけて腹膜炎を誘発した結果の死であった。Anderson の遺体をヴァージニア州のマリオン (Marion) に埋葬するために、1941 年 3 月 18 日、Eleanor は遺体と共にパナマ運河地帯を去った。 Anderson は爪楊枝を呑み込むという不慮の事故によって腹膜炎を誘発し、彼の生涯は呆気ない幕切れとなったが、彼の人生を振り返ってみると、これ程自我に忠実に生きた人も少ないであろう。

20 Sherwood Anderson, *Sherwood Anderson's Memoirs*, (University of North Carolina Press, 1969), p. 7.

21 Anon. "Library Notes." *Newberry Library Bulletin, 6* (November, 1963), pp. 31-32. Marietta D. Finley は手紙の他に *Marching Men* の原稿も同図書館に寄贈している。尚、William A. Sutton は *The Road to Winesburg* の p. vii によると、Anderson が投函した Marietta 宛の手紙は 1916 年から 1931 年の間に 275 通であると述べている。

22 Edited by William A. Sutton, *Letters to Bab —Sherwood Anderson to Marietta D. Finley, 1916-33* —, (University of Illinois Press, Urbana and Chicago,)

23 Sherwood Anderson, *Sherwood Anderson's Memoirs* (The University of North Carolina Press, 1969), p. 243.

24 Interview, Sept. 7, 1962.

エディプス惨劇の不条理性を読み解く
―― ホーソーンの「ロジャー・マルヴィンの埋葬」――

佐々木　英哲

序

「世界と交渉を開くこと」（to open an intercourse with the world）[1] を常に目標として掲げたのは、内気で非社交的な作家 Nathaniel Hawthorne（1804-64）であった。少年時代に父を亡くしたホーソーンは、大学卒業まで未亡人の母、姉と妹と自分との家族 4 人で、母の弟、つまりナサニエルの叔父から金銭的な支援を受けて暮らしていた。その叔父の方針――唯一の男性であった甥を家族の女性達から引き離し、大学に通わせ、卒業後は実業に従事させるべきという方針――に対して、ホーソーンは異議を唱えることは叶わず、叔父、つまり代理の父の意向に沿って動かざるをえなかった。だが、本人が母親に宛てた手紙のなかで、ホーソーンは「どうして女の子に生まれてこなかったのだろう。一生ずっと母さんのエプロンにしがみつかせてもらえたのにね」（“Why was I not a girl that I might have been pinned all my life to my other’s apron?”）（15: 117）と、愚痴をこぼしている。このように代理の父（叔父）からナサニエルが男子であるがゆえに母から引き離され、家庭から外部社会に引きずり出されたのである。いわばエディプス的クライシスを被ったホーソーンは、作品中で息子のポジションにある造形人物にどのようなジェンダーの歪みを反映させているのだろうか。ホーソーンは「父／社会」対「（男子としての）子／個」の関係というテーマを――結論を先取りする形で言わせてもらえば、エディプス的な不条理を――どのように捉えているのだろうか。精神分析に立脚した場合、社会

／（社会の）法律・規律は父親が代表するものと理解されている以上、精神分析批評の末席を汚す論者としては、ホーソーン作品に自ずと触手が伸びる。そして本稿で取り上げるのは、先述したテーマがダイレクトに扱われている好個の作品、「ロジャー・マルヴィンの埋葬」（“Roger Malvin’s Burial”, 1832）である。

以下、第 1 章では、先行研究を振り返り、対象にアプローチする際の本稿に於けるスタンスを提示する。第 2 章では、「ロジャー・マルヴィンの埋葬」が父親的人物の「父性」および共同体の「父権制」を俎上に載せていることを指摘する。第 3 章では作品執筆時代の 1830 年代から福音主義がアメリカ社会に席捲するようになった事実を踏まえ、作品が聖書[2]のパロディと化していることを指摘しつつ、エディプス・コンプレックスが及ぼす負の作用を考察する。そして結論的に、理不尽とも思われるエディプス・コンプレックスを生き抜く意義を力説するホーソーンの姿勢を、明らかにするところまで行論を進めることとしたい。

１．ホーソーン作品と精神分析批評の親和性

ホーソーンの文学的態度および作品創造上の手法は『緋文字』（*The Scarlet Letter*, 1850）の序文に相当する「税関」（“The Custom House”）および『七破風の家』（*The House of the Seven Gables*, 1851）の序文で明示されている。後者によれば、人間の経験にできるだけ忠実に描くのがノベル（Novel）であり、作家自身がある程度、素材を取捨選択し、可能な範囲で加工することが許されるのがロマンス（Romance）であると定義され、自分の作品はロマンスであるという。ロマンスを創造するには、日光で照らされる日常的事物、つまり現実世界の事物と月光を浴びた空想上の事物とが接触し相並ぶようなインターフェース、ホーソーンの用語で言うと「中

間領域」（Neutral Territory）が、必要不可欠である、という。この「中間領域」とは、過去と次々に飛び去っていく現在とが、時間進行と状況変化という物理的法則を免れて混在し、いうなればその双方を瞬時にして捕捉できる結節点に位置する領域である。精神分析の観点から捉え直すと、「中間領域」とは夢の領域であり、無意識界、それも意識化が容易かつ可能な前意識に相当すると考えられる。ホーソーンは無意識の領域に沈潜していたトラウマ的な体験を、意識の領域に至る途上の「中間領域」と呼ぶ領域にまで、つまり前意識まで、積極的に、いや強迫観念のような何らかの要因に促されるがまま、手繰り寄せ、そのうえで潜在する「過去」のトラウマがもつ「現在」的な意義を捕捉しようとしたもの考えられる。また「憑かれた心」（“The Haunted Mind,” 1835）では、まさにトラウマ的過去のおどろおどろしいパワーを、精神分析医としてのジークムント・フロイト（Sigmund Freud, 1856-1939）に先駆けて芸術家として描出してみせたホーソーンの筆力に、驚愕の念を禁じ得ない。

> あらゆる人間の心の奥底には墓場と牢獄が存在するのだが、地上での光、音楽、浮かれ騒ぎなどのせいで、ともすれば我々はそういった墓場や牢獄の存在、埋葬された者達、隠された囚人達を忘れてしまう。しかし時に、特に真夜中に、こういった入れ物の蓋が開かれるのだ。
>
> In the depths of every heart there is a tomb and a dungeon, though the lights, the music, and revelry above may cause us to forget their existence, and the buried ones, or prisoners whom they hide. But sometimes, and oftenest at midnight, these dark receptacles are flung wide open.（10: 148）

このようなホーソーンの創作姿勢に鑑みると、ホーソーン作品の分析に際

して、精神分析学的手法が効力を発揮するのは当然至極であろう。実際、精神分析的にアプローチした先行研究としては、フレデリック・クルーズ（Frederick Crews）による *The Sins of the Fathers: Hawthorne's Psychological Themes* を筆頭に挙げなければならないし、グロリア・シャッソン・エーリック（Gloria Chasson Erlich）の *Family Themes and Hawthorne's Fiction: The Tenacious Web* や、T. ウォルター・ハーバート（T. Walter Herbert）の *Dearest Beloved: The Hawthornes and the Making of the Middle-Class Family* などは、実証的伝記的データを取り込みつつフロイト心理学の方向性をもたせた画期的な論考を展開している。[3]

その一方で、歴史実証主義に立脚し、たとえば本稿で扱う「ロジャー・マルヴィンの埋葬」であれば、ピューリタン入植者による先住民撲滅政策などに作家が批判の視線を向けているとする解釈法も、マイケル・コラクルチオ（Michael J. Colacurcio）の *The Province of Piety: Moral History in Hawthorne's Early Tales* や、リチャード・スロットキン（Richard Slotkin）の *Regeneration through Violence: The Mythology of the American Frontier, 1600-1860* らが展開している。[4] もちろん、「世界と交渉を開くこと」を目指した作家修業期のホーソーンが読者層の中心であった中産階級社会に表立って批判することは、自らの首を絞めることになる以上、共同体のイデオロギー批判はむしろ控えめに終わったはずで、歴史実証主義には限界があるのでは、とする疑義の声もあがるかもしれない。しかし歴史面を切り捨てるわけにはいかない事情が、この作家にはあった。

そこでホーソーンによる作品執筆のスタンスの背景にかかわる歴史的状況を、ここで少し俯瞰してみよう。そもそも成熟した文明社会の西ヨーロッパからピューリタン達は、亡命者、移住者として、17 世紀当時としては無尽蔵といえるくらい豊富な天然資源に恵まれた未開拓の地である新大陸に船首を向けたのだった。ピューリタン達の新大陸への脱出は、本来、信仰の自由を確保するためであったのだが、その信仰そのものが次第に求心

力を失っていき、人々は専ら産業社会の体制固めと（名ばかりの、つまりマイノリティは排除した）民主主義社会の構築に注力することになった。17 世紀から 19 世紀中葉にかけての、このような歴史的変遷を辿ったアメリカ社会にあって、人はどのようにして社会に――こういってよければ父の圏域に――に参入していったのか、という問題を抜きにホーソーンの作家業はあり得なかった。なんとならば､魔女狩り旋風が吹き荒れた 17 世紀、つまり、未だアメリカがイギリスの植民地にあり、アメリカが神権政治体制を敷いていた時代、地元で裁判官を輩出するような屈指の名家がホーソーン家であり、作家は魔女裁判で主導的な役を演じた祖先から受け継いだ黒い血が自分に流れることを、常に意識せざるを得なかったからだ。ユング（Carl Jung, 1875-1961）的には作家は影の自我、その自我の背景にあるアメリカの源に隠された負の歴史と常に対峙していたわけだ。いうなれば父権的アメリカ社会の本質的な側面を、ホーソーンは作品内に描出できる絶好の立ち位置にあったわけだ。アメリカ史といっても、おしなべて歴史実証主義の先行研究が 18 ～ 19 世紀アメリカの帝国主義的姿勢の批判という立場からホーソーン批評を進めてきたのに対し、本稿ではむしろ従来軽視されてきた 19 世紀前葉の文化史的な側面、すなわち信仰復活運動と福音主義にも目配りをする。そのうえで個人の精神的な成長を分析する心理学に軸足を移し、考察を進めていく。

２．父性と共同体の父権制をめぐるタブー

精神分析では医師が権威的な「父」のポジションを占有することの正当性が担保されている。しかし「ロジャー・マルヴィンの埋葬」では、精神治療の臨床ではおそらくタブー視されている問題にも光をあてている。つまり父権的共同体を代表する「父」たる人物の「父性」、そしてその「父」

が象徴する共同体の「父権制」の正当性に疑義の視線をホーソーンは差し向けているようなのだ。別言しよう。ホーソーンは前章で言及した歴史実証主義の知見を導入することで、「父」なり、「男性」なり、「白人」なり、「精神科医」なり、主体の位置に君臨する者の正当性をも容赦なく問うているのだ。ホーソーンはフェミニズムやポスト構造主義と一脈相通じている。よってホーソーンが描くエディプス・コンプレックスは、予定調和の大団円として解消するのではなく、後味の悪いものとなる。作品は歪んで病的な様相を呈したものとなるし、精神分析理論を作品に適用するにも一定の留保がつく。このようなエディプス・コンプレックスに翻弄される父－息子の悲劇をドラマチックに描こうとしたのが、「ロジャー・マルヴィンの埋葬」だと位置づけられる。

さて「ロジャー・マルヴィンの埋葬」のアウトラインをまず押さえておこう。舞台は独立前の 18 世紀前半のアメリカである。先住民との闘いで深手の傷を負った初老のロジャー･マルヴィン（Roger Malvin）と青年ルーベン・ボーン（Reuben Bourn）とが這う這うの体で追手から逃れ、奥深い森に身を潜めている場面から、幕開けする。マルヴィンはルーベンに提案する。つまり二人では逃げ切れないので、状況が落ち着いた時、再びこの原野に戻り自分を埋葬してくれればよく、今はルーベンだけ村に帰り、娘のドーカス（Dorcas）と結婚し、耕作地を引き継ぐようにと、マルヴィンはルーベンに強く勧めるのである。妻となるドーカスの父であり、自分にとっては義理の父となるマルヴィンを置き去りにして自分だけ生き延びることは、父殺しにほかならず、マルヴィンの要請はルーベンにとって到底受け入れられるものではなかったため、当初は躊躇したが、根負けしてしまう。

妻となったドーカスには岳父を置き去りにして逃げたという事実をおくびにも出さなかったルーベンだが､彼には十分に情状酌量の余地があった。実際には敗残兵なのに、村に帰ると、激戦からのサバイバーとして英雄視

されたから、ルーベンは期待された英雄イメージを崩し人々を落胆させるわけにもいかなかったのだ。ただ、ルーベンは岳父との約束を果たせないでいる罪責感から農作業に身が入らず、隣人相手の訴訟に現を抜かしたため、心機一転して再起をはかるべく、夫婦は 15 歳になった息子サイラス（Cyrus）とともに新天地を求め、西部へと向かう。その途上、父は食材探しに息子を狩りに帯同するのだが、鹿と誤認したルーベンは息子を撃ち殺してしまう。そこは偶然にもまさにルーベンが岳父を置き去りにした場所であり、結果的にルーベンは岳父を埋葬しに戻ってくるという岳父との約束を果たすことで、物語は終わる。

「ロジャー・マルヴィンの埋葬」は先住民との戦闘である 1725 年のラヴェルの戦い（Lovewell's Fight）という具体的史実にわざとらしく言及し、作品舞台が 18 世紀であることをことさらに強調する。だが実のところは、19 世紀アメリカ社会を意識して作家は物語を展開しているものと本稿では捉えたい。19 世紀性を読み込む点では福岡和子と論者はほぼ見解を同じくするが、福岡がその論拠を 19 世紀の欧米中産階級社会を特徴づけるジェンダーによる二分割領域（Separate Spheres）とドメスティック・イデオロギー（Domestic Ideology）に求めるのに対し、[5] 本稿ではその論拠を 19 世紀の福音主義（聖書中心主義）に求める。なんとならば、中産階級家庭向けに聖書が売り出され、福音主義がアメリカ社会を席捲したのが 19 世紀であり、後述するように本書も聖書への言及が多々見受けられるからである。以下の考察では、作品の要となる箇所で、作家が頻繁に聖書に言及している事実に注目しつつ、作品に見受けられる父－息子のエディプス問題と父権的共同体社会との関係を解きほぐしていくことにする。

3．エディプス的パロディ劇に改編された聖書

主人公ルーベン・ボーンが犯した罪は少なくとも三つある。すなわち①義父殺しの罪。②妻であり、義父の娘である妻のドーカスに対し、義父にかかわる真実を伝えず、心の内に真実を隠蔽した罪。そして③原野に戻って義父を埋葬する約束を果たさなかった罪。この三つである。まず①～③の罪にまつわる状況をおさえておこう。確認しておきたいのは、ルーベンには二つの選択肢からの選択をマルヴィンから強要されたことである。選択肢とは㋐㋑である。㋐無駄死になるにしても岳父との義を重んじるか。それとも㋑岳父となる人の娘と結婚することで、より生産的な生の可能性を選ぶか。㋑を選んだ結果として父親殺しの罪を犯すに至った。

だが、そもそもマルヴィンのほうから、娘ドーカスを与えようとの申し出があった事実は見逃せない。むしろルーベンは､「誘惑する蛇／父／（偽りの）神」によって唆されたに過ぎない。ルーベンは悪魔の囁きを聞いたのだ。義理の息子となるルーベンを相手に奸計を弄するマルヴィンは、旧約聖書「サムエル記」の狡猾なサウル（Saul）国王を彷彿させる。傲慢ゆえに神から見放されたことを嘆くサウル王は、敵陣ペリシテ側の戦士ゴリアテ（Goliath）を倒し周囲の人望を集めるダヴィデ（David）青年に嫉妬と恐れを抱く。そこで自分の娘ミカル（Michal）を誘惑材料とした。つまり、かつては竪琴が上手いだけの一介の羊飼い少年に過ぎなかったダヴィデを義理の息子とし、王族に加えてやろうという提案である。ダヴィデの（もし潜在的にあるとすれば）虚栄心をくすぐるような提案をサウル王はダヴィデにしたのだ。サウルはこのような奸計を弄してダヴィデを亡き者にしたいと密かに願ったのだ。しかし結局はフェリシテ人との戦闘で深手を負い、自らの剣（sword）で自害しようとしたのがサウルである。ちなみに「歴代誌･上」（10:4）には「サウルは剣を取り、炎の上に身を投じた」（Saul took a sword, and fell upon it.（欽定訳））と記されている。あたかも

サウルのエピソードをパロディ仕立てになぞるように展開するのが、マルヴィンをめぐるエピソードである。マルヴィンは娘ドーカスと大農園を未来のあるルーベンに託し、自らは「敵（先住民／原野）の剣」（the sword of wilderness（9: 345））に倒れるからだ。王国を代表するに値しないサウル王は、ダヴィデにとってロール・モデルとして仰ぎ見るに値しない。サウルと同様に、マルヴィンは（少なくともルーベンにとっては）父親／法／共同体を具現しはするものの、「同一化」に値する男性とは言い難い。

後述するが後期ラカン（Jacques Lacan, 1901-81）に倣えば、父／他者 A（Autre）は斜線付きの Ⱥ であり、Ⱥ なる存在がサウルでありマルヴィンなのである。したがって、厳密に言うとルーベンの罪は本章の冒頭で述べた①（父殺し）ではなく、付随した罪（②及び③）となるのだろうが、心理的な次元ではルーベンの父殺しというトラウマ的記憶である①は不完全にしか抹消できない。ルーベンは①を認めようとしなかったため、合理化の罪②を犯し、さらには 18 年間もの間、義父を埋葬しようとしなかった罪③を犯すことになったのだと推察できる。フロイトの言う「喪」の作業を実践しなかった罪が、罪②であり③なのだとも言えよう。以下の考察では、本作品に溢れる宗教的メタファーを精神分析的次元に落とし込んで作品解釈を続けよう。

まずは①の負の効果であるが、それは物理的には犯していない行為が、心理的にはその行為を犯したものと認識されるために生じる効果である。いや正確を期すと、自分はその行為を犯していないと「自我」の力で自分を納得させようとするものの、「超自我」がそれを許さないために生じるネガティブな効果である。そのため妻をはじめ村人達から、先住民との激戦を見事にくぐり抜いて生還した英雄だと称賛され、引くに引けない状況になり、妻や村人に真実を告げることができなくなってしまったのである。実践できなかった②および③の「喪の作業」であるが、「生きている人間ばかりでなく死者とも戦う風習」（the customs of the Indians, whose war

was with the dead as well as the living（9: 344））が先住民にあると信じられていたことを引き合いに出し、ならば危険を冒してまでも無理に戻るべきではない、と考え義父と約束した埋葬の約束を実行に移せないでいる自分を、ルーベンは都合よく合理化している。義父を置き去りにした場所に辿り着くのは、もはや不可能だろうと勝手に合理化するわけだ。なるほど確かに意識の領域では義父との約束を反故にしようとしている。しかし無意識の領域から聞こえてくる声――森の奥に進み、成し遂げなかった［弔いの］誓いを実行せよ、と命じる、自分だけにしか聞こえない声」（“a voice audible only to himself, commanding him to go forth and redeem his vow”（9: 350））までは、かき消すことができず、ルーベンは無意識および前意識を横断する良心（いわゆるフロイト的な超自我）の要請に基づいて罪を贖うことになる。

一般的に未開拓の原始林は、文学作品に於いて「心」「無意識」の象徴として描かれることが多いが、特に成熟した社会形成に後れを取った歴史の浅いアメリカでは、その傾向が著しい。アメリカではその歴史的地理的特異性により、個人は己の内面を凝視するよう圧力が加えられる。ホーソーン文学の場合、未開拓の森とは悪魔として表象されるアメリカ先住民が跳梁跋扈する場であり、自身の暗黒の内部に拡がる罪深い心の象徴なのである。

したがって「森」への出立とは、「無意識」の深みに自ら沈潜することであり、「無意識」との邂逅を果たすことであり、こう言ってよければ隠蔽した「悪（罪）」を認識することである。「無意識」と和解を果たすこの所作は、ユングが言う所の「個性化」の作業に相当するのだろうが、ユングの「個性化」にはポジティヴな意義が付与されているのに対し、本作に於けるルーベンの「個性化」は悲劇的であり、無意識との和解があったとは到底言い難い。[6]　かつて義父となるマルヴィンに埋葬の誓いを立て、そこに義父を置き去りにした奥深い森にはえた一本の樫の木（Oak）の下に

いた息子を、あろうことか鹿と取り違えてルーベンは撃ち殺した。撃ち殺された息子の上に樫の枯れ葉がはらはらと舞い落ちた。こうして息子と義父を同時に埋葬するという悲劇的な形で、義父との約束を成就したのである。

さて問題となるのは樫の木である。金城盛紀が指摘するように、「正義の神、自由・解放の神…の御心がかなえられたとき」、[7]「彼ら［虐げられ悲しむユダヤの民］は輝きを現すために植えられた正義の木と呼ばれる」と「イザヤ書」第 61 章３節で記されるその「正義の木」こそが、まさに樫の木なのである。神により解放された信仰心あついユダヤの民は、［繁栄を約束された］「正義の樫の木」として表象されるのだ。そのようないわくつきの樫の木のもとで息子を殺害し、ルーベンは義父を弔うという約束を果たし、ようやく義の人となり、罪責感から解放された（のかもしれない、と今は暫定的に言っておき、後ほど修正をかけることにしよう）。

次に刮目したい箇所は、「そのときルーベンは心を打たれ、涙が岩清水のように迸り出て」（Then Reuben’s heart was stricken, and the tears gushed out like water from a rock（9:357）.）、「彼の罪は贖われ、呪いは晴れた」（His sin was expiated, ― the curse was gone from him（9: 360）.）、という物語結末部である。この描写からは「出エジプト記」に於いて、喉の渇きと不平をかこつ民をどのように宥めたらよいか、なす術もなくモーセが途方にくれていたとき、神がモーセに救いの手を差し伸べた、という描写――「私はホレブの岩の上であなたの前に立つ。あなたがその岩を打つと、そこから水が出て、民はそれを飲む。」（出 17:6）[8] ――が想起される。なるほど、最終的にはルーベンの救済が暗示される結末となっているが、それは愛息サイラスを自らの手で殺めるという高い代償を払ったうえでのアイロニーに満ち満ちた救済である。

ルーベンの姓であるボーン（Bourne）とは「小川の近くに住む人」[9] を意味するのだから、旧約聖書「詩篇」に記載のある「流れのほとりに植え

られた木」を想起させる。「その人は流れのほとりに植えられた木のよう。時に適って実を結び、葉も枯れることがない。その行いはすべて栄える。」（詩 1: 3、強調筆者）――このような栄光からルーベンは縁遠い。

ルーベンが救済されたのかどうか、つまり父親殺しの罪の意識から解放されたのかどうかは、やはり判然としない。そもそも、ルーベンの息子の名前、サイラスは、「イザヤ書」に登場する人物で、ペルシヤ王キュロス（Cyrus）を皮肉な意味で想起させる。キュロスはユダヤの民をバビロン捕囚から解放するのに尽力した、とされる。一方、サイラスは父であるルーベンの心に重くのしかかっていた耐え難い罪の意識から父を解放した。しかし、引き換えに命を落とした。父のために自分の命を差し出したのである。妊娠は生理的に決して不可能ではないが、ルーベンの妻ドーカスは子供をあらたに授かる当時の平均的な年齢をもはや越えており、結果的にアメリカ発展の基礎を築く族長などとは程遠い人間として残された人生を生きていかなければならないルーベンの定めが、こうして明らかになる。その定めとは救済ならぬ救済である。

未開の原始林に分け入った直後のルーベンは、当初、意気揚々とし、将来的には「年をとって、［森の中］で、民族の父、国民の父、来るべき強力な国の創始者となるだろう」（[A]nd when hoary age . . . and found him and found him there, it would find him the father of a race, the patriarch of a people, the founder of a mighty nation yet to be（9: 352））と、楽観視していたが、事態はルーベンの仄かな期待とは裏腹の方向に向かうのである。指導者どころか、父にすらなれなかったのである。

旧約聖書の「詩篇」で、モーセと彼に率いられたユダヤの民が言及されている以上、つまり「詩篇」がユダヤの共同体を意識している以上、ホーソーンもルーベンもその一構成員となるピューリタン共同体の存在を意識していたはずだ。いや「詩篇」では意識されない共同体の残虐性をもホーソーン／ルーベンは意識していたはずだ。史実としてピューリタンの記録に残

るラヴェルの戦いは、ピューリタン入植行為として美化され、その正当性が強調されており、事の真相を描写するものではない。いやむしろホーソーンが本作品を出版した 1832 年といえば、先住民を虐殺したラヴェルの戦い 100 年祭がその 7 年前に盛大に催され、その余韻は冷めないどころか、人々のナショナリズムの意識を大いに高揚させ、さらに若きホーソーン青年が憧れたアンドリュー・ジャクソン（Andrew Jackson, 1767-1845）大統領（在職 1829-37）が 1830 年にはインディアン強制移住法を議会に通したのだから、記録された先住民との「ラヴェルの戦い」はますます神話化の度合いを強め、史実とはかけ離れていったものと推察される。そしてホーソーンは「正典」とされる歴史の虚構性を白昼のもとにさらけ出す……のではなく、月光が照らす「中間領域／ロマンス領域」に「史実」を滑り込ませるのだ。

そもそもピューリタン達は新大陸の原野に、神から約束された地であるカナン（Canaan）を見出した、という固い信念を抱いていたとされる。ピューリタン達は新大陸という地上にあって神の王国を建設するミッションを負っているのだ、とする予型論的な発想は、牧師による説教、民間のバラッドやフォークロアの形をとってアメリカ社会に浸透し、19 世紀中葉に本格化する帝国主義的な領土拡張運動（「明白なる神意」Manifest Destiny）の下地となる。ホーソーンもこのようなアメリカ的特殊性を十分に意識していたはずである。

Rembrandt,“Sacrifice of Isaac”, 1635.

そういえば「創世記」（15:18-21）

では神が族長アブラハム（Abraham）に約束の地を与えたことになっている。一方、「ロジャー・マルヴィンの埋葬」では、ルーベンが（神ならぬ）岳父マルヴィンから広大な土地を相続したものの、農作業に身が入らないため、土地は荒れるに任せることになった。敬虔なアブラハムは神の命に応じて、年老いてようやく授かった子供イサク（Isaac）さえ、生贄として神に差し出すことも厭わなかった。しかしアブラハムが息子を手にかけようとしたその直前に、神は天使を遣わしアブラハムの手を止めた。（図版はレンブラントによる「イサクの燔祭」）

翻ってルーベンも、神ならぬ義父マルヴィンとの約束を果たすため、結果的に一人息子のサイラスを義父に差し出した。アブラハムのケースとは異なり、いやアブラハムのエピソードのパロディとして、ルーベンは本当に息子を殺してしまった。アブラハムは人類の父とされるが、一人息子を失ったルーベンはアメリカ西部開拓の族長はおろか、一家族の父にもなれなかった。ルーベン（Reuben）の原義は「息子を見る（behold a son）」[10]であるというが、最後にルーベンが鹿と見誤って息子を見たのは、自分のせいで命を落とした息子の姿であったのだから、なんとも皮肉なことだ。ちなみにルーベンの妻ドーカス（Dorcas）は、“deer”（鹿）・“doe”（雌鹿）あるいは “seer”（見る者）[11]と言う意味であるから、鹿と間違えられて撃たれた息子を夫と共に見る者として、皮肉な意味で名は体を表す、と言わざるを得ない。

確かに、作品執筆時の 19 世紀家庭第一主義なるドメスティック・イデオロギーを一世紀先んじて実践したドーカスへの顧慮をないがしろにしたルーベンのエゴイズムは、フェミニスト達が糾弾するように、批判に値する。ルーベンは妻に対し、実質的に三行半をつけてしまっている。ルーベンの関心はもっぱら一人息子のサイラスである。しかしルーベンは美青年のサイラスに自分（の一部）を見ようとしているナルシストで、独立した人格をもった息子として息子に愛情を注いでいるのではない。だが

ドーカス本人もエゴイストである。そしてドーカスもまた、夫のエディプス・コンプレックスに基づくエゴイズムを助長している。「ドーカスがさも重大な情報であるかのように、今日は五月の十二日だわ、と言った」（Dorcas mentioned, as if the information were of importance, that it was now the twelfth of May（9: 354））あとに、「夫はぎくりとした」（Her husband started（9: 354））とあるが、ドーカスのこのわざとらしい物言いは、私の父の命日を忘れてもらっては困る、と夫に暗に念押しする、辛辣な当て擦りに他ならない。ドーカスはエレクトラ・コンプレックスに苛まれているのだ。そして「母としての誇りで胸を一杯にして笑い」（laughed in the pride of a mother's heart（9: 358））、「私の素敵な若い狩人さん！」（"My beautiful young hunter!"（9: 358））と、一人、悦に浸りほくそ笑むドーカスの場合、父を亡くし、父の代理として現れた夫ルーベンからの愛は冷えきっている。夫が息子を誤射したとき、何も知らないドーカスは鼻歌まじりに夫と息子とために健気に夕餉の支度をしていた。そのようなドーカスは 19 世紀ならば中産階級に於ける「家庭の天使（Angel in the house）」だと賛美されようし、実際、ささやかな至福に浸っているドーカスは、フェミニスト達に擁護されている。だが、実質的にはドーカスとルーベンは既に仮面夫婦である。有り体に言えば夫婦生活は既に破綻していて、ドーカスは「家庭の天使」などではあり得ない。息子に愛のすべてを注ぐというエレクトラ・コンプレックスの犠牲となる女性というのが、ドーカスのアイデンティティではなかろうか。エレクトラ・コンプレックスの犠牲になった女性は、女性の父の代わりはできない夫から愛想を尽かされ、夫に振り向けられていたリビドーは息子に備給される。結果的に、このような母親は息子のエディプス・コンプレックスを増幅する。ドーカスとルーベンとは悲劇の共犯者なのである。最愛の一人息子を殺害するという不条理は、エディプス・コンプレックスに苛まれる夫と、エレクトラ・コンプレックスを隠し持つ妻が行き着く成れの果てである。

息子サイラスを殺すこと、その息子が母ドーカスにとって父の代理であったとすれば、夫ルーベンは二度目の義父殺しを敢行したことになる。いや、三度、義父を殺害したのかもしれない。なぜならルーベンが（雌）鹿と見（誤っ）て銃を放ったというが、先述したように妻の名ドーカスは雌鹿を暗示するから、ルーベンは妻、マルヴィンの娘を象徴的に殺し、またもやマルヴィンを間接的に殺したのである。救済どころか、さらにエディプス的殺人罪を三度も重ねたのである。これがエディプス惨劇でないとしたら、何と呼べばいいだろう。

だが、このような悲劇的結末を迎えることになったその責務はルーベンだけに負わせてよいはずはない。そもそも義父のマルヴィンといえどもルーベンと同じく、残虐を極めたラヴェルの戦いに参加しており、ピューリタン植民地でこの二人は、少なくとも物語が設定された時点（1725-43年）では、ともに英雄として語られている。ともに二人は帝国主義の片棒を担いだ同じ穴の貉である。ここで語り手による興味深い問いかけを想起したい。それは、「18 年前、その木の葉が美しい緑であったとき、あのてっぺんの枝に括り付けられた小さな布切れがどんなふうにはためいていたかを、ルーベンは覚えていた。いったい誰のせいでこの木は枯れてしまったのか」（Reuben remembered how the little banner had fluttered on that topmost bough, when it was green and lovely, eighteen years before. Whose guilt had blasted it?（9: 357））という問いかけである。語り手が敢えて答えていないその答えとしては、ルーベンの罪であり、マルヴィンの罪であり、先住民との関係を棚上げし、開拓の正当性だけを絶対視する政治的無意識を両者に刷り込んだ共同体の罪であり、共同体のドメスティック・イデオロギーを黙認するドーカスの罪だと答えるしかない。

ポストマルクス主義の旗手と目されているルイ・アルチュセール（Louis Althusser, 1918-90）やミシェル・フーコー（Michel Foucault, 1926-84）によれば、近現代社会に於いて、権力は遍在していることになる。権力は共

同体の中枢に集中するのみならず、ミクロ的に触手を伸ばし、共同体に所属する者、しない者、両者の上に容赦なくその影響力を及ぼすとされる。構造主義者の言うように権力は例えるならば網目状に張り巡らされた言語のようなもので、ポスト構造主義者が言うように権力構造に揺さぶりをかけ、脱構築することは可能だとしても、そこから逃れることは難しい。本作に於いても、マルヴィンやルーベンの無意識の領域にまで共同体の権力が忍び込んでいることは疑いようもないが、これは防ぎようもないため、両者を一方的に断罪するのは不適切だと思われる。また、1980 年代以降、盛んになったニュー・ヒストリシズムやポストコロニアリズムの影響を受け、18 世紀ピューリタン共同体の侵略主義を作家は批判している、とする批評も少なからず見受けられるが、論者にとっては、全面的にという意味では必ずしもこのような論評を容認できるわけではない。作者が批判的なメッセージを織り込んだことは確かだが、本作品を上梓した 1832 年といえば、ホーソーンが未だ二十代で作家修業時代にあった段階である。当時の小説購買層の中心であった中産階級も恩恵を受けている侵略主義への批判を、ホーソーンが前面に押し出していると考えるのは無理があり、ナショナリズムに沸き立つ中産階級に水を差すような真似をすること、つまり中産階級に向けて露骨な批判的メッセージを送り込むことが作家の本望であったとは考えにくい。本稿の冒頭で述べたように内気で非社交的だったとして知られるホーソーンは「世界と交渉を開くこと」（to open an intercourse with the world）を常に目標として掲げていたのだから、交渉以前の段階で中産階級を中心とする世界を敵に回すような姿勢を直截に示すことは、避けた方が無難だと、本人も重々自覚していたものと推察される。だから批判的メッセージは婉曲的に表現するしか方途はなかったのである。結果的にこの作品のメッセージ――ルーベンは救済されたのか、されなかったのか――は伝わりにくくなったという代償はあったが、逆に矛盾した多面性を内包する人間心理の複雑性を描写するうえでは効果的であっ

たかもしれない。

結語の試み

人が逃れ出ることができないのは、フェルディナン・ド・ソシュール（Ferdinand de Saussure, 1857-1913）のような構造主義者に言わせれば言語と言うだろうし、ミシェル・フーコーやジャック・デリダ（Jacques Derrida, 1930-2004）などポスト構造主義者やルイ・アルチュセールのようなポストマルクス主義者[12]ならば脱中心化した近現代のイデオロギーだろうし、フロイトやラカンのような精神分析学者ならばエディプス・コンプレックスと言うだろうが、本稿では逃れることができないエディプス・コンプレックスを生きる、いや生きなければならない人間の宿痾と顛末を、作家はテーマとして描いたもの、とする立脚点に基づき議論を進めてきた。

もちろん精神分析の知見に基づく解釈には一定の留保も必要だ。精神分析学はあくまでも普遍性を追求する。よって父なる座に就く権威者は、身体的属性が捨象された観念上の父、つまり抽象的な神のごとき父である。実在の父というよりイデアとしての父、死後にむしろパワーを発揮し、子供の精神界で命令を下す横暴極まりない父である。父が象徴するのが共同体を律する規範／法であり、共同体構成員が共有する知／認識上のコード／イデオロギーといった抽象的観念である以上、父から具体性／肉体性は捨象されている。現状肯定的だとフェミニストがしばしば批判の目を向けることからも明らかなように、精神分析では父（権的権威）の存在は所与の条件となっており、父親の資質が問われることはない。つまり精神分析界では「父／神（神学的次元での神ではなくメタフォリカルの次元での神）は存在する」なる命題は証明不要の公準ともなっているわけだ。

ところが現実の生身の父は精神分析で前提とされる完璧な理想像を具現

することなどありはしないし、実際の父親も構成員の一人である共同体では、不正義がまかり通り、民主主義からは遠くかけ離れている場合がほとんどだ。心理学に於ける本来的かつ理想的で大文字で表記される「大他者」A（Autre）は当初から欠如しているのである。父なるものを取り込もうにも、あるいは父と「同一化」しようにも、そのような対象は存在せず、存在するとすれば、ラカン流に言って、それは真正度の甚だ疑わしい Ⱥ（Ⱥuthentic）的な存在である。アルファベットのリーダーとしての父なる文字 A（Alef（ヘブライ語））、そして「ヨハネ黙示」（21:6）――「わたしはアルファであり，オメガである。最初であり、最後である」――では神をも意味する A（Alpha（ギリシャ語））は、脱構築されて斜線が入る Ⱥ（Ⱥlpha）となる。聖書をパロディにするホーソーンにとっては神といえども脱構築された Ⱥbsolute な Ⱥlpha のポジションを占める Ⱥ に過ぎなかった。神でさえ、脱構築されるのだから、人間に至っては何をかいわんや、である。よって主体 S ――この文脈では$\not{S}$と記すべきかもしれない――に現前する倫理的なるものとは、サディスティクに振舞う横暴極まりない超自我としての斜線を引かれた Ⱥ（他者Ａならぬ他者 Ⱥ）に他ならない。

ホーソーンは 19 世紀のアメリカを生きた以上、ラカン理論など知る由もなかったが、後期のラカンが理論化した成人の精神界（象徴界）の根幹にある（父権的）権威の虚実を、ホーソーンは半ば（無）意識的に見抜いていた。ホーソーンの後年の傑作『緋文字』を意識して言わせてもらえば、相手の男性を明らかにしないまま赤子を産んだ女性に対し、A なる文字を纏い姦淫 A（Adultery）の罪を犯した事実を人々に知らしめよ、という屈辱的な罰を教会は下したのだが、その教会では A（Adultery）の罪を犯した事実をひた隠しにする牧師が説教をしている。牧師は A（Adultery）の罪をなかったことにしようとしている。つまり牧師は A（Adultery）を Ⱥ（Ⱥdultery）にしているわけだから、父なる神のメッセージを牧師が伝える教会の権威 A（Authority）も、脱構築されて Ⱥ（Ⱥuthority）となる。この

ような欺瞞的なピューリタンが神権制を敷いて基礎を築いたアメリカは、先住民の弾圧という負の歴史を抱えていたから、America は ∅America として表記されねばなるまい。極論すると America は「緋文字」∅ に縮減されるのだ。ここで「ロジャー・マルヴィンの埋葬」に立ち返ると、賞金目当てで先住民に対する頭の皮剥ぎなる蛮行が横行したとして、[13] ∅America の正史ならぬ外史の一頁を刻むラヴェルの戦いに参加したマルヴィンもまた、∅America 同様に脱構築された ∅（∅uthoritative）的存在として、ルーベンに対して「父―息子」の関係性をかろうじて維持していたに過ぎない。

ただ、人は ∅ 側にぶれている現実世界なる物理的空間だけを生きるのではない。エディプス・コンプレックスによって歪められ、ロジカルな時間継起の原則もしばしばかき乱される心理的空間にも身を置くのである。おそらく（非）現実的な世界に身を置きつつ、不条理の心理世界を生きる（あるいは生きようとして空回りする）人間の悲喜劇的な姿を描こうとするのが芸術作品であり、だとすれば、精神分析に立脚する文芸批評が明らかにせねばならないのは、具体的諸条件を勘案しつつ個々の事例に於いて、人をある一定の行動に――こう言ってよければ一見したところ傍目には理解しがたい反復常同行動に――走らせる強迫衝動のメカニズムを解析することである。

本稿の冒頭で触れたようにホーソーンは「世界と交渉を開くこと」をゴールとした。ただ、交渉を開く「世界」とは、自家撞着的な表現になるが、実は現実の世界のようであって必ずしも現実そのものの世界ではなかった。とはいえその世界は現実を逆説的にはより正確に反映していることがこれまでの考察により判明した。その世界はまさしく、本稿第１章で言及した「中間領域」に他ならない。ホーソーンが交渉／作品執筆により取り持つのは、歴史的に実証可能な現実世界と、その裏面に拡がる非歴史的で不可視の潜在的かつ不条理な茫漠たる世界なのである。後者の世界は数学で言うと虚数、複素数のようなものであるが、ホーソーンはそこに人々（他

者達）との交渉（不）可能性を見ようとしたのである。

神によって予め人の運命は誕生以前に定められているとするピューリタンの厳格なる 17 世紀的ドグマ（予定説）は求心力を失い、代わって第二次覚醒運動が幕開けするのが、ホーソーンがこの作品執筆に勤しんだ 1830 年代である。この時代、ピューリタンをはじめとしたプロテスタント各派に於いて、最大公約数としての意味合いを帯びるようになったのが福音主義である。そこに各宗派が合流することになる。福音主義が示すスタンスは、聖書に神の良き知らせを読み込もうとする聖書中心主義の姿勢である。神により生前から運命が定められているとするピューリタンの予定説が威力を失いつつあったとはいえ、このような同時代的状況を背景にホーソーンは福音主義者に倣って聖書を参照枠とし、しかし密かに聖書を――こう言ってよければ「ラカン的象徴界」に匹敵する「神／父による言葉が集積した世界」である聖書を――大胆にもパロディ化しつつ脱構築し、エディプス・コンプレックスに予定説と同じか、それ以上の重みを持たせて作品を描いたものと思われる。理不尽な家父長主義の世界／象徴界なる（言語の）世界をどう生き抜くかという、言葉を生業とする作家におそらく終生つきまとった課題へのアプローチは、本稿で扱った初期作「ロジャー・マルヴィンの埋葬」に於いても、その萌芽を十分に見て取ることができるだろう。作品では描かれていないが、今後、ドーカスとルーベンが夫婦を維持できるかどうかは危惧されるところであるにしても、両者はその後も不条理世界を生きていかなければならないことに変わりはないのだ。

Notes

1. Nathaniel Hawthorne, *Twice-Told Tales*, Vol. X of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Columbus, Ohio: Ohio State UP, 1974), p.58. 以下、

Centenary Edition からの引用は本文中にて括弧内に巻数と頁数を記す。たとえば、この注１であれば、(10: 57) と記す。また “Roger Malvin’s Burial” は、*Mosses from an Old Manse*, Vol. Ⅸ of *The Centenary Edition* から引用する。和訳は筆者による。

2. 本稿でも参考にした先行研究のひとつで、特に「ロジャー･マルヴィンの埋葬」に於ける聖書の言及について中心的に論じた論文は Ely Stock, “History and the Bible in Hawthorne’s ‘Roger Malvin’s Burial,’” *Essex Institute Historical Collections*, 100 (Oct. 1964), pp.279-96 である。
3. 『ナサニエル・ホーソーン研究 ――神話の諸相・書誌――』（東京：旺史社、1981）が詳細に論じている。
   精神分析的解釈では、以下の３点の先行研究は外せない。Frederick Crews, *The Sins of the Fathers: Hawthorne’s Psychological Themes* (New York, Oxford UP, 1966); Gloria C. Erlich, *Family Themes and Hawthorne’s Fiction: The Tenacious Web* (New Brunswick, N.J.: Rutgers UP, 1984); T. Walter Herbert, *Dearest Beloved: The Hawthornes and the Making of the Middle-Class Family* (Berkeley: U of California P, 1993).
4. 歴史実証主義的な先行研究の代表としては少なくとも次の２点をあげたい。Michael J. Colacurcio, *The Province of Piety: Moral History in Hawthorne’s Early Tales* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1984) および Richard Slotkin, *Regeneration through Violence: The Mythology of the American Frontier, 1600-1860* (Middletown, Conn.: Wesleyan UP, 1973). 特に「ロジャー・マルヴィンの埋葬」について、先行研究が主にこれら二つの立場から取り組んできたことを､小林健二は『ホーソーンとその時代――アメリカ文化史のある断面』（東京：立教大学アメリカ研究所、2006）pp.27-28 に於いて明示している。
5. 福岡和子 ,「『ロジャー・マルヴィンの埋』――一つの家族物語」『英文学評論』75 (2003) pp.99-113 参照。
6. 森岡 稔「Ｄ・Ｈ・ロレンス『恋する女たち』をユング心理学で読み解く（Ｉ）―「自己」の探求としての「結婚」」『サイコアナリティカル英文論叢』38 (2018) pp.44-46 にユングの個性化理論が紹介されている。
7. 金城盛紀『聖書の花園』(大阪：桃山学院大学チャペル事務室、2009), pp.22-23。また Virginia O. Birdsall にも同種の研究論文がある。“Hawthorne’s Oak Tree Image,” *Nineteenth Century Fiction*, 15 (Sep., 1960) pp. 181-85.
8. 以下、聖書の日本語訳は、聖書協会共同訳による。『聖書』（東京：日本聖書協

会、2018）。

9. *Oxford Reference: Dictionary of Family Names*, Ed. Patrick Hanks, 12 Dec. 2019, https://www.oxfordreference.com/view/10.1093/acref/9780195081374.001.0001/acref-9780195081374-e-6638?rskey=APpR4j&result=6621.
10. *Bible Hub: Search, Read, Study, the Bible in many Languages*, 12 Dec. 2019. https://biblehub.com/hebrew/7205.htm
11. "Dorcas | The amazing name Dorcas: meaning and etymology" in *Abarim Publications*. 12 Dec. 2019. http://www.abarim-publications.com/Meaning/Dorcas.html#.Xfh4l-R7kvY
12. 構造主義への道を開いたソシュールの言語学理論はフェルディナン・ド・ソシュール『言語學原論』小林英夫　訳（東京：岩波書店、1961）を参照。ポストマルクス主義のアルチュセールについては『レーニンと哲学』西川長夫　訳（京都：人文書院、1974）、フーコーについては『知の考古学』中村雄二郎 訳（東京：河出書房新社、1995）が参考になる。
13. 小林 *op.cit*., pp. 28-29.

結婚劇の二人の犠牲者

―― マーク・トウェインの「ワッピング・アリス」に関する精神分析学的一考察 ――

鈴　木　　孝

序

1877 年、ハートフォード（Hartford）にあるマーク・トウェイン（Mark Twain, 1835-1910）の自宅で、防犯のために取り付けてあった警報機が明け方の決まった時間に作動するという奇妙な出来事が起こる。家に強盗が入った形跡は認められない。不思議に思いながら調査を進めていくと、やがてその警報機の作動が、強盗の侵入を意味するものではなく、トウェイン家で働く女性使用人の一人が「恋人」を招き入れていたために起こったことが判明する。[1] その使用人を尋問していくなかで、純潔を奪った相手には結婚する気がないのだと彼女から訴えられたトウェインは、相手の男を呼び出し、長時間にわたる説得の末、近しい人々を巻き込んでその場で結婚式まで挙げてしまう。トウェインは、すぐさまその日のうちに妻へ数通の手紙を送りこの出来事を報告しているのだが（以下「手紙版」）、さらに二十年経った 1897 頃からこの出来事の創作化に着手、短編「ワッピング・アリス」（“Wapping Alice,” 1898, 1907, 1981）として出版を試みることになる（以下「短編版」）。残念ながらその試みは不首尾に終わったためトウェインはいったんそれを放置するものの、その後もこの出来事は、例えば 1906 年に俳優クラブの集まりで行った晩餐スピーチのなかで言及されたり、翌 1907 年にはトウェインが「日記と歴史の融合形式」と呼ぶ『自伝』（*Autobiography of Mark Twain*, 2015）のなかにも、「短編版」に多少の変更を加えた形で挿入されたりすることになる（以下「自伝版」）。その時点で

トウェインは再度出版を望むべく準備を始めるのだが、その試みはまたしても失敗に終わり、結局その物語は彼の死後にようやく日の目を浴びることとなった。強盗の侵入ではなく、ある女性による密会が原因だったというこの警報機事件に、トウェインは三十年にもわたり固執し続けていたことが分かるだろう。

トウェインは、この出来事を創作化する際、短編として出版を可能にするために「本質的ではない事実」を書き換えたと語っている。[2] その書き換えとは驚くべきことに、「恋人」を招き入れた女性使用人は実は男だった、とするものである。その「秘密」は物語の冒頭で早々に暴露されるのだが、このためにこの物語はにわかに同性同士の密会という、なんとも衝撃的な内容を帯びることになるのである。「性倒錯者」、「異性服装倒錯者」といった興味深いテーマが浮かび上がる一方で、スーザン・ギルマン（Susan Gillman）が指摘するように「文学的価値のほとんどない二流の作品」という印象も否めない。[3] というのも、使用人を女装した男にしてしまったために、例えば七か月半もの間主人を含めそのことに気づくものは誰もいないとか、結婚を強要された相手の男は「彼女は」嘘をついていると叫ぶだけで、その彼女が男だとは一言も語らない、などの数々の不筋を孕むことになったからである。

執拗なこだわりから事実をもとに創作された「ワッピング・アリス」の最大の謎はその書き換えであることに間違いない。なぜトウェインはそのような非合理的とも思える書き換えを行ったのだろうか。その書き換えによってこの作品にどのような解釈の可能性が見出せるのだろうか。本稿ではフロイト（Sigmund Freud）の自我理論を援用しながら、この作品の新たな解釈の可能性を探ることを試みる。

1

事実に脚色されたその最大の変更については、トウェイン本人が「ワッピング・アリス」が挿入された『自伝』の翌日の口述筆記のなかで次のように理由を述べている。

> There is not an essential detail in it that is fictitious. There is one considerable detail which is fictitious, but it is a nonessential. In that instance I diverged from fact to fiction merely because I wanted to publish the thing in a magazine presently, and for delicacy's sake I was obliged to make the change. But this Autobiography of mine can stand plainnesses of statement which might make a magazine shiver; it has stood a good many already, and will have to stand a good many more before I get through. [4]

「単に雑誌に発表することを望んだから」であり、それに伴う問題を避けるための「配慮のため」であったとするトウェインのこの説明は、しかしながらさらなる疑問を引き起こすことにも通じよう。男に凌辱された女性が結果的にその相手と結婚したとする事実に比して、男同士の結婚という結末で終わるほうが出版するのに好都合だと果たして本当に言えるのだろうか。短編版「ワッピング・アリス」の序文とあとがきを書いたハムリン・ヒル（Hamlin Hill）は、「潔白な男同士の関係のほうが、ことをなしてしまった男女よりも読者は好むものだ、とトウェインは信じていたのかもしれない」[5] と分析し、また、この作品における異性服装倒錯を中心に論じたリンダ・A・モリス（Linda A. Morris）は、「女性使用人がトウェインの家で犯したスキャンダラスな異性間の行為に比べれば、物語のなかに生じたホモセクシャルなつながりのほうが刺激は少ない、とトウェインは考えていたらしい」[6] と述べている。いずれもトウェインの本意を捉えあぐ

ねているように思われる。ギルマンに至ってはトウェインに対して以下の通り明確な疑問を呈している。

> Can he be serious when he implies that readers will be less shocked by homosexuality than illicit heterosexuality? . . . Why would Twain have changed the serving girl to a male transvestite? If not “for delicacy’s sake,” as the Autobiographical Dictation ingenuously claims, then for what fictional and psychological reasons? [7]

こうした解釈が示すように、トウェイン本人の説明が必ずしも納得できるものではなく、書き換えの意図をめぐる謎は依然として残るのだとすれば、出版のための配慮という本人の説明はさておき、その意図に関するまた別の角度からの考察はあってしかるべきだろう。

2

この疑問の解明の第一歩としてまず確認したいのは、『自伝』に記されたこの説明に続いて語られる「事実」の暴露と、件の二人の後日談である。「本質的ではない」事実とはアリスが正真正銘の女性であったことだ、と語ったあと、いわば作品の元となったあの日に起こった真実を振り返ったトウェインはさらに、その出来事があった三年後に偶然出くわしたアリスとその相手から、二人が裕福になり今は幸せに暮らしていると告げられたと記しているのだが、別れ際に相手の男がトウェインにこう伝える。

> “But as to that child, it hasn’t ever arrived, and there wasn’t the damnedest least prospect of it the time that she told you that fairy-tale — and never had been!” [8]

男のこの言葉は、アリスが相手に結婚を迫る根拠にもなった凌辱的な行為など一切なかったことを示唆するものである。強制された結婚ではあったが幸福な家庭を築けたと感謝された一方でトウェインは、子どもを宿した事実はなく、単にアリスのつくり話に過ぎなかったと知らされるのである。トウェインはつまるところ、アリスに一杯食わされていたわけである。この後日談に対して前述のギルマンは、「稀代のトール・テイル・テラーであることを自負していたトウェインが同じ嘘つきに打ち負かされるのに我慢がならない」はずであると指摘し、問題となる、アリスを男に変更した理由について次のように述べている。

> Part of the logic of the sex change may be to explain away the problem of how a female could lie as well as Mark Twain does. He（the author）has been fooled by this person who conned him with her tale of a fictitious pregnancy. But men are better liars（hence better storytellers, better authors）— he himself being a champion liar / storyteller. Therefore the person who beat him at this game must really be a man. [9]

トウェインの自尊心が女性に負けることを許さなかったため、そのライバルを男に変えたというのがここでのギルマンの主張なのだが、彼の自尊心が傷つけられたとする指摘は注目に値する。「短編版」であれ「自伝版」であれ、いずれにせよトウェインが「ワッピング・アリス」の創作に取り掛かったのは、当然この新事実を告げられたあと、ということになる。確かに、嘘をついたアリスへの怒りがトウェインにあったとすれば、ギルマンが言うように、自らの自尊心の回復のためにこの作品を創作していったと考えるのもあながち的外れではないだろう。したがって本稿では、そのギルマンの論考に寄り添いながらも、その点について精神分析的な角度か

ら考察しなおしてみたいと思う。その事実をまだ知らなかったトウェインが、警報機事件が起こった当日に手紙で妻に伝えた内容と、前述した新事実を知ったうえで創作された作品に描かれる内容とを比較してみれば、その新事実が創作にいかなる影響を与えたのか、また、そのことによって「ワッピング・アリス」という作品にどのような意味が付されることになるのかを探ることが可能になるのではないか。

3

1877 年のその日、どのようにアリスへの尋問が行われ、どのように結婚式まで進んでいったのかを事実として語った「手紙版」ではまず、警報機事件が強盗騒ぎなどではなく、女性使用人の一人であるアリスことリズィー（Lizzie / Lizzy Wills）が男と「寝た」ことを白状し、相手が結婚を拒んでいることをトウェインに伝える様子が描かれている。

> I sent for Mary awhile ago & took her evidence. Then sent for Lizzy & said “Lizzy, your friend slept with you the night he left this house so early in the morning.” She confessed.
>
> She had lied so valiantly, & carried her difficult part so well & with such excellent temper that I began to pity her, now, especially when she said she was lost irretrievably & her betrayer was manifestly never going to marry her.
>
> I told her it was now of course necessary to discharge her at once & send her out of the house. She acknowledged that there could be no other course.
>
> Then I laid a plan for her to follow during the next two hours, & tell nobody what it was.（I have been detective Simon Wheeler for 24 hours,

now.）[10]

彼女に同情したトウェインは、彼女が望む結婚を果たすため、式の準備に奔走したあと、陵辱した相手を呼び出し、その結婚への同意を迫っていく。

> I shake hands with a lying cordiality, shut the door, seat him, begin to talk; he ugly, wanting to quarrel, I sweet & calm, resolved beforehand that to lose my temper was to lose my game — & I had started in to win. He snarled; I looked him sweetly in the eye & rebuked him to gentleness, almost; fought shy of the subject; I gently brought him back to it; he talked of a "put-up job;" I said he could not mean me. He begged pardon, & said he did not. I coaxed him, I argued, I pleaded, half an hour. . . . Four times I worked him almost up to the point I wanted him — made him choke & cry a little occasionally — & four times I failed but the fifth time he said, hesitatingly, "I — I believe I'll do it — yes," I am willing, though —"
>
> He never finished that sentence. . . . Enter Joe & marries them, in presence of the witnesses — this bridegroom murmuring a moment later, "But it was a put-up job."[11]

アリスの告白を記した引用文最後の "I have been detective Simon Wheeler for 24 hours, now." が示唆するように、この時期ちょうど探偵を主人公とした作品を書き終えたばかりだったトウェインが、あたかもその余韻に浸っているかの如く、「謀略だ」と叫び抵抗する相手の男をなだめすかし、ときに脅迫しながら追い込んだ末に、彼女との結婚を見事に認めさせている場面である。 "Enter Joe" といった表現は芝居のト書きをも連想させ、大仰とも言える電撃的な結婚劇を "theatrical" に進めていく姿が見て取れよう。[12] ギルマンも指摘するように、探偵気取りのトウェインがこの一連の行動

を嬉々として進める様子がこの「手紙版」から容易に読み取れると言える。[13] 確かに、入念にしかも短時間で準備を進めてきた結婚式を、男の承諾を得た直後から行ってしまうこの様子は、根っからの “showman” [14] であったトウェインの面目躍如とも言うべきものである。しかしその一方で、あまりに早急すぎるこの結婚劇は、女性使用人であるアリスを雇い止めにするやるせなさからせめて結婚式くらいは挙げてやろう、相手の男に「事実」を「認めさせて」このアリスを幸せにしてやろうという家父長的な気持ちに基づいた彼女への同情という点で理解はできるものの、“showman” という性格がむしろ災いしたとも考えられるのではないか。つまり、この結婚劇は、相手の男の気持ちを推し量ることなく、ただ “dramatic” に、そして “theatrical” に物事を進めたいというトウェインの内に潜む「欲動の満足をひたすら追求した」したもの [15] とも言えるのである。フロイトに従えばこの結婚劇は、快感原則に密接につながったものであり、「価値判断を知らず、善も悪も知らず、道徳というものも」知らないエスに従った行動と言えるのではないだろうか。[16] 三十年後に『自伝』のなかで語られる回想では、この結婚劇を通じて、相手の男に対して「不道徳な喜び（evil joy）」からとことん貶めようとしていたことを自ら認めていることがその証左ともなるだろう。[17]

だが、そうまでして執り行った結婚劇が実はアリスの嘘に端を発していたと、トウェインはこの日から三年後に知ることになるわけである。前述のギルマンが言うようにそのことに自尊心を深く傷つけられたと考えてもおかしくはない。そこでトウェインはこの出来事を、まさにこの結婚劇を中心に据えて作品化し、その自尊心を取り戻そうと画策した、とは考えられないだろうか。

4

この仮説を検証するために、実際に起こった出来事が「自伝版」もしくは「短編版」の創作されたものに於いてどのように再現され、またどのように脚色されていったのかを確認してみたい。作品化された「ワッピング・アリス」でも結婚式へと至る過程は、ほぼ現実の状況通りに描写されている。例えば、アリスが男を招き入れていたことを告白する場面は以下のように描写される。

> “Yes sir; he has slept in the cellar all these months. When there was excursions he would come daytimes. He was free of the whole house, then. But he never took anything, sir. He was perfectly honest. I mended his clothes for him, I made that pallet for him, I fed him all these months. I hope you will forgive me, sir; I’m but a poor girl and I never meant any harm.”
>
> “Forgive you? Why, hang it, you poor good-hearted thing, you haven’t done anything to forgive. I was afraid he was a thief, that’s all. And so there’s been all this pow-wow about just nothing. I thought there was going to be something dramatic, something theatrical, and now it’s all spoilt; it’s enough to make a man swear. You ought to be taken out and drowned for it. But never mind, let it go; there’s nothing but disappointments in this world, anyhow. Go along about your work, and leave me to my sorrows. But there’s one thing — that young fellow ought to be very grateful to you; you’ve been a good friend to him, Alice.”
>
> She suddenly broke down and burst out sobbing as if her heart would break.
>
> “Grateful? Him? Oh, sir, he — he —” Through the breaks in her sobs

words escaped which conveyed a paralysing revelation.

"What!"

"Oh, dear-dear, it is too true, sir — and now he won't marry me! And I a poor friendless girl in a strange land."

"Won't marry you! Oh, he won't, won't he? We'll see about that!" [18]

相手の男を説得する場面は次のように描写される。

There was a painful silence now, for some moments, for I paused to let the effects work up; then I said —

"Alice was your benefactor — you benefactor, do you understand? She saved you, she nourished you, she protected you when you were friendless. And for reward — you take away her purity!"

He jumped as if he had been shot, and his face was transfigured with fury.

"I? Who says I did!"

"She says so."

"She lies! To the bottom of her soul she lies!" . . .

"You see, there is really only one right and honorable thing for you to do — only one — you must marry her."

It warmed his fury up to boiling-point again. . . .

"Objection! Oh, great guns! Why I don't care anything for her beyond warm friendship — there's no love. Why in the world should I marry her? — I don't want a wife." . . .

"This is a game!" he shouted, and brought his fist down on the table with a crash. "It's a game that you've put up on me; that's what it is — a game to force me to marry that lying baggage. I see it all. Now deny it if

you can!” [19]

トウェインの説得を “put-up job” だと罵った「手紙版」の男同様に、ここでは “This is a game!” と激しく抵抗を見せたあと、その男は、家宅侵入罪で刑務所に行くか、アリスと結婚するかを迫られ、“Damn her eyes, I’ll marry her! Oh, it’s awful — awful. But I’ve got to do it, and I will. . . .” としぶしぶ結婚を認める。[20] 手紙に綴られた出来事が作品のなかでほぼ正確に再現されていることが窺えよう。だからこそ、「手紙版」には描かれない、いわば潤色を施された部分が重要な意味を持ってくることになる。

その視点からここで注目すべきことは、「手紙版」とは違い、「自伝版」では主人（トウェイン）に「何か “dramatic” で “theatrical” なことがあるかと期待したが台無しだ、あるのは失望だけだ」、と叱責されたあとに、アリスが初めて純潔を奪われたことを告白するという点である。アリスが告白した場面の引用から分かるように、主人から叱責されるまでは、男を家へと招き入れ、世話を焼いていたことまでしかアリスは認めていない。つまり、アリスは、主人に水を向けられてようやく自分が凌辱されたこと、その相手に結婚する気がないことを伝えていたことになる。この場面は「手紙版」からは窺えない描写である。ここでのアリスは「何か “dramatic” で “theatrical” なこと」を要求した主人に従順に従ったかのように見える。だとすれば、主人であるトウェインが、あえてアリスに嘘をつかせ、凌辱されたという出来事を捏造した、ということになるのではないか。そのことを暗示する描写が、この物語のクライマックスとも言える場面でも繰り返されている。

“That Wapping Alice — blame her skin, she’s a man!”

And so it turned out. She explained that it had never occurred to her to make that dire charge against poor Bjorgensen till I complained that the

> outcome of the original episode wasn't theatrical enough. She thought she could mend that defect. Well, her effort wasn't bad — you see it, yourself. [21]

アリス自身が意識的に主人の要求に従い、嘘の告白を行って相手の男を追い詰めたこと、そしてその仕事ぶりをトウェインが評価していることが、この文章から如実に読み取れるだろう。トウェインはさらに、作品挿入の翌日の口述筆記でも、"She played her part well; in fact she played it to perfection." [22] と再びアリスの働きぶりを評価している。こうしたことから分かるように、創作された作品では、アリスが自ら嘘をついたのではなく、トウェインがその嘘をつくように彼女を巧みに誘導していた様子が描かれているのである。

トウェインはこの出来事を作品化するにあたって、わずか数語ではあるが創作のためのメモを残している。1891 年頃とされるそのメモには "How we made an honest woman of the English servant girl." [23] と書かれており、やはり結婚劇こそがこの物語の主要部分であることを我々に推測させる。つまり、いかにして二人を結婚させたかを伝えることが、創作化におけるトウェインの大きな関心ごとであり、主要なテーマであったことを物語っているのである。だとすれば、その結婚劇が、物語のなかではアリス自身から出た嘘ではなく、自らが誘導した嘘から始まったものであるとすることこそが、トウェインにとってはこの物語の創作に於いて重要な意味を持っていたと考えることができるのではないだろうか。さらに言えば、これまでの考察の文脈に従ってみるならば、"make an honest woman" というフレーズの「関係を持った女性と結婚する」という本来の意味以外に、むしろ文字通りの、「使用人少女を正直な女性にする」という意味も響いてくるように思われる。作品のなかの男を説得している場面でも、トウェインはその説得材料の一つとしてこのメモとまったく同じフレーズを用いている。

> Think — to you is granted a gracious and noble privilege: you can make an honest woman of her." [24]

それまでは marry という通常の単語を使用していたトウェインが、この箇所に限ってこのフレーズを使用していることは大変興味深いことと言えよう。彼が結婚を拒むのはまさにトウェインから発せられたこのセリフに対する答えが示しているように、自分は彼女に何もしていない、自分にはどうにもできない、なんの関わりもないからであり、彼女が嘘をついているからということになる。[25] 逆に言えば、彼女と結婚することはすなわち、彼女は嘘をついていないということを意味し、したがってこのフレーズは、この男には彼女を、嘘などついていない正直な女性にしてやれる特権があるのだ、とも読めるということである。

彼女が凌辱されたという嘘は自分が誘導した結果であり、彼と結婚させることで彼女を嘘などついていない正直な女性にする、という脚色を施すことによって、アリスにだまされた自分は消滅し、トウェインは自尊心を取り戻すことが可能になるわけである。

5

だがその一方で、「手紙版」に記された現実の結婚劇が、前述したようにエスによる過激な結婚劇だと読めるのだとしたら、また新たな解釈の可能性も浮上することになる。この "theatrical" な結婚劇にもう一人の犠牲者がいることを忘れてはならない。すなわち相手の男ビョルゲンセン（Bjurnsen Bjuggersen Bjorgensen）である。「手紙版」で伝えられる実際の結婚劇であれ、作品のなかに描かれた結婚劇であれ、トウェインと対峙する中心人物はむしろこのビョルゲンセンである。作品のなかでは、引用文で

も示した通り、説得するトウェインとそれを拒絶するビョルゲンセンとの臨場感あふれるやりとりが中心となって物語は進んでいく。そこにアリスのセリフは皆無である。にもかかわらず、ヒルもギルマンも、このビョルゲンセンを中心には論じていないようである。これまでの作品解釈のうえで過小評価されてきたとも言えるだろう。彼をトウェインの結婚劇のもう一人の犠牲者として物語を読み直してみたとき、どのようなことが見えてくるだろうか。

前述したように、彼はいわばトウェインの、「快感原則をひたすら守りながら、欲動の欲求を充足しようと努力」するエスに従って執り行われた大仰な結婚式の犠牲となった。「手紙版」、及び『自伝』に記された後日談から分かるように、この出来事はまさに彼の主張する通り “put-up job” に過ぎなかったわけである。実際の出来事の三年後に、男による凌辱がアリスの嘘だと知ったトウェインは、アリスの告白を信じ込み、自らの「不道徳な喜び」を満たしたいがために、男を陥れてしまったことを後悔したとは考えられないだろうか。ギルマンが指摘したように、嘘をついたアリスに対する怒りが創作を生み出したと言えるのだとすれば、「沸騰する興奮で満ちたボイラーのような」エス[26]による結婚劇から生まれたビョルゲンセンに対する罪悪感もまた、この作品の創作に大きな影響を及ぼしたとは考えられないだろうか。ただし、アリスのついた嘘を物語のなかで自分の嘘にするという脚色だけでは、自尊心は取り戻すことができたとしてもその罪悪感までは払拭できない。そこでトウェインは、アリスを男に変えてしまうのである。その結果二人の結婚はそもそも現実的には不可能な男同士の結婚となり、結婚そのものが無意味化、茶番化されることになる。本来ならクライマックスにでも、それこそ “theatrical” に開示されてもおかしくはない重要な秘密であるにもかかわらず、トウェインがそれを物語が始まってすぐに暴露してしまっている理由もそこにある。すなわち読者は、その秘密が早々に暴露されるおかげで、初めからこの物語の結婚劇が

まったくの茶番であることを知りながら、トウェインと男の結婚の承諾をめぐる闘いを読むことができるのである。女性使用人のついた嘘を鵜呑みにし、自らのエスの命じるがままに探偵気取りで執り行ってしまったあまりにも “theatrical” な結婚式で罪悪感を抱えたトウェインは、事実を知らない読者にその結婚劇をまったくの創作、つくり話として提示し、その罪悪感の払拭を試みたのだと言えるのではないだろうか。そこに、エスに対する、現実原則に従う超自我の命令を読み取ってもよいだろう。すでにふれた後日談では、幸福な結婚生活を伝えたあと、男が一瞬の沈黙をおき「そして恨みを感じさせない調子で付け加えた」事実の告白で締めくくられているのだが、[27] 声の調子に、罪悪感を払拭できたかのように思わせる修飾語を施していることは、その解釈の可能性を示唆する十分な証左となり得るだろう。

結

三十年前に自宅で起こった奇妙な事件にトウェインが長い間取り憑かれていたのも、女性使用人に嘘をつかれたことによる自尊心の喪失と、自らの欲望を充足しようとして執り行った結婚式で無実の男を陥れてしまったという罪悪感があったからかもしれない。いずれにしてもトウェインは、失った自尊心の回復と、抱え込んだ罪悪感の払拭という二重の目的を果たすため、実際の出来事に基づいた「ワッピング・アリス」という作品を著した。そのきっかけとなったアリスの嘘を作品のなかでは自分の責任であると脚色することで、そしてまた、大仰な結婚劇を男同士による茶番へと転換し、それを物語の早い段階でさらけだすことで、彼は三十年続いたわだかまりに終止符を打ったのである。

Notes

1. 女性使用人の本名はリズィー・ウィルズ (Lizzie Wills)、相手の男はそのとき失職中の修理工ウィリー・テイラー (Willie Taylor) で、作品中彼はビュルンセン・ビュガーセン・ビョルゲンセン (Bjurnsen Bjuggersen Bjorgensen) という名のスエーデン人という設定になっている。
2. Mark Twain, *Autobiography of Mark Twain. Volume.3*. Ed. Harriet Elinor Smith (Berkeley: University of California Press, 2015), p. 39.
3. Susan Gillman, *Dark Twins: Imposture and Identity in Mark Twain's America*. (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1989), p. 114.
4. Twain, *loc. cit*.
5. Twain, *Wapping Alice: Printed for the First Time, Together with Three Factual Letters to Olivia Clemens; Another Story*, The McWilliamses and the Burglar Alarm; *and Revelatory Portions of the Autobiographical Dictation of April 10, 1907, Comprising the Evidence in the Curious Affair of Lizzie Wills and Willie Taylor, by Samuel L. Clemens: Mark Twain with an Introduction and Afterword by Hamlin Hill.* (Berkeley: University of California, 1981), p. 78.
6. Linda A. Morris, *Gender Play in Mark Twain: Cross-Dressing and Transgression*. (Columbia and London: University of Missouri Press, 2007), p. 156.
7. Gillman, *op. cit*., p. 122.
8. Twain, *op. cit*., p. 40.
9. Gillman, *op. cit*., p. 123.
10. Twain, *The Love Letters of Mark Twain*. Ed. Dixon Wecter (New York: Harper & Brothers Publishers, 1949), p. 199.
11. *Ibid*., pp. 200-201.
12. この用意周到すぎる結婚劇に関して辻和彦は、このトウェインの一連の行動のおかげで「彼は自身の『家庭』及び屋敷から、醜聞もゴシップの種も出さずにすんだ」のだと指摘している。(辻和彦「純潔の価格：『ワッピング・アリス再考』」、『マーク・トウェイン研究と批評』日本マーク・トウェイン協会編（東京：南雲堂、2009）、pp. 102-11 参照。)
13. Gillman, *op. cit*., p. 125.
14. Gillman, *op. cit*., p. 119.　作品ではその “showman” ぶりについてトウェイン自らが “My native appetite for doing things in a theatrical way feasted itself with a relish

on this spectacular program." (Twain, *Autobiography of Mark Twain*, p. 35.) と語っている。

15. ジークムント・フロイト「心的な人格の解明」、『人はなぜ戦争をするのか：エロスとタナトス』中山元訳 (東京：光文社古典新訳文庫、2008)、p. 176。
16. *Ibid*., p. 174.
17. Twain, *op. cit*., p. 39.
18. *Ibid*., pp. 33-34.
19. *Ibid*., pp. 35-37.
20. *Ibid*., p. 38.
21. *Ibid*., p. 38.
22. *Ibid*., p. 39.
23. Twain, *Mark Twain's Notebook & Journals Vol. III*. Ed: Robert Pack Browning, Michael B. Frank and Lin Salamo, (Berkeley: University of California Press, 1979), p. 631. 『ノートブック』のこの箇所の注釈には「ワッピング・アリス」の成立過程が記されている。
24. *Autobiography of Mark Twain*, p. 36.
25. *Ibid*., p. 36.
26. フロイト、*op. cit*., p. 172.
27. Twain, *op. cit*., p. 40.

Almaの自己の超克

―― *Summer and Smoke* の精神分析学的考察 ――

平　　恵理子

序論

Tennessee Williams（1911-1983） は Cornelius Coffin Williams と Edwina Dakin の間に第二子として誕生し、本名は Thomas Lanier Williams である。後年、父方の親族が古くからテネシー州に住む一族だったことに準えて、名を Tennessee Williams とした。Williams が誕生する 6 年前に、祖父の Walter Edwina Dakin が監督協会牧師の職に就き、祖母が音楽教師をしていたとされている。

Cornelius は Williams の誕生後に、勤めていた靴会社を失職し、靴の行商を始める。このことがきっかけで一家は三度引っ越すことになった。Williams は幼児期に親の都合により住まいを転々とした。そのために長く付き合える友人が少なかった。このことについて彼は孤独を感じていたに違いない。彼は執筆活動に勤しみ、心の慰めとし、2 歳年上の姉の Rose を慕い、彼女を心の支えとした。Rose は後年、精神を患った。彼女の身の回りの世話をする家族は悩み抜いた末、家族の責任の元で彼女は脳の前頭葉部分の切開手術を施された。1937 年のことだった。家族が手術の是非を決断する場に、執筆した戯曲が上演され始めるなど筆活動が軌道に乗り多忙を極めていた Williams は、不在だった。彼は Rose への手術の是非の場面に居合わせられなかったことを生涯に渡って後悔した。

Williams が *Summer and Smoke* の執筆に取り掛かったのは、1944 年のことであり、そのタイトルは彼が敬愛する詩人 Hart Crane（1899-1932）の詩の一句から引用している。また、‘For McCullers’ と記し、Carson McCullers

（1917-1967）に捧げている。Williams は彼女のことを “the only person I’ve ever been able to stand in the same room with me when I’m working.” [1] としている。

Summer and Smoke は当初は第１部の ‘A SUMMER’ と第 2 部の ‘A WINTER’ の二幕に分かれ、全 12 場で構成されていた。1947 年にそれをダラスのシアター４７で初上演した。翌 1948 年に Williams は *Summer and Smoke* に、上演版として、第一部の第二場を改訂し、一場を追加して、二幕 13 場に改訂し、それをブロードウェイのミュージック・ボックス劇場で上演した。その後、1952 年に *Summer and Smoke* はオフ・ブロードウェイのサークル・イン・ザ・スクエア劇場にて、1975 年にはニューヨークで再演された。今なお上演は続いており、直近では 2018 年にロンドンで上演された。Williams は、時を超えて多くの人々の心を掴み愛される、普遍的なテーマを扱った作品を数多輩出した作家であり、*Summer and Smoke* も勿論その作品の中の一つと言えよう。

Williams はこの作品に更に改訂を施し、登場人物はほぼ同一のまま、*The Eccentricities of a Nightingale* のタイトルを冠して別の作品とし、ニューヨーク、ナイアックのタパンジー劇場で 1964 年に再び世に出し、1976 年にはその改訂版がブロードウェイのモロコス劇場で上演された。

Williams は *The Glass Menagerie*（1944）でニューヨーク演劇批評家サークル賞を受賞し評価を得たことや、*A Streetcar Named Desire*（1947）が Pulitzer 賞などを受賞した後に、*A Cat on a Hot Tin Roof*（1955）、*The Rose Tattoo*（同）など精力的に名作を生み出した。1950 年代のアメリカにおいて彼の人気は不動のものとなった。

小論では、初演版の *Summer and Smoke* を取り扱う。主人公の Alma Winemiller と彼女の幼馴染の男性 John Buchanan との関係を見つめ、最終的に彼女がなぜ出奔したのか、その理由を探るために彼女を精神分析学的に考察し、彼女の人間性に触れたい。

１．Alma と John の幼少期について

この戯曲には導入部として Prologue が設けられている。主人公の Alma Winemiller はこの時 10 歳であり、ミシシッピ州のグロリアス・ヒルという町に住んでいる。どんな少女なのかもう少し具体的に見てみよう。

> [*...She wears a middy blouse and has ribboned braids. She already has the dignity of an adult; there is a quality of extraordinary delicacy and tenderness or spirituality in her, which must set her distinctly apart from other children....*] [2]

Williams のト書きによると、Alma について秀麗皎潔な少女の印象が浮かび上がりはしないだろうか。隣家に住まう同級生 John Buchanan の気の毒な事情も鑑み、彼女は彼を思い遣っている。Alma がこのような大人びた振る舞いを備えるに至ったのは、実家が教会であることがその理由の一つと推測できる。父親の Winemiller 氏はプロテスタントの牧師である。彼が日頃から教会の仕事に従事する姿や、週末になるたびに近隣の信徒が実家である教会に集い、厳かに礼拝が執り行われる様を Alma は産まれた時から目の当たりにし身近に感じて育っていた。それ故に、Alma は祈りを捧げ、「汝の隣人を愛せよ」との教えを実践している。彼女はキリスト教的価値観に基づき精神的戒律に重きを置く生活をしていると考えられる。

一方、John は Buchanan 医師を父親に持ち、不幸なことに 5 歳の頃に母親を亡くした。次の引用は、その時の彼の回想の場面である。

> JOHN: Hee-haw! Ho-hum! Have you ever seen a dead person?
>
> ALMA: No.
>
> JOHN: I have. They made me go in the room when my mother was dying and she caught hold of my hand and wouldn’t let me go － and so I

> screamed and hit her.
> ALMA: Oh, you didn't do that.
> JOHN [*somberly*]: Uh-huh. She didn't look like my mother. Her face was all ugly and yellow and － terrible － bad-smelling! And so I hit her to make her let go of my hand. They told me that I was a devil!（p.130）

John にとって確かに母親の死は耐え難いことであったに違いない。しかしながら彼は母親の遺体を目の前にして即物的な反応をした。医師にとっては、医療行為の上では人体ですら物質にすぎないとは言え、ここでは彼が母親の遺体に対面した時の、外見上の感想を Alma に伝えたのみである。従って、母を失った彼の悲しみや、彼の母親への思慕はここでは表されていない。このことから、母親は病気療養中の時期には床に伏した日が長く続き、育児の上で John と関わることがほとんどできず、従って John が母親との触れ合い持つ機会を十分に持てなかったために、母親に対してあまり愛着を持てなかったのではないかと推察できる。

Alma と John が公園で、天使の石像の土台に彫刻された ETERNITY の文字を指でなぞる場面がある。ETERNITY が持つ意味については、それぞれの家庭環境から育まれた彼らの性格の違いにより、解釈が異なることは容易に理解できよう。この時、Alma は John からふいに両肩を掴まれてキスされた。John は男児で自分は女児であるという、それまで意識していなかった性差を無理矢理に意識させられた出来事に、Alma は狼狽した。この時 Alma の Carnal desire が Repression されたと考えられる。この後に Alma が震える指先で再び ETERNITY の文字をなぞる行為は、彼女が John への想いを一層募らせていくことを暗に示している。以上が Prologue の内容であり、この Alma と John の描写によって、これから始まる戯曲において Alma と John がどのように成長し、人間関係を紡いでいくのか読者に期待を持たせている。かつ、彼らの価値観の相違はこの戯曲の中心に

一本の芯のように据えられているから、彼らの幼い頃のこの会話はこの後の戯曲の展開の伏線になっていると言えよう。

２．成人した Alma の生活について

続く第一場では Alma と John の年齢は 20 代半ばになるまで年月を経ている。故にこの作品で取り扱われた Time Span は 15、6 年という長い期間である。

成人した Alma は声楽教室の講師をしていた。Williams のト書きによると、彼女は「若いのにどことなく結婚に縁が遠い感じ」（“*there is something prematurely spinsterish about her.*”（p.135））があり、「同じ年頃の人たちは彼女にやや風変りでとぼけた印象を持っていた」。（“*People her own age regard her as rather quaintly and humorously affected.*”（同））　何より、「本来の彼女自身はいまだ隠されており、彼女自身それに気づいていない。」（“*Her true nature is still hidden even from herself.*”（同））と記されている。これらの描写から推測が可能なことは、20 代半ばになった Alma の生気が損なわれている様子である。この理由について考察するために、Alma が恒常的に抱いている思いを次に引用する。尚、（　）内の英字は筆者が記している。

> Alma: She（Ms. Winemiller）had her breakdown while I was still in high school. And from that time on I have had to manage the Rectory and take over the social and household duties that would ordinarily belong to a minister’s wife, not his daughter. And that may have made me seem strange to some of my more critical contemporaries. In a way it may have － deprived me of － my youth……（p.153）

Alma は自分が置かれている環境に到底満足していないことについて、その原因は家族にあり、特に母親が精神を患って以来であるとしている。

社会的地位を認められる牧師館の娘としては、母親が精神を患っていることは、世間的に見ても隠したい程のことであろう。しかし母親を放っておくわけにはいかない。牧師館は家業でもあり、それは今の自分の務めである、と我慢して自分に言い聞かせている。彼女の性分、即ち本当の自分がまだ隠れてしまっているのは、日々の生活に追われているからである。Alma は自分自身の研鑽のために勉学に励んだり、結婚につながる恋愛をしたり、仲の良い友人らと他愛のないおしゃべりや、食事の時間を満足するまで楽しんだり、若さがはじける趣味に没頭していない。即ち、Alma は自分と対峙して嗜好や適性の面を模索できておらず、Identity [3] を確立する機会を奪われていると言える。自ら好んでこの生活を選択したわけでもなく、否応なくこの生活へと移行していったことに対する Alma のやるせない内面を、周囲が持つ彼女の印象から窺い知ることができる。

また Alma は、母親に対してまるで子どもに接するように接すために、時折､母親と娘との立場が入れ替わってしまったかのように見受けられる。この時、Alma は母親と自分とを同一視していると言えよう。精神分析学的な理論を援用すると、Sigmund Freud（1856-1939）は女児にも Oedipus complex [4] を認めていることから、Alma は母親の位置に自らを置き、父親を彼女自身の愛の対象とみなしやすい環境にあると考えられる。しかしながら、Alma は家族にもわかる程に日頃の生活の上で John を意識していることから、彼のことを愛しており、彼女の libido は Oedipus complex の段階にあるとは言い難い。

Alma は、幼馴染で同級生の John のことを 10 歳の頃から変わらず慕っていた。Alma が John に好意を寄せていることを父親である Winemiller 牧師は承知してはいても、好ましく思っていなかった。その理由は John が医学部を卒業したものの、いつまでも医師として就職せず遊び暮らしているばかりか、彼の女性関係のことを Winemiller 牧師は良く思っていなかったからである。Alma は最近ではカーテンの陰からひっそりと、隣人でも

ある John の様子を伺うことさえしていたことから、ここで Alma の深層心理に着目する。

Freud は無意識の領域である超自我 について、道徳的であり禁止的役割を担っていると論じている。[5] これは幼児期における両親からの懲罰を取り入れ、自ら自分を禁止するようになり、その後に両親への同一視を通じて形成されたものである。従って、超自我は父親の性格をも保持することから、Alma の超自我は、Winemiller 牧師が持つ、戒律を守る厳しさそのものであると推察できる。Winemiller 牧師は、父親として愛情深く娘の Alma に接してきたというよりもむしろ、家業を維持するための同業者であり、妻が幼子のように手がかかるようになってしまったために、妻の世話をする者として Alma をみなしていたことであろう。このことから、Alma は自分自身の欲求や自分の言い分、また家族への貢献を認めてもらいたいと周囲に願っている気持ちに対して Suppression を強いられる環境であったと推測できる。

Winemiller 牧師が、John の日頃の生活態度に対してよい印象を抱いていないことで、父親のその態度や考えを Alma は無意識に受容していると考えられる。また、Alma が高校生という多感な時期に、母親と意思の疎通がうまく図れずに彼女と母親の関係は不安を孕んでいたことにより、Alma の超自我は一層過酷なものであったと推察できる。従って、Alma の Id は John に性的魅力を感じ恋人になりたいけれども、Alma の超自我が彼女の Id に対してブレーキをかけている状態である。John が隣人であることから、生活する上でも Alma は彼を意識しないわけにはいかず、Alma の超自我と Id は相反し続けている。 彼女の自我は、彼と深い仲になりたい Id と、清廉かつ潔癖であることを求める超自我の中に入って仲裁をし続けねばならない状態であると推察できる。即ち、Alma は物心ついた時から常に Conflict の状態にあると言えよう。カーテン越しに、Alma は John を窃視することによって、常に葛藤を感じて疲弊しきっている彼女

の内面は、かろうじて平静を保っている状態であると推察できる。

３. 成人した John の様子について

次に挙げるのは John についての引用である。

> [*...John Buchanan comes along. He is now a Promethean figure, brilliantly and the restlessly alive in a stagnant society. The excess of his power has not yet found a channel. If it remains without one, it will burn him up. At present he is unmarked by the dissipations in which he relieves his demoniac unrest; he has the fresh and shining look of an epic hero….*]（pp.132-133）

John が輝かしい風貌を備えていることは注目に値する。これは少なくとも John が年齢相応の溌剌さが外見に表れていると考えられる。幼い頃から John は「医師にだけにはならない、人が死んでいく部屋に行って見とかなきゃいけないなんて！、、、おお嫌だ！」（“…… I wouldn’t be a doctor for the world. And have to go in a room and watch people dying! ... Jesus!”（p.130））と言っては、Buchanan 医師に反発を繰り返している。この John の医師になることへの反発は、彼が母親を亡くしたことが影響しているのではないだろうか。John が母親を亡くすにはあまりにも小さかったのだが、母親がいなくなった生活は、療養中とはいえ、母親がいる生活とはまるっきり変わってしまったことだろう。後に悔しい思いや寂しい思いを、生活を通してじわじわと経験することになり、無意識に John は母親の死を否定したい気持ちになったのではないだろうか。また、彼は父親が医師であるが故に、自分の妻を救えなかった父親を否定する気持ちになり、「医師にはならない」と言い張ったのではないだろうか。即ち、医師としての父の威厳を素直に受けとめられなかったとも考えられる。以上のことから、

John は医師を職業として選択することを頑なに拒んでいるとも考えられる。

Buchanan 医師は若くして妻を亡くして以来、男手一つで幼い John を育て上げてきた。医師という職業に誇りを持っており、知識も経験も豊富である。その自身の半生から、医師は良い職業であると確信し、息子にも後を継ぐように勧めてきたが、John は父親の意見を受け入れようとしない。John は医師を拒んでいるにも関わらず、他の職に就くこともしなければ、放蕩したきり蒸発するわけでもなく、結局 Buchanan 医師の元に戻って来ては、また放蕩することを繰り返している。

John のこの行動を分析するために、彼の心的構造に着目する必要がある。

Freud の精神分析学的理論を援用すると、この時点において John の libido は Oedipus complex の段階に定着していると言えよう。5 歳の頃に母親を亡くして以降、John は母親から注がれるはずであった愛情や厳しさを甘受することなく成長した。John は愛情の対象である母親の存在をすでに失っているにも関わらず、たった一人の親である Buchanan 医師に沿わず、反発している。このことから、彼の libido は Oedipus Complex の段階に定着したままであると考えられる。従って、彼が出会う異性は、結婚の対象ではなく、Carnal desire の対象としか捉えられない。John は将来、家業を継いで医師にならなければいけないことを理解していることから医学部を卒業している。しかし実際には医師になろうとしないばかりか Buchanan 医師に背いた状況を継続している。彼が Buchanan 医師と父子の縁を切り、見捨てるに至らない状況ということは、John は内面で Conflict を繰り返している状態にあると考えられる。John もまた、Alma 同様、Identity の確立に至っていないと考えられる。

Alma が不満や不安を John に吐き出した所、彼は、「あなたは魅力的だ！僕は本当にあなたを好きなんだって知ってるかい？アルマさん。」(“

You're attracting attention! Don't you know that I really like you, Miss Alma?" (p.155)) と告げ、ドライブに誘い出そうとしたが、その場を通りがかった Rosa Gonzales の肉感的で官能的な姿態にすぐに関心を奪われてしまう。彼の libido は Oedipus Complex の段階に定着しており、異性は Carnal desire の対象と見なすことから、魅力的な女性であれば尚更 John が目を奪われるのは当然至極である。この後に、John と Rosa は交際を始めた。

4. Alma と John の価値観の相違

ここで、John が Alma に誘われて、彼女が参加している詩の朗読の定例会へ途中参加した場面を挙げる。John はこの時、往診を思い出したと言って足早にその場を立ち去った。この日、定例会が始まったのは夜の八時であり、John が帰宅したのは、詩の朗読を発表した人数から類推しても、おそらく始まってから 1 時間以内だと思われる。定例会の解散後、Alma は John の診察室をノックした。おそらく彼に会うことが目的であると思われるが、午前二時という夜更けであった。

このことを分析する為には、まず Alma の精神構造をみる必要がある。日頃の Alma の精神構造は、超自我の支配下にあり、自我は非常に常識的な言動をしている。しかし、定例会も解散したと思われる午後 9 時過ぎに自室に籠っていると、Id が頭をもたげてきて自我と超自我との間に割って入り葛藤が始まったのである。Winemiller 牧師も母親も別室で寝静まったことが Alma の寂しさを増幅させ、彼女の Carnal desire を助長させたと考えられる。そのために彼女は真夜中に外出し、無意識に John の診察室の扉をノックしたと考えられる。Alma が夜更けに John の診察室を訪れたのはこれが初めてではなく、頻繁にある。その Alma に対して、John は診察をしながら「僕があなたを好きだってことや、あなたは気にするだけの価値がある人だって僕が思っていることをあなたは知っていると思う。」("You know I like you and I think you're worth a lot of consideration."

（p.185））と言う。繰り返し John からかけられるこの “I like you.” の言葉こそが、Alma が John を意識せずにはいられない一因であろう。John が放蕩し遊び続けていることを知っていながら、この一言を真に受け信じるほど、Alma は John のことを愛しているのである。

Alma は John とドライブの約束にこぎつけ、ようやくその夜が来ると、Winemiller 牧師に干渉され反対される中、逃げ出すようにして John と外出する。John のことを慕い続ける Alma は、Winemiller 牧師から「やれやれ、すでに大変な十字架を背負っているんだから多分もう一つ増えても耐えられるだろう」（“Well, I have had one almost insufferable cross to bear and perhaps I can bear another.”（p.190））と皮肉とも受け取れる言葉を掛けられた。二人の仲が認められていないことに Alma の内心は穏やかではなかったと考えられる。

二人きりになった Alma と John は議論を展開した。お互いにすぐ隣にいるにも関わらず、Alma の精神性に基づく価値観は John に理解してもらえないことから、彼女は彼のことを心理的に遠く感じずにいられない。それは「はるか、はるか地中深くまで入ったひび」（“Oh—wide, wide stretches of uninhabitable ground”（p.198））と例えられるほどであり、そこに Alma の落胆した心境が表されている。John はこの時、Alma にキスをした。Alma は彼を拒否しなかった。

> JOHN [*gently*]: Miss Alma. [*He takes her arms and draws her to her feet.*] Oh, Miss Alma, Miss Alma! [*He kisses her.*]
> ALMA [*in a low, shaken voice*]: Not “Miss” any more. Just Alma.
> JOHN[*grinningly gently*]: “Miss” suits you better, Miss Alma. [*He kisses her again. She hesitantly touches his shoulders, but not quite to push him away. John speaks softly to her.*] Is it so hard to forget you’re a preacher’s daughter?

ALMA: There is no reason for me to forget that I am a minister's daughter. A minister's daughter's no difference from any other young lady who tries to remember that she is a lady.
JOHN: This lady stuff, is that so important?（pp.200-201）

John からキスをされた時に、敬称はつけず、呼び捨てにしてほしいことを求めた Alma であったが、彼からの「説教師の娘」（a preacher's daughter）という一言がきっかけとなり、Alma は、自分は「牧師の娘」（a minister's daughter）であると正した上で、彼女は彼に反論を始めた。これは、時間帯が夜だったことから当初は Id が支配していたのだが、John のその一言で超自我がむくむくと頭をもたげたのだと考えられる。そして Id と超自我の仲裁を自我が始めたことから、Conflict が始まったと推察できる。一方､John は なおも「男女の間にあるのは尊敬だけではないんです。おわかりですよね、アルマさん？」（"There's other things between a man and a woman besides respect. Did you know that, Miss Alma?"（p.201））と 遠まわしに、肉体の関係を持ちたいことを示唆する言葉で Alma への誘惑を試みるが、Conflict の直中にいる Alma をもどかしく思い、じれったい余りに「慎み深いことがそんなに大切なんですか？」（"This lady stuff, is that so important?"（同））という言葉を彼女にかける。この一言に彼女はついに会話が成立しなくなるほど興奮し、タクシーで帰ると言い出した。John は Alma の帰宅のためにタクシーを呼ぶ結果となった。この場面では、Alma は精神性に価値を置き、一方 John は Carnal desire を重視していることが明らかであり、二人の価値観は合致しないことが理解できる。

５. John の結婚の噂により Alma が取った行動がもたらしたこと

次に John と Rosa の関係を中心に考察を進めていく。Rosa はメキシコ出身の女性であり、父親の Papa Gonzales に連れられてアメリカに移住し

た。メキシコにいた時は大家族で貧しい生活をしていたが、移住後に彼が仕事で大きな成功を収めると、一家は成金となった。John が Alma と二人で話をしており、彼女をドライブに誘い出そうとした時に、偶然通りかかった女性が Rosa である。John の関心はいとも簡単に彼女に奪われてしまう。そこで挙げられる理由としては、小論「3. 成人した John の様子について」内で述べた通りである。

また、John は遊ぶ金欲しさに Papa Gonzales の資金をあてにし、Rosa と愛のない結婚をし、そのまま二人で南米に脱出する計画を立てていた。Alma は John と Rosa の結婚の事実を知った途端、すぐさま電話の受話器を握りしめ、研究のために出張している Buchanan 医師に知らせるために長距離電話をかけた。

Alma は John と Rosa の結婚を聞いて胸が張り裂けそうな気持ちになったことであろう。しかも挙式が翌日であるなら自分で直接問い合わせた方が早いのに、なぜ自ら確認しなかったのか、そしてなぜ遠方にいる Buchanan 医師に電話を掛けるといった手段を彼女は選んだのか、ここで一考したい。おそらく、Alma は John に、彼女が彼のことを愛しているとはっきりと認識されることを恐れていると考えられる。その事実が明らかになった後のことを想像できないために、彼女は不安を感じ取っているのである。故に彼女には John に関心がないことを装う必要があった。Alma の心理は防衛機制[6]の過程を経て、彼女に不安を生じさせないようにした。そして John に無関心を装うために、常日頃から John のことを心配している Buchanan 医師に告げて反対してもらう判断をしたと考えられる。彼女の不安が生じないばかりか、場合によっては、自分にとって好都合なことに破談になるかもしれない、と Alma は考えたのではないだろうか。

その夜、John の自宅には、John と Rosa と Papa Gonzales がいた。酒に酔った Papa Gonzales が目を覚まして隣の部屋から現れ騒ぎ始めると Rosa は部屋を出ていき、John は牧師館に面する窓へ行き外を見た。その時、

Buchanan 医師が自宅に帰着し、Rosa と鉢合わせになると、彼は彼女と Papa Gonzales を非難し、ステッキを振り上げ彼らを打ち続けた。そこで Papa Gonzales は拳銃を懐から取り出し、Rosa が必死に止めるのも振り切って Buchanan 医師を狙撃した。弾丸は命中し、彼を危篤状態に陥れた。

Alma の期待通りに破談になったのだが、しかしながら、このような事態となり、Buchanan 医師は重傷を負った。Alma はこのことに大きな責任を感じ痛烈に思い詰めた。危篤状態になった Buchanan 医師に Winemiller 牧師は祈祷を捧げ続けた。John はうな垂れ、「お前のせいだったんだ！」（"It *was* you then!"（p.219））と Alma に言った。

次に挙げる引用は、John が Alma に伝えたいと思っていた台詞である。

> JOHN [*with crazy, grinning intensity*]: Now listen here to the anatomy lecture! This upper story's the brain which is hungry for something called a truth and doesn't get much but keeps on feeling hungry! This middle's the belly which is hungry for food. This part down here is the sex which is hungry for love because it is sometimes lonesome. I've fed all three, as much of all three as I could or as much as I wanted—You've fed none—nothing. Well—maybe your belly a little—watery subsistence—But love or truth, nothing but—nothing but hand-me-down notions!—attitudes! –poses! [*He releases her.*] Now you can go. The anatomy lecture is over.（p.221）

John は、以前から、Alma が最も重きを置いている精神論を耳にしていた。その時の彼は、内容を理解していないように見受けられた。実際、John は医学部を卒業しており、人格、または人体に対して医学的な見方や解釈をしていたに違いない。今回、父親が不慮の事故で瀕死の重傷を負ったことは、彼にとって、信頼していた医学的な見方をも変える大きな出来

事だった。その理由は、彼の母親が病気で死去した時とは、また違った気持ちになったことに彼自身も気付くことができたからである。彼の幼少時に、母親は療養中だったために、今にも消えそうにゆらめいていた蝋燭の火がついに、静かに消えるような死としてJohnは認識した。言い換えると、母親の死は予期できた死であった。その場合と異なり、父親の死は昨日まで元気で仕事も精力的にこなし、息子にとっては鬱陶しいくらいに自分の行く末を案じてくれていた人との予期せぬ事態であった。John 自身の肉親との別れの受け止め方が全く異なっていたのである。死による心の痛みや寂しさを John は初めて父親を通して知ったのである。そしてその心の大きな痛みを伴った経験により、精神は存在するということを学び、即ち、魂とは何かということを彼なりに気付き納得しつつあると考えられる。一方、Alma は 気付きを得た John を察する余裕もなく、Buchanan 医師 に求められ讃美歌を歌うためにその場を離れた。

６. Buchanan 医師の死、その後

Buchanan 医師が息を引き取って数か月が経った。この間、Alma の様子が変わっていた。次に挙げるのは Alma の様子をト書きで記したものである。

> [……*Alma enters the Rectory interior in a dressing gown and with her hair hanging loose. She looks as if she had been through a long illness, the intensity drained, her pale face listless*…….]（p.224）

Alma は心身のバランスを崩し、数か月に及び引きこもっていたことが伺い知れる。この理由は、Buchanan 医師の逝去に対し、Alma が痛烈に責任を感じたことが要因であろう。生真面目な性格の Alma のことを考えると思い詰めた状態だったに違いない。

この時期に、Alma が午前二時ごろ頻繁に外出していることに、Winemiller 牧師は気づいており、それを咎めた。折しもこの日は、志半ばにて急逝した Buchanan 医師が長年取り組んでいた研究を John が引き継いで完成させたことで、街を挙げてのお祝いの日だった。窓からまるでお祭りのような様子を見下ろした Alma は眩暈を感じ足元をふらつかせたために、Winemiller 牧師が医者を呼ぼうと提案した。すると Alma は「やめて、やめて。誰も呼ばないで。私、死んでしまいたい！」（“No, no, don't. Don't call anybody to help me. I want to die!”（p.227））と言ってソファに倒れ込んだ。Alma は Buchanan 医師の死をきっかけに心身のバランスを崩して伏していた。その間に父親が亡くなったことがきっかけで、John は逆に輝かしい栄光を手に入れることができた。 Alma は将来の安泰を約束されたも同然の John と、彼女自身との立場の違いをひしひしと感じた。このことによって、死にたいくらいに惨めで悔しい気持ちが彼女の口をついて出たと考えられる。

John が帰宅すると、診察室に Alma の声楽教室の生徒である Nellie Ewell が現われた。かつて、John は Nellie の母親に面と向かって、男性にふしだらな様子を改めて Nellie のためにもっときちんと生活するように苦言を呈したことがあった。その時の Nellie が今や女子大学生となっていた。「彼は信じられない面持ちで彼女を見つめ続けた。」（[*He remains staring at her, unbelieving….*]（p.228））Nellie は John をあたかも挑発するかのような素振りをした。すると、「彼は軽く彼女にキスをした。彼女は彼の首に手をまわすと、彼の頭を自分の顔に押し付けた。」（[*He gives her a quick kiss. She clings to him, raising her hand to press his head against her own….*]（p.229））それから数日後、Alma は出かけた先の公園で Nellie と遭遇し、John と Nellie とが交際していることを知った。彼女は Nellie と別れたその一時間後に John の診察室を訪れた。

Alma と John は議論を通してお互いの価値観の相違を認識してきた。

Alma は信仰の対象を幼い頃から持っていたために、目に見えず触れられなくても精神（魂）の存在を認め、価値を置くこともできる。何よりも、彼女の名前はスペイン語で「魂」を指す言葉である。一方、John はこう考える。肉体とは見ることも触ることもできれば、匂いでその存在を確認することも可能である。故に、触れることができないものに対しては彼にはそれはまるで煙のような存在に思えて、正に空を掴む感覚であり、理解できずに納得がいかない。Alma との複数回に及ぶ議論の中で、John は次第に人体についての医学的な知識だけではなく魂という目に見えない煙のようなもの、即ち精神性について気付きを得始めていた。しかしながら、John にとって、精神の存在を見出し、そこに畏敬の念を抱いたからといって、Alma との恋愛関係へとはつながらなかった。Alma の超自我が彼女の Id に命令し、貞淑であることを求めるために自我が仲裁した結果、「慎み深さ」（lady stuff）を保つとして、Alma は John とどうしても深い仲になれなかったのである。アメリカ合衆国南部において、上流階級の女性の理想像を意味する Southern belle という言葉がある。その確固とした理想像があるが故に、Alma は、一番身近な年上の女性である母親が精神を患っている姿を見て、一人の大人の女性として自分がどう振る舞うべきか、自信が持てず、悩みを深くしていたことであろう。

John と Nellie との婚約を知り、衝動的であったとも言えるが、Alma は John に思いの丈の全てを曝け出した。相当の勇気が必要だった。しかしながら、曝け出してみても、John の心が動くことはなかった。 これは、Alma が John からの「男女の間にあるものは尊敬だけではない」（“There’s other things between a man and a woman besides respect….”（p.201））という言葉に見出されるように、彼からの性的な関係への誘いを受け入れる姿勢を Alma が示すことができなかったことが、John にとっては Frustration だったからではないだろうか。John は父親を亡くしたものの、父親の生前の研究を引き継いで完成させたことで医師としての地位と名誉を手に入れ

た。乗り越えるべき父親がいなくなったことは、John にとって内面的な葛藤の消滅を意味する。また、Buchanan 医師と彼自身との同一化を図ることにより、Oedipus complex が消滅したことから、John にとって Nellie を Carnal desire のみの対象とみなす必要はない。 Nellie が幼い頃から John のことを尊敬し彼に感謝していたことを彼自身も認識していた。今や美しく成長した Nellie は、積極的に John を誘っていた。お互いの良さを認め合い価値観を共有できる女性として、彼は Nellie を生涯の伴侶に選んだのであろう。

この戯曲の最終場面であるが、Alma は一つの行動を起こす。 John との関係は発展しないばかりか、John と Rosa との結婚の話や、Buchanan 医師の死、John と Nellie との婚約など、連続して Alma の身にショッキングで不都合なことが起きた。勇気を奮って自らの積年の思いの丈を John に告白したが、彼には受け入れてもらえなかった。しかし、彼女の肉体は変わらず残っているのだ。Alma は打ちのめされた気持ちで公園に来て、そこで出会った見ず知らずのセールスマンと会話を交わし、彼に意気投合したのである。故に、彼と夜の繁華街へと繰り出したのである。

幼い頃から John を慕い続け、愛していた Alma は、自分の内面に変化が生じたのである。今までは、彼女の心には John の存在しかなく、彼だけを見て、彼だけを一途に愛してきたのであるが、現実には自分が彼を慕うようには、彼は自分を女性として必要としてはくれないことを心から理解し、内面が変化してきたのである。それは言わずもがな、男性に愛されたいと言う感情である。誰でもいいので、だれか、John 以外の男性に愛されたいという感情である。異性に対して、初めて積極性が Alma に芽生えたと言いかえることもできよう。今までのままでいるわけにはいかないと彼女は本能的に悟ったのである。

結論

Alma は、15、6 年間に及び John を見つめてきた。彼女は幼少期の頃は、母親を亡くした彼を気の毒に思い、母親代わりになりたいと願う心優しい少女だった。しかしながら、成人した後も、彼が家族の心配も顧みることなしに自由奔放に生きているように見受けられ、彼を羨ましく、時に妬ましく思ったこともあったに違いない。受け身の状態で、父親に言われたことに逆らわず、おとなしく受け入れてきた Alma にとって、確かに安全な生活を送っていただろうけれども、それは彼女自身の人生を歩んでいるとは言い難いだろう。母親が精神を患っていることから、良好な母子関係は構築しづらく、女性としての価値を自分自身に見出しにくい面もあったであろう。また、母親の代わりに家業に従事し、Suppression を強いられる環境だったことは前述した通りである。

一方、女性遍歴を繰り返した末に、John は医師となった。彼は幼児的な反抗に対する反動として Buchanan 医師に屈服したままだったが、Buchanan 医師との突然の別れにより、父親による圧迫から抜け出した。彼は父親との同一化を経て、超自我の核となる部分を構成した結果、Alma が説いていた精神的な価値観も理解し受け入れられるようになっていた。また、人としての心の痛みを覚えたことは彼の心の成長へと繋がったと考えられる。その上で彼は Nellie と苦楽を共にする決意をし、結婚に至ったのである。また、一連の出来事を通して、John は Identity を確立したと言えよう。

両親に尽くし、控えめな言動で誠実に生きてきた Alma が、行きずりの男性に意気投合し、夜の歓楽街にタクシーに乗って消えてゆく、その姿にはまるで精神性は感じられず、快楽を追及する女性に見受けられる。まるで当初の John と Alma の立場や将来像が丸ごと入れ替わったかのように見受けられる結末は印象的である。彼女は見ず知らずの男性とタクシーに乗り込む際に、公園にある天使の石像に手を振り、あたかも別れの挨拶をする仕草を取った。信仰心が厚い Alma がこのような行動を取った理由は、

即ち、信じられるものはもはや神や天使、精神性ではなく、自分自身、即ち肉体であると考えるに至ったからではないだろうか。

最後に、*Conversations with Tennessee Williams* に収めてあり、1972 年 4 月 29 日のインタビューで、Williams が Jim Gaines に応えた会話の内容に着目し、Williams がこの作品に込めた想いを汲み取りたい。

> "I think the character I like most is Miss Alma, though. You know, she really had the greatest struggle...You see, Alma went through the same thing that I went through—from puritanical shackles to, well, complete profligacy." [7]

Williams も実際に、牧師であった祖父を持ち、家庭内に一種の厳しさを感じながら過ごした幼少期を過ごしたと推察できる。祖母が音楽教師であったことをも作品内で Alma に投影していると思われる。戯曲の登場人物に Williams が家族をはじめとして彼自身を投影するのであれば、当然のように Alma も John も Williams 自身であるはずと筆者は考える。Williams は同性愛者であったことから、男性でありながら女性の気持ちも手に取るようにわかったのではないだろうか。

Summer and Smoke の時代設定は 1916 年である。その時分に Williams は 16 歳だった。父の転勤の都合でミシシッピ州に移住した先で Williams はジフテリアを患い、ブライト病を併発したと診断を受け、左半身が麻痺ししたためにその後 2 年間歩行が困難になった。暗い気持ちで過ごした日々だったであろう。その頃の自分の置かれた境遇や気持ちを思い返しながら、後にこの戯曲が執筆されたと考えるならば、Williams は Alma にどのような思いを込めたであろうか。Williams は思い通りにいかない人生を、何としてでも乗り越えるものとして捉え、その思いを Alma に込めて作品を執筆したのではないかと筆者は考える。 Alma は 20 代半ばであり、彼女は

半生に渡り John を慕い続けてきた。John は自由奔放な生活を経て、医師として定職に就き、結婚をして家族が増え、幸福さを増しているように思われる。Alma には、徐々に堅実な生活へと移行している John が人生を謳歌しているように思われた。Alma は自分の置かれた環境と比較して次第に思い詰め、現状を打破したいと試みた結果が出奔だったのだろう。従って、Williams は思い通りにいかない人生の象徴として John を作品に登場させたと考えられる。

以上のことから、Alma が、精神性を重んじるが故に頑なだった心を解き放ち、今後は主体的に人生を歩んでいく覚悟を、Williams は出奔という形で戯曲の中で表現したと筆者は解釈している。

Notes

1 Albert J. Devlin, ed. *Conversations with Tennessee Williams* (University Press of Mississippi, 1986), p.200.
Williams が Hart Crane の詩集を読みながら *Summer and Smoke* を執筆していた時に、彼女も同じテーブルで彼女の作品を執筆していた。後に彼女が心臓発作で倒れた時にも Williams は彼女の自宅を訪問し見舞っている。自宅は偶然にも、Rose が滞在しているサナトリウムの近くであった。

2 Tennessee Williams, *The Theatre of Tennessee Williams* (New York: New Directions, 1971), Volume two, p.125.
以下、同書からの引用は全てページ数を括弧に入れて本文中に記す。

3 精神分析の用語として初めて E. H. Erikson によって用いられた。同一性とも訳されている。

4 女児の Oedipus complex について、男児のそれと比較して次のように述べられている。また、超自我との関係について触れている。
“With the transference of the child-penis wish on to her father, the girl enters in to the situation of the Oedipus complex. The hostility against her mother, which did

not require to be newly created, now receives a great reinforcement, for her mother becomes a rival, who gets everything from her father that she herself wants…… And here we notice a difference between the two sexes in the relation between the Oedipus complex and the castration complex, a difference which is probably a momentous one. The boy's Oedipus complex, in which he desires his mother, and wants to get rid of his father as a rival, develops naturally out of the phase of phallic sexuality. The threat of castration, however, forces him to give up this attitude. Under the influence of the danger of losing his penis, he abandons his Oedipus complex; it is repressed and in the most normal cases entirely destroyed, while a severe super-ego is set up as its heir. What happens in the case of the girl is almost the opposite. The castration complex prepares the way for the Oedipus complex instead of destroying it; under the influence of her penis envy the girl is driven from her attachment to her mother, and enters the Oedipus situation, as though it were a heaven of refuge. When the fear of castration disappears, the primary motive is removed, which has forced the boy to overcome his Oedipus complex. The girl remains in the Oedipus situation for an indefinite period, she only abandons it late in life, and then incompletely. The formation of the super-ego must suffer in these circumstances."

上記の引用元 Nandor Fodor and Frank Gaynor, eds ; with a preface by Theodor Reik, *Freud : Dictionary of Psychoanalysis*, (Westport, Connecticut; Greenwood Press, 1969), pp.130-131.

また、女児の Oedipus complex について、C. G. Jung は 1913 年に男児の Oedipus complex に対応するものとして、女児の両親に対する願望や態度の特徴を Electra complex という用語で示した。しかし、Freud はこの用語は役に立たないとした。

5 超自我について、Freud は第二局所論もしくは、構造論において、心的装置もしくは心的組織のなかで自我から分化してかたちづくられる一つの組織、もしくは活動機関と定義しており、自我に対して裁判官や査察官の役目を担い、良心、自己観察、理想形成をその機能としている。

6 耐え難い表象に直面した主体が、思考の仕事によってそれを他の思考に結び付ける手段を欠いているが故に、その表象を抑圧するところの操作。なお、Freud の娘の Anna Freud は児童精神分析の研究で、防衛について Freud の研究をさらに発展させた。

7 Albert J. Devlin, ed. *Conversations with Tennessee Williams* (University Press of

Mississippi, 1986), p. 216.

『闘技士サムソン』におけるダリラの両極性
――「太母像」に焦点をあてて――

野　村　宗　央

1．はじめに

ジョン・ミルトン（John Milton, 1608-74）にとって、イスラエル（Israel）の士師サムソン（Samson）を裏切ったデリラ（Delilah）[1] とはどのような女性だったのか。晩年の劇詩『闘技士サムソン』（*Samson Agonistes*, 1671）において、ミルトンは「士師記」（Judges）を土台としながらもその設定にいくつかの変更を加えており、なかでも目を引くのは、デリラをサムソンの妻とし、かつ自身の裏切りに対する弁解の機会を与えたことである。この変更によってダリラ（Dalila）[2] は、サムソンを金で売った、ただの「ソレクの谷の女」[3] 以上の特徴を与えられ、後にその評価は良悪二分されることになる。[4] この変更によって、ミルトンは両極的評価を促す素地をデリラに加えたと言えるが、その意図は “nor has her [Dalila] visit any effect, but that of raising the character of *Samson*” [5] と述べたサミュエル・ジョンソン（Samuel Johnson, 1709-84）、そしてサムソンの「忍耐の人格の確定」[6] にあるとした新井明の見解に明白である。すなわち、極めて強力な誘惑を忍耐により退けさせることで、サムソンの人格を高める、その点に悪女としてのダリラの性格描写の意図があった。『闘技士サムソン』におけるダリラは、サムソンの人格をより高めるために、ミルトンの手によって「士師記」のデリラ以上に強力、かつサムソンだけでなく読者をも惑わす「誘惑者」になったといえる。では、ミルトンは「士師記」のデリラをどのように捉えた上で、強力な「誘惑者」ダリラとして再構築したのか。

ミルトンのデリラ観について、ウィリアム・ライリー・パーカー（William

Riley Parker）は、ダリラをエウリピデス風であるとし、[7]『トロイアの女たち』（*Troades*, 415）におけるヘレネ（Helene）との類似性を指摘している。確かに、両者の登場の仕方、外見的特徴や発言内容等を考慮すれば、ミルトンがヘレネを通してデリラを見た節があるのは間違いない。しかしながら、アーチー・バーネット（Archie Burnett）は、ダリラの訪問理由と彼女が持ち得る動機を考えた場合、パーカーの説は弱まると言う。[8] すなわち、ヘレネの裏切りの動機は、夫メネラオス（Menelaos）ではなくトロイア（Troia）の王子パリス（Paris）のためであったが、[9] ダリラの場合は、夫サムソンのためであったということである。[10] さらにバーネットは、その訪問の動機が作品のテーマを解明する上で、最も重要な焦点にすべき点であると述べ、[11] その一つとして、ジョン・ケアリー（John Carey）の説くダリラの「独占欲」を挙げている。[12]

本稿では、まずケアリーの説に目を向け、ダリラの「独占欲」の特徴を確認する。次に、カール・グスタフ・ユング（Carl Gustav Jung, 1875-1961）の言う「太母像」の概念とダリラの特徴を照らし合わせ、その類似点を指摘し、ミルトンの描いたダリラに「太母像」を読み取ることの出来る可能性を提示したい。

2．ダリラの「独占欲」

まず、『闘技士サムソン』におけるダリラの行動を特徴づける「独占欲」の詳細を明らかにする。ケアリーは、ダリラの訪問の動機は曖昧であるとしつつも、その最も適切な動機として「独占欲」（“possessiveness”）[13] を挙げている。本章では、先行研究を踏まえその特徴を検証する。

ダリラはサムソンの前妻と同様に、[14] サムソンが自分を捨てて別の女性のもとに行くのではないかという懸念、すなわち「愛の嫉妬」（“The jealousy of love”（*Samson Agonistes* 791）から夫を裏切ったと言う。[15] そして、“No better way I saw than by importuning / To learn thy secrets, get into my

power / Thy key of strength and safety:”（797-99）と、サムソンを自分のもとに引き留めるために、力の秘密を解明したいと考えた。また、サムソンの秘密を漏らした理由について “I was assured by those / Who tempted me, that nothing was designed / Against thee but safe custody, and hold: / That made for me,”（800-04）と述べている。ダリラは、サムソンが安全な管理下に置かれ、監禁される以上のことはされないと言われ、[16] それが自分にとって好都合だった（“That made for me”）[17] と明かす。

ダリラの都合とは何であろうか。二つのことが考えられる。一つは、力を失ったサムソンが外で危険を冒すことがなくなること、つまりダリラの言う通り、サムソンの「安全」である。そしてもう一つは、他の女に誘惑されないようサムソンの肉体を独占し、自身の性的欲求を満たすことである。従って、ダリラは次のように続ける。

I knew that liberty
Would draw thee forth to perilous enterprises,
While I at home sat full of cares and fears,
Wailing thy absence in my widowed bed;
Here I should still enjoy thee day and night
Mine and love’s prisoner, not the Philistines’,
Whole to myself, unhazarded abroad,
Fearless at home of partners in my love.（803-10）

ダリラは、もしもサムソンが自由であれば、外で危険を冒すことになり、そうなれば孤閨にて（“in my widowed bed”）サムソンの不在を嘆くと述べているが、この “widowed bed” は性的意味合いで解釈可能である。[18] また自身と愛の捕虜として、昼夜を問わずサムソンを楽しみ（“enjoy”）[19]、完全に自分のものにするとも述べている。ケアリーは “His [Samson] physique

made him necessary to her sexual appetite, and naturally she did not want him wasted in battle." [20] と述べているが、ダリラが自身の性的欲求を満たす上で、サムソンが安全に捕らえられることは好都合であったということが分かる。このように、ダリラの「独占欲」は、サムソンの「安全」と自身の「性的欲求の充足」という二つの都合から成っているといえる。

ダリラにとって、この二つの都合は同等の重みがあり、どちらが優先されるわけでもないと判断することは、ダリラという誘惑者を考える上で重要である。というのも、前者はサムソンを想うダリラの肯定的側面を表し、後者は自己本位な否定的側面を表しているといえるが、これらがダリラの捉えがたい複雑な特徴の両極となり、「誘惑」を強固にしているからである。そもそも、ダリラによれば、再びサムソンのもとを訪れたのは夫婦の愛情（"conjugal affection"（739））からであり、また裏切った時点において "though the fact more evil drew / In the perverse event than I foresaw"（736-37）[21] と述べているように、サムソンが失明するとは思っていなかった。そして、サムソンの力を奪うことで、人並みになってほしい "Be not unlike all others"（815）と願っていたのである。さらに、ダリラは自身の償いの気持ちを以下のように表している。

> I to the lords will intercede, not doubting
> Their favourable ear, that I may fetch thee
> From forth this loathsome prison-house, to abide
> With me, where my redoubled love and care
> With nursing diligence, to me glad office,
> May ever tend about thee to old age
> With all things grateful cheered, and so supplied,
> That what by me thou hast lost thou least shalt miss.（920-27）

ダリラは、ペリシテ（Philistia）の領主達に申し入れをし、現在の獄舎から救い出し共に暮らしたいと述べ、また老年にいたるまで目の見えないサムソンを助け世話をしたいとまで言う。例えば、ダリラを擁護する立場として、ウィリアム・エンプソン（William Empson）は “and what ambitious or deceitful purpose could she have in offering to spend the rest of her life as nurse to a blind and (from her point of view) totally discredited husband? One can imagine the corrupt Delilah doing it ‘for a whim’, as the phrase goes, but even so the whim would not be a bad impulse.” [22] と述べているが、サムソンを説得するにあたり、ダリラが上記のように、重ねて性的誘惑を繰り返すのは確かであり、それがダリラの目的に合致するのも事実である。ドン・キャメロン・アレン（Don Cameron Allen）によれば、ダリラの訪問の理由は、悔恨と自責の念によるとしても、それらの感情はわずかな部分であり、実際には情欲によるものである。[23] 以上のように、ダリラの「独占欲」に焦点を当てると、その肯定的・否定的側面のどちらがデリラの本性であるかは甲乙つけがたく、上記のように、その評価が二分されるような特徴を成していると言える。デービッド・デイシズ（David Daiches）は、ダリラの愛を「誠実だがひねくれた愛」（“sincere but perverse love”）[24] と評しており、また続けて “If we . . . recognize the various tensions and overtones that result from the remarkable conflict between the two [Samson and Dalila], we can appreciate Milton’s achievement in making this complex situation the centre of his play.” [25] と述べている。ダリラの愛が誠実だがひねくれたものであるが故に、サムソンは苦しみ、かくてミルトンの意図するように、その人格は陶冶されるのである。以上のように、ダリラには、サムソンの「安全」を願う心と、自己本位とも言える「性的欲求の充足」という肯定的・否定的側面とが同居しており、それらは「独占欲」という形で統合され、ミルトンのダリラ像を形成しているといえる。

３．「太母像」からみるダリラ

この両極的な「独占欲」は、どのように着想されたのか。本章では、ユングの言う「太母」（the Great Mother）の像に見られる性質と、ダリラの性質との類似性を指摘する。

ユングによれば、「太母像」とは、母元型（the Mother Archetype）の派生物であり、[26] またその母元型のシンボルは、肯定的、好意的な意味か、あるいは否定的で邪悪な意味を持ち、[27] 以下のような性質を示している。

> The qualities associated with it [the Mother Archetype] are maternal solicitude and sympathy; the magic authority of the female; the wisdom and spiritual exaltation that transcend reason; any helpful instinct or impulse; all that is benign, all that cherishes and sustains, that fosters growth and fertility. The place of magic transformation and rebirth, together with the underworld and its inhabitants, are presided over by the mother. On the negative side the mother archetype may connote anything secret, hidden, dark; the abyss, the world of the dead, anything that devours, seduces, and poisons, that is terrifying and inescapable like fate.[28]

すなわち、母らしい気遣いと思いやり、理性を超えた知恵と精神的高揚、手助けとなるあらゆる本能や衝動や、慈しみ、支える、あるいは成長を促すといった肯定的側面を持ち、また暗きもの、呑みこみ、誘惑するものといった否定的側面を持っているといえる。

まず否定的側面について言えば、暗きもの、誘惑するもの、そして呑みこむものという側面は、まさにサムソンを象徴する失明との関連で注目すべき側面であるといえる。

though sight be lost,

Life yet hath many solaces, enjoyed
Where other senses want not their delights
At home in leisure and domestic ease,
Exempt from many a care and chance to which
Eyesight exposes daily men abroad.（914-19）

ダリラはサムソンに対し、失明しても人生には多くの慰めがあり、自分が視覚以外の感覚的喜びを提供すると述べているが、ケアリーの指摘通り、[29] このダリラの台詞には明らかに性的な誘惑の意図が含まれている。サムソンが失明したことによって、ダリラは、そこに確かに存在してはいるが目には見えないものとなって、再びサムソンと性的関係を結ぼうと画策しているといえる。そこには、暗さに乗じて誘惑し、サムソンを完全に自身に依存させたいというダリラの「独占欲」を見出すことが出来る。また、先述の通り、ダリラは失明したサムソンをペリシテに引き渡すのではなく、自分の虜にすること、つまり完全に自分のものにすることを望んでおり、サムソンを外に出さず、それ故に、危険な目にあうこともないと述べている（807-10）。このダリラの言は、「なにものをも包み込み、自らと一体となる」[30]、あるいは「子の独立を妨げ、かかえこみ、はては呑みこむ」[31] といった「太母像」の否定的側面と捉えることが可能である。さらに、ユングは “Evil symbols are the witch, the dragon (or any devouring and entwining animal, such as a large fish or a serpent), ...” [32] と母元型のシンボルとして蛇を挙げているが、作中にてダリラはまさに蛇 “a manifest serpent”（997）と呼ばれている。また、サムソンの “Thy [Dalila] fair enchanted cup, and warbling charms / No more on me have power, ...”（934-35）という台詞から、『ラドロー城の仮面劇』（*A Masque presented at Ludlow Castle*, 1634）においても言及のある魔女キルケー（Circe）[33] とダリラが重ね合わされていることが見て取れるが、エーリッヒ・ノイマン（Erich Neumann, 1905-60）は、否定的「太

母」としてキルケーを挙げている。[34]

次に、肯定的側面との関わりについて述べる。先述の通り、ダリラは（その実、それは「独占欲」に起因するものではあるが）夫婦の愛情から再びサムソンのもとを訪問し、またその目的は、サムソンを説得し共に暮らすこと、[35] 換言すれば、現状からの救済にあった。

But conjugal affection
Prevailing over fear, and timorous doubt
Hath led me on desirous to behold
Once more thy face, and know of thy estate.
If aught in my ability may serve
To lighten what thou suffer'st, and appease
Thy mind with what amends is in my power,
Though late, yet in some part to recompense
My rash but more unfortunate misdeed.（739-47）

ダリラは自身の罪を認めており、サムソンの苦しみを和らげ、償いをし、その心を鎮めたいと考えている。また、ペリシテの領主達に申し入れをし、現在の獄舎から救い出し、共に暮らしたいと言い、老年にいたるまで目の見えないサムソンを助け世話をしたいとまで申し出る（920-27）。これは「太母像」の「手助けとなるあらゆる本能や衝動、そして慈しみ、支える」といった肯定的側面に重なるといえる。

しかしながら、この肯定的側面が、呑みこむという否定的側面と紙一重であることがより重要である。[36] すなわち、サムソンに対する過保護ともいえる肯定的側面としての介助精神は、かえってサムソンの自我の成長を阻む否定的側面としても機能しているのである。[37] この相反する両面性は、まさにダリラの「独占欲」が示す両極性、すなわち「誠実だがひねくれた

愛」の源泉となって、ダリラの「誘惑」を形成していると捉えることが可能であり、またその肯定・否定紙一重の「誘惑」が、その誘惑を乗り越えた先にある「人格の確定」につながることから、「太母像」の性質の一つである「成長の促し」と捉えることも不可能ではない。以上のように、ユングの言う「太母像」の肯定的・否定的性質をダリラの特徴に照らし合わせると、その重なるところは多い。

４．おわりに

『楽園の喪失』（*Paradise Lost*, 1667）の例を挙げるまでもなく、ミルトンの聖書、ギリシア・ローマ神話をはじめとする神話における知識は広範にわたり、見識は極めて深い。従って、パーカーの言うエウリピデスのヘレネや、あるいはホメロス（Homer）の描く、先述のキルケーといった、ギリシア神話に出自を持つキャラクターを意識的・無意識的に取り入れ、ミルトンがダリラ像を構築しているのは間違いない。

本稿では、ヘレネやキルケーといった具体的イメージの、より深くに在るといえる集合的無意識（collective unconscious）としての「太母像」に焦点を当て、極めて神話的な登場人物である「士師記」のデリラを、ミルトンがどのように捉え、自身のダリラ像に反映させたのかについて考察した。まず、ダリラの訪問動機である「独占欲」に着目し、その目的とするところに､サムソンの「安全」と自身の「性的欲求の充足」という肯定的･否定的側面があることを確認した。次に、ダリラの「独占欲」と、ユングの言う「太母像」の持つ肯定的・否定的側面との比較考察を行い、その両面的性質がダリラに見出され得ることを実証した。以上のことから、ミルトンが自身のダリラ像を構築するにあたり、とりわけ「独占欲」という特徴を付与する際、集合的無意識としての「太母像」的両面性に想到した可能性を提示し、本稿の結論とする。

Notes

1 英語では一般的に “Delilah” と綴られるが、ミルトンは “Dalila” に変更している。変更の意図、詳細については、佐野弘子「ミルトンのダリラー再考」『ミルトンとその光芒：英文学論集』（東京：金星堂、1992）、pp. 59-60. を参照のこと。

2 註 1 を参照のこと。

3 “a woman in the valley of Sō’rĕk” *The Bible*. Authorized King James Version (New York: American Bible Society, n.d.), Judg. 16.4.

4 デリラ評価の歴史的変遷、およびその両極性については Archie Burnett, Introduction. *A Variorum Commentary on the Poems of John Milton Vol.3: Samson Agonistes*. (Pittsburgh: Duquesne UP, 2009), pp. 19-25. を参照のこと。

5 Samuel Johnson, *The Rambler*. Vol.6. (Edinburgh: Sands, Murray, and Cochran, 1751), p. 58.

6 新井明『ミルトンの世界：叙事詩性の軌跡』（東京：研究社出版、1980）、p. 291.

7 William Riley Parker, *Milton’s Debt to Greek Tragedy in Samson Agonistes* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1937), p. 126. 参照。

8 Burnett, *op. cit*., p. 20. 参照。

9 内山敬二郎訳「トロイアの女たち」『エウリピデス全作品集［II］』、エウリピデス著、Kindle 版（東京：グーテンベルク 21、2009）、ll. 969-1032. 参照。

10 Burnett, *op. cit*., p. 20. も参照のこと。

11 *Ibid*., p. 24. 参照。

12 *Loc. cit*. 参照。

13 John Carey, *Milton* (London: Evans Brothers Limited, 1969), p. 142.

14 Judg. 14.1-2. を参照のこと。

15 John Carey and Alastair Fowler, editors. “Samson Agonistes.” *The Poems of Milton*, by John Milton (London: Longmans, 1968).

16 なお、このデリラの台詞には「士師記」の記述との齟齬が見られる。「士師記」において、ペリシテの領主達は “And the lords of the Phĭ-lĭs’tĭneş came up unto her, and said unto her, Entice him, and see wherein his great strength *lieth*, and by what means we may prevail against him, that we may bind him to afflict him: and we will give thee every one of us eleven hundred *pieces* of silver.”（Judg. 16.5）と述べられており、少なくともサムソンを苦しめる意思があることは明らかである。

17 “made for = was advantageous to.” Takizawa Masahiko, Notes. *Samson Agonistes*, by John Milton (Tokyo: Kenkyusha, 1996), p. 123.

18 パーカーのメモ（未出版）には “the bed as the place of conjugal union occurs again in 1021 and may be alluded to in 916.” Stephen B. Dobranski, Editor, *A Variorum Commentary on the Poems of John Milton Vol.3: Samson Agonistes*. (Pittsburgh: Duquesne UP, 2009), p. 288. とあり、916、1021 行目には “Where other senses want not their delights”（916）、“Successor in thy bed,”（1021）とある。

19 “enjoy” についても、パーカーは “have sexual intercourse with.” と解釈している。*loc. cit*.

20 Carey, *Milton*, p. 142.

21 “Dalila implies she did not guess the Philistines would blind Samson (736-7, 800-2). There seems no cause to question this.” *loc. cit*.

22 William Empson, *Milton's God*, Revised ed. (London: Chatto & Windus, 1965), p. 224.

23 Don Cameron Allen, *The Harmonious Vision: Studies in Milton's Poetry* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1954), p. 88. 参照。

24 David Daiches, *Milton* (New York: The Norton Library, 1966), p. 244.

25 *Loc. cit*.

26 Carl Gustav Jung, *The Archetypes and the Collective Unconscious*. Translated by R. F. C. Hull, Kindle ed., 2nd ed., (New York: Routledge, 1991), paragraph 148. 参照。

27 *Ibid*., paragraph 157. 参照。

28 *Ibid*., paragraph 158.

29 “Dalila slyly reminds Samson of the pleasures of her bed.” Carey, *The Poems of John Milton*, p. 375.

30 河合隼雄『無意識の構造』（東京：中央公論社、1977）、p. 73.

31 林道義『ユング』（東京：清水書院、1980）、p. 103.

32 Jung, *op. cit*., paragraph 157.

33 “The cup and charms relate Dalila to Homer's Circe and to Milton's own Comus (*Masque* 51, 150).” William Kerrigan, John Rumrich, and Stephen M. Fallon, notes, “Samson Agonistes.” *Paradise Regained, Samson Agonistes, and the Complete Shorter Poems*, by John Milton, Kindle ed., (New York: Modern Library, 2012), l. 934.

34 “The Great Mother is therefore the sorceress who transforms men into animals—Circe, mistress of wild beasts, who sacrifices the male and rends him.” Erich Neumann, *The Origins and History of Consciousness*. Translated by R. F. C. Hull, Kindle ed., (New

York: Routledge, 1954), paragraph 68.

35 Phillip J. Donnelly, “Dalila.” *The Milton Encyclopedia*. Edited by Thomas N. Corns (New Haven: Yale UP, 2012), p. 86. を参照のこと。

36 「太母の肯定的な側面は、子どもを抱きかかえ慈しむこととして示される・・・子どものためには自分のすべてをささげたい。このようなひたむきの感情は･･･否定的なものと紙一重の状態である」河合隼雄『昔話と日本人の心』（東京：岩波書店、2002）、p. 54.

37 河合は「くもは太母の否定的側面を表す典型的な存在である。張りめぐらした網によって、無視をとらえて殺してしまう姿は、小さい自我をとらえこんでその成長を阻む太母そのものである」河合『昔話と日本人の心』、p. 54. と述べている。またここでは、太母が自我の成長を阻む性質を持ち得るという側面に着目する。

モダニズムと危機の時代
――『ユリシーズ』再考――

松　山　博　樹

はじめに

第一次世界大戦と第二次世界大戦の戦間期という未曽有の危機の時代にあって、ジークムント・フロイト（Sigmund Freud 1856–1939）が戦争の時代を生きる人間の心理を生と死の欲動、すなわちエロスとタナトスと直接的に結びつけて考えていたことは、『快感原則の彼岸』（*Beyond the Pleasure Principle*, 1920）などからも明らかである。[1] 産業革命以来、急速に発達した科学技術が戦時向けに転用された結果、第一次世界大戦というカタストロフィを招くこととなり、進歩への過信は揺らぎ始めていた。現代人としての自負を喪失し、心的外傷を負った人間たちはタナトスに伴う反復強迫に従うように、マゾヒズム的に再び世界大戦を繰り返すことになる。アルベルト・アインシュタイン（Albert Einstein 1879-1955）との往復書簡集『人はなぜ戦争をするのか』（*Why war?*, 1933）において、反戦を強く訴えるアインシュタインに対し、結論めいたものを最後まで歯切れよく提示しえなかったフロイトにとって、戦争とは心の深奥に根源的に巣食い、たびたびその悪魔的な顔をもたげて自分自身を傷つけようとする厄介な病、社会の病理であったとも言えるかもしれない。[2]

一方、同じく戦間期を生きたアイルランドの作家ジェイムズ・ジョイス（James Joyce 1882–1941）は歴史について “a nightmare from which I am trying to awake.”（42）と小説『ユリシーズ』（*Ulysses*, 1922）の中で主人公スティーヴン・ディーダラス（Stephen Dedalus）に言わしめている。[3] ウィリアム・シェイクスピア（William Shakespeare 1564-1616）が言うように

芸術とは社会を映す鏡であり、否が応でも歴史の意味を問い直さざるをえない危機の時代にあって、文学もまたミメーシスとして鏡の役割を担わなければならないのであれば、1904 年 6 月 16 日のアイルランドの首都ダブリンを、文学青年ディーダラスと冴えない中年の広告取りレオポルド・ブルーム（Leopold Bloom）がそれぞれ逍遥するというただそれだけのこの物語は、ディーダラスの言う「歴史」という悪夢をどのように描いているのだろうか。危機的時代にありながら決して歴史的禍乱そのものを描くわけでもなく、あくまでも庶民のさりげない些細な日常にこだわったジョイスにとって、「歴史」は切実な社会的病理として認識されてはいなかったのだろうか。逆説と諧謔を好むジョイスが、アイルランドの芸術は “cracked lookingglass”（18）であるとスティーヴンに言わしめていることにも注意しなければならないだろう。

1.『ユリシーズ』のモダニズム性

一般的にモダニズムとは十九世紀末から第一次世界大戦前後に至るヨーロッパにあって伝統的な価値観に対するアンチテーゼとして生まれた芸術運動とされている。つまり、それは未曽有の危機の時代に対する芸術上の応答であった。そしてその影響は広汎にわたったがゆえに、モダニズム文学が芸術全般における前衛運動の一支流として、絵画や音楽などと相互に影響しあったことは言を俟たない。例えばルネサンス以来の伝統的絵画が単一焦点による遠近法を前提としていたことに対し、当時、最先端の知見であったアインシュタインの相対性理論に影響されるかのようにモダニズム画家たちが反発し、パブロ・ピカソ（Pablo Picasso 1881-1973）らに代表されるキュビズムなどの多元的視点による空間把握が生み出されたのと同様、ジョイスもまた『ユリシーズ』において伝統的な現実認識の在り方と決別していることはいくつかの例からも明らかである。

例えば第七挿話、広告取りのブルームは新聞社で働いている。

WITH UNFEIGNED REGRET IT IS WE ANNOUNCE
THE DISSOLUTION OF A MOST RESPECTED DUBLIN BURGESS

Hynes here too: account of the funeral probably. Thumping. Thump. This morning the remains of the late Mr Patrick Dignam. Machines. Smash a man to atoms if they got him caught. Rule the world today. His machineries are pegging away too. Like these, got out of hand: fermenting. Working away, tearing away. And that old grey rat tearing to get in.（150）

古代ギリシャ時代以来、芸術の根本的役割はミメーシスにこそあるとされ、リアリズム小説においては全知の語り手が読者の理解を助けていた。一方でモダニズム芸術は伝統的手法を離れ、多元的視点を導入する。この引用ではリアリズム小説の様式が放棄され、新聞記事のような形式によって新聞社内の様子が描写されている。テクスト上に次々と現れる見出しは現実の新聞のようにそれぞれの後に続く記事を簡潔にまとめたものもあれば、本文の内容とは無関係に提示されることもある。読者に対して親切な語り手は存在しない。語り手は読者の理解を助けるべく客観的に筋を語るのではなく、むしろ積極的に文体や形式に干渉する。新聞社内の様子が新聞記事の形式で描写されることそれ自体が語り手の主観を明示していると言えよう。テクスト内に提げられた新聞記事を読むという現実的な体験を通して、読者は自らの思考の中で一つの独自な世界観を構築することを迫られる。それは我々が日常、例えば新聞を読み、世界の動向を知り、外界に対する価値体系を自ら形成して生活しているのと同様の事態である。

この引用においては機械技術によって肥大化した都市の日常もまた描かれている。機械に弄ばれる現代人の孤独、疎外感、無力感をそこに読み取ることもできるだろう。ミメーシスとしての鏡はひび割れ、個人は矮小化し、支配される側に陥っている。それは、多くのモダニズム絵画において

一個の人間が断片化されたパーツの合目的的な集合体として描かれ、高度に抽象化し、個人としての具体性を失うこととなったことと同根と言えるかもしれない。実際、この新聞社内は印刷機の騒音に支配され、ブルームは周囲と意思の疎通が図れない。そして、電車という当時の最先端技術すら停電によって運行停止に陥り、都市は麻痺することになる。

第十挿話は数々の断片的な描写がつなぎ合わされ、同時刻の様々な場所を行き交うダブリン市民の姿が眺望される。

> Master Brunny Lynam ran across the road and put Father Conmee's letter to father provincial into the mouth of the bright red letterbox. Father Conmee smiled and nodded and smiled and walked along Mountjoy square east.
>
> Mr Denis J Maginni, professor of dancing &c, in silk hat, slate frockcoat with silk facings, white kerchief tie, tight lavender trousers, canary gloves and pointed patent boots, walking with grave deportment most respectfully took the curbstone as he passed lady Maxwell at the corner of Dignam's court.
>
> Was that not Mrs M'Guinness?（282）

物語の本筋とは関わらない些末的な人物たちの日常に混ざり、主人公たちもまた同時刻にそれぞれ別の場を往来する。そもそも『ユリシーズ』はその名の通り古代ギリシャの詩人ホメロス（Homer circa 750-650BC）の叙事詩『オデュッセイア』（*Odyssey*, circa 217-145BC）と対応関係を持っており、例えば、英雄オデュッセウス（Odysseus）は中年男ブルームに、英雄の息子テレマコス（Telemachus）はスティーヴンに、英雄の誠実な妻ペネロペイア（Penelope）は浮気妻モリー（Molly Bloom）に、二十年にわたる冒険は一日の日常にそれぞれ置き換えられる。しかし、ここでは英雄

たちもまた小市民と同じく卑小な一光景として矮小化され、微々たる描写が小さな断章の組み合わせとして、ただし、幾多もの視点から提示される。リアリズム小説が時間と空間の連続性を守っていた一方で、『ユリシーズ』はそのような認知形態を転覆させるような表現形式を読者にたびたび突きつけることになる。

こうした一貫性のない描写を意図的に組み合わせて新しい意味を生じさせる手法は映画のモンタージュ形式に倣ったものとも言われている。機械の組み立てを意味したこの工業用語は、1920 年代に映画の編集技術として転用された。ジョイスは当時最先端のメディアであった映画に強い関心を抱き、ダブリン初の映画館の設立にも関わっている。モンタージュ理論を確立したとされるソビエト連邦時代の映画監督セルゲイ・エイゼンシュテイン（Sergei Eisenstein 1898-1948）は脚本の言語的要素を一旦解体し、映像に置き換えることでモンタージュの手法を実現した。ジョイスはテクスト上でその逆のプロセスを辿ったとも言えるだろう。むしろエイゼンシュテインはジョイスから多大な影響を受けたことを告白している。[4] 断片的な情報の集積であるモンタージュは単一焦点に基づく伝統的な視点を解体する。現実のありのままの描写であるミメーシスは放棄され、観る者の主観性、時間と空間の統合的認知形態は物語を積極的に再構築することを迫られる。世界の在り方を我々に懇切丁寧に説明してくれる語り手はこの世に存在しない。人間は自ら情報を収集し、自分自身の世界認識を形成して生きてゆくしかない。それと同様に『ユリシーズ』というテクストもまた所与の意味を受動的に受容する場なのではなく、あくまでもそれは意味生成の場、しかも多元的視点に基づくダイナミックな意味生成の場なのである。実際、現実は一つの視点から説明できるほど単純ではなく、一つの大きな物語によって語りつくすこともできない。特に現代の複雑で多様性に富んだ現実をテクストとして再現しようとすれば、多元的な言説をモンタージュのように繋ぎ合わせることが有効な手段となるだろう。

ミメーシスの根本を成す時間と空間の二元性すら崩されることもあるモダニズム文学において提示されているのは認知の新しい形態である。芸術の目的は人間の意識と現実の新たな形での統合であり、古典的な芸術が現代人の精神を満足させることはなく、些末的な出来事にこそ関心があるとジョイスは友人のアーサー・パワーに語っている。[5] 当時は世界をつなぐ交通手段、メディア技術の急速な発展が時間と空間の概念を揺るがし、認知の在り方をも大きく変え、芸術上もその変化が様々な形で現れた。モダニズム芸術、特に未来派もまた機械の速度、膨大な力を積極的に芸術に表現した。

> We stand on the last promontory of the centuries!... Why should we look back, when what we want is to break down the mysterious doors of the Impossible? Time and Space died yesterday. We already live in the absolute, because we have created eternal, omnipresent speed. [6]

機械やエンジンの圧倒的な力に魅せられた未来派は、詩、絵画、音楽などの領域で伝統から離れることを宣言した。モダニストにとって “Time and Space died yesterday.”（「時間と空間は昨日死んだ」）のである。

こういった現代における機械の意味をフロイトに倣って考えるならば、まずそれは男性性の象徴であると解釈できることだろう。[7] 特にフロイトは爆発的な力を特徴とするエンジンを男性性の象徴と見なしていた。当時、人間は自然の摂理に基づいた伝統的な生活を剥奪され、機械の圧倒的な力、速度によって支配される側となった。世界大戦はその最大の象徴的な事件であったと言えるだろう。

『ユリシーズ』においても自然の摂理は柔和なイメージを通して女性性を象徴し、支配的な力、力強い機械技術は硬直した男性性を表している。最終挿話、夢うつつにあるモリーの女性らしい奔放なとりとめない意識は、

やはりモンタージュのような脈絡のない思考のつなぎ合わせとして、句読点なしで描写されている。

> Yes because he never did a thing like that before as ask to get his breakfast in bed with a couple of eggs since the City Arms hotel when he used to be pretending to be laid up…（871）

> frseeeeeeeefronnnng train somewhere whistling the strength those engines have in them like big giants and the water rolling all over and out of them all sides like the end of Loves old sweeeetsonnnng the poor men that have to be out all the night from their wives and families in those roasting engines stifling it was today…（894）

ここでは女性性が機械文明の侵入を許している。汽車はけたたましく走り、その中では男たちが威勢よく石炭を火室に放り込んでいる。モリーは薄れゆく意識の中で歌を口ずさむが、外から聞こえる汽車のエンジン音でそれはたびたびかき消されてしまう。女性性が男性性に支配されているのは明らかだ。この後、騒音に合わせて放たれるモリーの屁は機械に追従する肉体の自由気ままな自然性を表しているとも言えるかもしれない。彼女は交通事故による死についても思いを巡らす。機械はその圧倒的な力ゆえに人間の命を奪う危険をはらむ支配者なのである。

また、ジョイスは写真技術にも関心を抱いていた。常に猥褻写真を持ち歩いているブルームは、妻モリーをモデルにして一儲けする計画を思いつく。女性は写真という二次元の世界に閉じ込められた存在としてたびたび矮小化され、その肉体はひとつの商品として男性原理が支配する社会の欲望の対象となる。ジョイスと同じく戦間期を生きたヴァルター・ベンヤミン（Walter Benjamin 1892-1940）は、現実を単純に再現するというミメー

シスとしての役割を芸術から奪ったのは写真などの複製技術であったとしている。

> Uniqueness and permanence are as closely linked in the latter as are transitoriness and reproducibility in the former. To pry an object from its shell, to destroy its aura, is the mark of a perception whose “sense of the universal equality of things” has increased to such a degree that it extracts it even from a unique object by means of reproduction.[8]

目の前に繰り広げられる生き生きとした現実の対象物としてではなく、複製された二次元のメディアを疑似的な現実として認識させる複製技術は、人間を複製可能なモノに貶めた。モリーも複製技術により一個の人間としての人格を剥奪される。その時、やはり女性は見られる側であり、男性は見る側となる。ミシェル・フーコーの権力論にもある通り、視線は権力であることは言うまでもない。[9]

2. モダニズムとファシズムの親和性

十八世紀半ばに始まった産業革命によって産業構造はおろか社会構造全体までが大きく変革し、人間の存在性はかつてないほどに揺らぐこととなった。資本主義と物質文明が発展し、自然に基づいた家族、共同体は解体し、個人は疎外されていった。絶対的とされた伝統的価値体系は次々と転覆される一方、帝国主義を標榜する国家は肥大化し、世界大戦へと突入してゆく。こうした根本的な社会構造の変化への応答が芸術分野に発現したのがモダニズムであった。全知の語り手の下に安定的秩序を保っていたテクスト上の大きな物語は一旦解体され、語り手に見放されて孤独に陥った読者は自分自身の力で再びそこに自分なりの新しい秩序を積極的に見出すことを迫られる。そうすることによって社会の矛盾について想像的な解

決を図ることも可能になるかもしれない。

ここに至り、モダニズム芸術はファシズムというひとつの政治思想に接近している。ベンヤミンによればファシズムの行きつく先は “an aestheticizing of political life.” [10] である。ファシズムとは現代がはらむ矛盾を一挙に解決しようとする政治的欲望と定義づけることもできるだろう。それは男性原理を優先し、目的のためなら暴力ひいては戦争をも厭わない。モダニストたちは “Except in struggle, there is no more beauty.” [11] と宣言した。

モダニズムの時代は文字通り現代化の時代であり、科学技術の進歩という現代化の光は、一方で深刻な社会的･心理的矛盾という闇も生み出した。ジョン・ケアリ（John Carey 1934-）は『知識人と大衆』（*The Intellectuals and the Masses*, 1992）において、当時の知識人たちの焦りを多くの事例を用いて論じ、大衆の台頭にこそ危機の時代の要因があると考えた知識人たちの反発こそがモダニズム文学の原動力であったと規定している。[12] つまり、モダニズムとは知識階級の大衆に対する拒否反応であり、閉鎖的で高踏的な芸術運動であったということになる。ここにおいてもやはりモダニズムとファシズムの親和性が認められるだろう。

> At the same time Aufbruch can also refer to the state of expectancy included by the intuitive certainty that an entire phase of history is giving way to a new one. This meaning will prove to be crucial to our twin investigations of modernism and fascism.[13]

ナチスはモダニズムを退廃であるとして排撃したという事実も確かに存在する。しかし、ファシズムとはやはりモダニズムと同様に危機の時代への反発とその超克の運動であった。ファシズムは大衆を頽廃の元凶とみなし、特権的知識階級の下、強固な国家共同体を再生させるべくプロパガンダと暴力を用いて行動した。それは新しい世界観を提示することによって

国民の価値体系を統合させ、国家を危機的時代から救い、新しい時代へと導こうとしたのだった。

モダニズムがそうであったように、ナチスもまた当時の最新メディアであった映画をおおいに利用した。例えば、ナチスの第 6 回全国党大会の様子を記録した映画 *Triumph of the Will*（1934）では、ナチスの権威、正当性を芸術的に強調するべく、様々な撮影・編集上の技法が使われている。やはりファシズムにおいて政治は芸術に接近している。また、ドイツの作曲家リヒャルト・ワーグナー（Richard Wagner 1813-1883）の作品も同映画でおおいに利用されている。ワグナー作品がナチスのプロパガンダに利用されたことはよく知られるところではあるが、その特徴である神話の暗示はナチスの重要戦略のひとつであった。現在は過去によって正当化され、超越的時間の概念が新たに導入される。ファシズムとは国家共同体を再生させるために神話化された過去を利用し、映画や音楽等、様々な媒体を通して危機的時代との決別、新たな未来への期待を国民に対して戦略的に迫る運動であり、それは芸術を利用した政治上の価値体系の強制的変更と規定することができるかもしれない。

> All efforts to render politics aesthetic culminate in one thing: war. War, and only war, can set a goal for mass movements on the largest scale while respecting the traditional property system.[14]

芸術を利用した認知形態の刷新はファシズムの生々しい野心を覆い隠し、何ら譲歩することなく大衆の側に自ら戦争に加担させることをも可能にさせるのである。

『ユリシーズ』はその名の通り、『オデュッセイア』などの神話のイメージが作品中に充満し、表面には存在しなかった新しい意味が下部から顕在化し、プロットが重層的になっていく仕掛けを持っている。通常の認知を

超越する神話作用は登場人物たちに普遍性を与えるだろう。ジョイスは混沌とした時代を描写するに際して神話を援用することで、ともすればアイデンティティが希薄になる現代の人間に確固とした存在感を与えることを可能にした。そこにあるのはやはりナチスによるゲルマン神話の利用と類似した事態ではないだろうか。モダニズム詩人 T.S. エリオット（T.S.Eliot 1888-1965）はジョイスあるいは文学について以下のように述べている。

> In using the myth, in manipulating a continuous parallel between contemporaneity and antiquity, Mr. Joyce is pursuing a method which others must pursue after him. They will not be imitators, any more than the scientist who uses the discoveries of an Einstein in pursuing his own, independent, further investigations. It is simply a way of controlling, of ordering, of giving a shape and a　significance to the immense panorama of futility and anarchy which is contemporary history.[15]

> The existing monuments form an ideal order among themselves, which is modified by the introduction of the new（the really new）work of art among them. The existing order is complete before the new work arrives; for order to persist after the supervention of novelty, the whole existing order must be, if ever so slightly, altered; and so the relations, proportions, values of each work of art toward the whole are readjusted; and this is conformity between the old and the new.[16]

> The point of view which I am struggling to attack is perhaps related to the metaphysical theory of the substantial unity of the soul: for my meaning is, that the poet has, not a “personality” to express, but a particular medium, which is only a medium and not a personality, in which impressions and

experiences combine in peculiar and unexpected ways.[17]

エリオット的モダニズムにおいて、個性は特権的知識人によって伝統へと回収され、現在は神話に支えられることによって、社会の亀裂は想像的に解消されることになる。そこに大衆の姿はない。それはまさしく神話を利用したファシズムによる新たな国家共同体の建設と同じ謂と言えるだろう。

3.『ユリシーズ』の弁証法

『ユリシーズ』において機械は男性原理のイメージを帯びており、それが作品を支配していた。しかし実は一方で、女性原理は敵対する存在であるはずの男性原理を逆に内に取り込み、融和を図ろうとしてもいるのである。例えば写真について、実はモリーはまんざらでもなく、そこに写った自分の美しさをおおいに認めてもいる。また、夢うつつにあるモリーの意識を描写した先の引用においても、実際、彼女は汽車の中で汗を流しながら苦闘する男たちを憐れんでいた。また、先の引用後のまどろみの中、エンジン音に慣れたモリーは騒音にあわせて歌い、最後にはそれをあざけるように調子よく放屁で締めくくる。『ユリシーズ』の結末で称揚される鷹揚な肉体の自然性は一貫して男性原理の象徴として描かれてきた機械技術を相対化する効果をもっている。相反する価値体系を並存させ、新たな認知形態を提示するモリーは単純な二項対立を排除する。最後に彼女は数々の男たちと肉体を交合わせた若き日々を思い出す。男性原理は女性らしい優しさ、肉体的包容力によって相対化され、転覆させられる。

また、二人の男性主人公ブルームとスティーヴンと共にダブリンの一日を体験してきた読者は、オデュッセウスとテレマコスのような親子の絆、神話のような大団円を最後に期待するかもしれない。しかし、語り手が現代の父と子の物語を単純な形で収束させることはない。『ユリシーズ』は

男性原理が女性原理に収斂されて終焉を迎える。時間と空間の直線的連続性に基づいて展開される伝統的な物語はその安定性、秩序性という点から男性原理に属するものと言えるかもしれない。しかし、『ユリシーズ』はそれを否定し、完結性を放棄したモリーのとりとめない意識の流れ、句読点のない物語を最後に提示し、1904 年 6 月 16 日という平凡な一日は終わりを迎える。明日もまた同じような一日になるだろう。特権的知識人が導く大きな物語は繰り返すには大きすぎる。しかし、大衆の日常は永遠に日々繰り返されていくはずだ。『ユリシーズ』においては最終的にあらゆる特権性が廃棄されている。

おわりに

ジョイスは執筆計画表において最終場面を「ペネロペイア」と名付けている。[18] ホメロスの英雄譚において流浪の英雄オデュッセウスを温かく出迎えた妃ペネロペイアの大らかで柔軟な女性性をモリーに投影させることによって、彼女は超越的時間に属する神話的存在に祭り上げられると同時に、日常の現実世界を規定する男性原理という支配的価値体系までを相対化させることになる。そして『ユリシーズ』はそれ自体が基盤としている神話でさえ、あろうことか些細な日常として逆に卑俗化させ、その特権性を覆してしまうのだ。ここに見られるのは異質なモダニズムの姿ではないだろうか。それはファシズム的な新秩序の絶対化などではなく、いわば伝統と現代の弁証法である。それはむしろ過去を利用して国家共同体という新秩序構築を目論むファシズムに対する苛烈な風刺となっている。ジョイスは危機の時代を生きる芸術家としてモダニズム芸術に共感する一方で、同時にその戦争への志向性、ファシズムとの親和性に反発をも覚え、それを批判的に換骨奪胎したのではないだろうか。ジョイスの『ユリシーズ』は他のモダニズム芸術やファシズムと同じように戦略的に神話等を用いることによって重層的な構造を導入し、表面的にはいったん自らと両者との

近接性を装いながらも、同時に実はそれを嘲笑するような様々な断片的な仕掛けを読者に提供していた。そこでは未曽有の危機的時代にあって暴発しつつあった芸術と政治のパロディが示されることで、両者の危うい接近、戦争への親和性、大衆に対する特権性などを批判的に転覆させる意味生成の場、可能性もまた用意されることになる。ジョイスの『ユリシーズ』は戦争に無関心を装いながらも、肉を切らせて骨を断つがごとく自らを脱構築することによって、根源的に社会に巣食う病理をあぶり出して見せる奇妙なモダニズム文学作品であったとも言えるかもしれない。

Notes

1 Sigmund Freud. *The Standard Edition of Complete Psychological Works of Sigmund Freud*. Vol. 18 Ed. J. Stratchey and Anna Freud. London: The Hogarth Press, 1955. 7-64.

2 Freud. *The Standard Edition of the Complete Works of Sigmund Freud*. Vol. 22 Ed. J. Stratchey and Anna Freud. London: The Hogarth Press, 1955. 197-218.

3 以下、作品からの引用は James Joyce. *Ulysses*. Ed. Hans Walter Gabler. London: The Bodley Head, 1986. による。引用末尾の括弧内に頁数を記す。

4 Bordwell, David. *The Cinema of Eisenstein*. Cambridge: Harvard UP, 1993. 165-166.

5 Arthur Power. *Conversations with James Joyce*. Ed. Clive Hart. London: Millington, 1974. 74.

6 Marinetti, F. T. *Futurist Manifestos*. Ed. Umbro Apollonio. London: Thames & Hudson. Ltd, 1973. 21-22.

7 Freud. *The Standard Edition of Complete Psychological Works of Sigmund Freud*. Vol. 4 Ed. J. Stratchey and Anna Freud. London: The Hogarth Press, 1975. 33.

8 Benjamin, Walter. *Selected Writings*, Ed. Howard Eiland & Michael W. Jennings, Cambridge, MA., & London: Harvard University Press, 1991–1999. 105.

9 Michel Foucault. *Power/Knowledge*. Ed. Gordon, Colin. New York: Pantheon, 1980. 152-53.

10 Benjamin, *op.cit*., 121.

11 Marinetti, *op.cit*., 21.

12 John Carey. *The Intellectuals and the Masses*. London: Faber & Faber, 1992. 184.

13 R. Griffin. *Modernism and Fascism: The Sense of a Beginning under Mussolini and Hitler*. New York: Palgrave Macmillan, 2007. 9.

14 Benjamin, *op.cit*., 121.

15 Eliot, T, S. *Selected Essays*. London: Faber and Faber, 1980. 175.

16 *Ibid*., 15.

17 *Ibid*., 49.

18 Joyce. INTRODUCTION. xxiii.

D・H・ロレンス『恋する女たち』を ユング心理学で読み解く（Ⅲ）

――「星の均衡」におけるアニマとアニムス――

森　岡　　稔

はじめに

D・H・ロレンス（David Herbert Lawrence、1885―1930）の『恋する女たち』（*Women in Love*,1920）は、『虹』（*The Rainbow*, 1915）の続編ともされ、ブラングェン家（Brangwen）の二人の姉妹、グドルーン（Gudrun Brangwen）とアーシュラ（Ursula Brangwen）のそれぞれの恋愛を描いている。グドルーンの相手は、炭鉱王のジェラルド・クリッチ（Gerald Crich）であり、アーシュラの相手は、視学官のルパート・バーキン Rupert Birkin）である。[1] ロレンスはこの二組の関係を描くことによって、「自己」からいったんは、疎外された「自我」が再び「自己」に回帰していくカップルと疎外されたままのカップルをそれぞれ描いている。

本論考は、登場人物たちがユングの「個性化理論」の中のゴールである「自己」に向かって自己実現していくことに成功あるいは失敗していく過程を考察するものであり、論考の大部分は、二組の男女の関係に現れる「アニマ・アニムス」のあり方を中心に論じていくものである。[2]

ユング心理学でいうところの「アニマ」・「アニムス」は、男性と女性の恋愛関係を決定づける「集合的無意識」の元型である。人は「内界」において、本能的に「アニマ」・「アニムス」との肉体的・精神的合一、すなわち「対立物の結合（コニウンクチオ）」を望む。「対立物の結合」の前提条件として、バーキンは、「星の均衡」という説を持ち出す。かなり複雑な様相を示す「星の均衡」は、一見難解であるため、今までも白熱した議論が展開されてきた。だが今回のように、ユング心理学の元型「アニマ」「ア

ニムス」を使って読み解くと、かなりすっきりとした議論になる。本論は、結局「星の均衡」の関係を築くことのできなかったグドルーンとジェラルドの男女関係と、「星の均衡」を形成し「対立物の結合」及び「個性化」を成し遂げて結婚に至ったアーシュラとバーキンの男女関係を対比していく。「対立物の結合」による「個性化」とは、男女がそれぞれの「アニマ」と「アニムス」をパートナーに投影し統合し合って、お互いが「集合的無意識」の中心である「自己」に到達して人格を完成することを言う。『恋する女たち』全編の中でこの「個性化過程」が次々とめざましく展開されているが、本論では、とくにこの「個性化過程」の特徴をもつ「星の均衡」について掘り下げていく。

なお全 31 章中、第 1 章から第 3 章までを考察した同名の論文（Ⅰ）［サイコアナリティカル英文学論叢第 38 号］と第 4 章から第 8 章までを扱った同名の論文（Ⅱ）［サイコアナリティカル英文学論叢第 39 号］があり、［サイコアナリティカル英文学論叢第 40 号］に掲載予定の今回の論文（Ⅲ）は、第 9 章から第 13 章までを考察していく。

第 9 章　炭塵（Coal-Dust）

1.1. 第 9 章のあらすじ

ブラングェン家のアーシュラとグドルーンの姉妹は、ウィリー・グリーンの色彩豊かな農家に挟まれた丘を下り、鉄道の踏切まで来た。踏切が閉まっていて、石炭列車が音をたてて近づいてきた。そこへアラビア馬にまたがったジェラルド・クリッチが現れた。グドルーンにとってジェラルドの姿は非常に眩しいほど美しかった。彼は二人に会釈した。機関車が間近まで近づいてきた。ジェラルドの乗った馬はその音が嫌いである。ジェラルドは馬の顔を踏切の方に向けさせた。馬は恐怖のために体を前後左右に動かしていた。いよいよ小さな機関車が踏切に差し掛かると、馬は飛び跳ねた。きりきり舞いをする馬をジェラルドは拍車を血が出るほど馬に食い

込ませて、無理やりに踏切の方へ顔を向けさせた。アーシュラはそれをやめるよう叫び、グドルーンは、驚きはしたものの冷静にその光景を見つめていた。列車が行ってしまうと、グドルーンはジェラルドの方へ近づいていき、「お得意ってところね」と呼びかける。ジェラルドの行いは、表向きには、馬がどんなものにも我慢できるように訓練しているのだろうということになっている。アーシュラとグドルーンが、しばらく歩いて行くと、炭鉱が見えてきた。トロッコやトロッコの線路、錆びた鉄の塊のボイラー、荷車があり、真っ黒な炭塵がいたるところに降り積もり覆っている。ゲートルを身に付けた若い男がシャベルに持たれている。その風景の中で二人の女性の姿はキラキラと輝くように見えた。

1.2.「意識」と「男性性」

アーシュラとジェラルドが踏切のところで列車が通過するのを待っているところで、ジェラルドが馬に乗ってやってくる。ジェラルドもやはり、列車が通り過ぎるのを待っているわけだが、馬を線路から遠ざけることなしに、むしろ列車のぎりぎりまで馬の鼻先を向けさせる。拍車で馬の腹を叩（たた）くので、馬は腹から血を流している。もちろん馬はジェラルドの支配下に落ちる。馬をいじめているわけではなく、調教して人間の役に立つようにしているのだ。グドルーンはこのジェラルドの行為によってジェラルドの力を見せつけられた。ジェラルドは、力によって他を従わせるという支配と服従の関係を得意としている。グドルーンはこの場面で、自分とジェラルドが「力による支配と服従の関係の世界」にいる者として、同種の人間であることを確認するのである。

ユング心理学で言えば、「男性性」をジェラルドはグドルーンの前で誇示して見せたわけである。つまり、踏切でのジェラルドの行為は、馬の調教の意味も確かにあるが、グドルーンとアーシュラの前で見せた明らかなパフォーマンスである。ジェラルドの「男性性」がどのように育まれてき

たのか見てみよう。

ジェラルドの母は、夫のトマス・クリッチから自発的な精神を抑えられた夫婦生活のために、自己欺瞞を強いられ、精神的に窒息状態にあった。ジェラルドはその母親に育てられたので、決して愛情豊かな満足のいく生活の中で暮らしてきたわけではない。彼は父親にも表向きでは反発することなく、内心では父を裏切りながら、育ってきた人物である。

彼が上流階級として育ってきた環境で教え込まれたのは「帝王学」であり、その教えは、「権力への意志」がその中心に居座っている。ジェラルドに限らず、男性と女性は成長の過程で、著しく異なっており、人格の全体性を表す「自己」への道のりの中で、男性と女性が、身体上の特徴の影響を受けていることは否めない。男性が母親から分離し、男性と女性を区別しはじめる時は、ウロボロス的で母権的な近親相姦的段階から離脱しなければならない。これがエディプス・コンプレクスである。「男性性」のもつロゴス的傾向は、必然的に他との距離を置き、無意識のうちに他との同化を拒否しながら、独立性を強化するのである。自我意識はこのようにして発達していく。

「男性性」とは、自我意識によって「自己発見」をしていくものであるから、「英雄」という「元型」をおのずから生きることになる。「英雄」は「無意識」の象徴としての「竜」と戦い、「本来の自分＝自己」に近づいていく。女児の場合、最初から自然のまま全体性と完結性に包まれているので、男児のような「自己疎外」を人生で味わうことは少ない。つまり「自己発見」が女児の場合、すでになされているのだ。[3] ジェラルドの場合、「産業王」としての支配者の立場にいるので、「権力への意志」が「帝王学」として育まれ、階級的なスタンスがあらかじめ決められている。自らもそれを維持していくにつれて、だんだん「無意識の力」、すなわち「内面」の充実がおろそかになっていく。それは、心の全体性を欠くことになるので、しかたなく、力の誇示をすることによって心のバランスをとることになる。

これはハーマイオニの精神構造と同じである。どの人間にも存在するとされる 「個性化」への衝動は進展の動きを止めないので、進展をうながすため、「無意識」からのしっぺ返しが働く。グドルーンは、ロンドンのソーホーの芸術仲間と同じ精神世界をもっており、その芸術家仲間たちは、既存の社会秩序を冷笑し、反発しながら生きている。だが彼女は、上流階級に恨みと憧れを同時に抱いているため、ジェラルドと同じように権力構造を強烈に意識している点では同じ穴のムジナである。したがって、グドルーンがジェラルドのブルジョア的な考え方に反発しながらも、一方で、上流階級に憧れをもっていたので、「支配と服従の関係」からジェラルドを崇拝する下地は整っていたと言える。

第 10 章　スケッチブック（Sketch-Book）

2.1. 第 10 章のあらすじ

ある朝、ウィリー・ウォーターの湖の岸辺で、アーシュラとグドルーンはピクニックをし、芸術家のグドルーンはスケッチをしていた。グドルーンは砂利の洲まで歩いて行き、水草のスケッチに励んだ。アーシュラは蝶を眺めていた。そこへ、ボートに乗った男女が近づいてきた。ハーマイオニとジェラルドであった。グドルーンはスケッチブックをハーマイオニに見せる。ジェラルドも見ようとしてスケッチブックに手を伸ばしたが、半ば故意にハーマイオニは湖の中に落としてしまう。ハーマイオニがあやまると、グドルーンはかまわないと言う。ハーマイオニは、自分のせいなのに、責任をジェラルドに押し付ける。ジェラルドが紳士的な態度で接するので、グドルーンはジェラルドに親近感をもつ。

2.2.　ハーマイオニのペルソナ

ハーマイオニがスケッチブックをジェラルドに渡し損ねたのは、意図的である。ハーマイオニとジェラルドは上流階級であるので、彼らはグドルー

ンやアーシュラのような中流階級・下層階級に上流階級の優越を様々な局面で示す習慣がついている。これは、無意識的にというよりも、半ば意識的に習慣づけられたものだ。上級階級は、下位の階級に向かって、ユング心理学で言うところの元型「ペルソナ」を維持しなければならないのだ。[4]

真の「自己」は、ペルソナ（仮面）の下にある「無意識層」にある。ペルソナが必要なのは、人工的な保護や外面を持たなければ、社会的な地位を存続させることができないからだ。だが、外面だけを取り繕っているハーマイオニも、内面の成長がなければ、ユング心理学における「個性化」を成し遂げることができない。ハーマイオニは、それができなくて強い焦燥感をもっているわけである。ハーマイオニの「偽りのような人生」は、長い間続き、そしてまだ続いている。外面を取り繕う人生は、思考を中心とする「意識レベル」においては、理に適うものとして容認されているが、「無意識」レベルではそうではない。「意識」でいくら外面を嘘で塗り固めても、「無意識」は、それが「嘘」あるいは「本質」でないことを見抜いている。だから自分で、自分を苛（さいな）むのである。実は、この「疼（うず）き」が「個性化」の叫びなのである。人は、この「疼き」を解決していくことによって、「人格の形成」に向けて（「個性化」に向かって）人は歩んでいくのである。いろいろな現実にぶつかり、その経験を積むことによって、自己を形成し、人格の向上を段階的に成し遂げようとすることによって、人は他人に対する思いやりを育てていく。ハーマイオニが時々癇癪を起すのは、「無意識層」から沸き起こる「感情」が意識とバランスを図ろうとするからである。「感情」とは、「知識」に偏重しがちな「意識」に対する「無意識」の補償作用であり、愛する対象を「かけがえのないもの」に思う「こころ」なのである。[5]

ハーマイオニがスケッチブックをわざと湖に落とすのも、「憎む」「嫉妬」という感情のなせるわざで、「意識」が肥大したハーマイオニが、補償的に「無意識」に振り回されているのである。ジェラルドの紳士的な態度に

グドルーンは感じ入って彼に好意をもつ。はからずも恋の橋渡しをハーマイオニはすることになる。

第 11 章　島　（An island）

3.1. 第 11 章のあらすじ

アーシュラは、ウィリー・ウォーターからさまよい出て、小さな流れに沿って歩き続けた。すると、平底舟を修理しているバーキンに偶然出会った。バーキンは、工芸の先生を父に持つアーシュラに修理を手伝って欲しいと願う。バーキンは、舟に問題がなさそうなので、池に浮かべようとする。二人で協力しあって、舟をうかべ、それに乗り込んだ。池の中の島に上がると、アーシュラが、「ワトー」（Antoine Watteau 1686—1721：「みやびやかな宴」をテーマとするロココ時代のフランスの画家）の絵のようなピクニックができると心を弾ませて言うと、バーキンは、「ワトー風なピクニックはたくさんだ」と冷やかに答える。二人が舟から降りると、アーシュラはバーキンが痩せくぼんで、蒼ざめた顔をしているので、バーキンが病気だったのではないかと尋ねると、それには答えず、「病気というのは、人間がまともに生きていないために病気になる。つまり生きるのに失敗することなのだ」と言う。バーキンによると、人間は古い位置にしがみついているために、内部から腐っている。「自分を含めて、外面的な人間は嘘のかたまりで嫌いだ。そんな人間たちが死んでも世界は何も変わらない、むしろ純粋な創造がそこ（人間が死んで）から始まる」と言う。アーシュラはそんな胡散臭い世界救済家めいたバーキンの態度に反発する。「愛」について話が及ぶと、バーキンは「愛は情緒の一部で、人間関係でしかない」と言う。バーキンによると、そもそも人間を世界の中心だという考え方がまちがいのもとである。池に浮かべたひな菊の花を見て、その花に率直に感動するアーシュラと、それに惹かれながらも観念的に花を理解しなげればならないバーキンとは対照的だが、そこではお互いに相手を理解しよう

とする努力が見られる。その時、バーキンは、「仕事というのも見かけ倒しのものであり、社会通念というのも本当はどうでもよい。やめることができるものならば明日にでも仕事をやめたい」とも言う。バーキンは、水車場の近くに部屋を借りていた。「ジェラルドとハーマイオニがやってきて、部屋の飾りつけをやってくれることになっている」と言う。アーシュラは、ハーマイオニが嘘のかたまりなので、嫌いだと言う。だが、バーキンはアーシュラに、すぐ近くの彼の下宿の部屋をいっしょに見に行こうと誘う。

3.2.「星の均衡」の先行としての「ひな菊」のイメージ場面

「男女の愛」についての議論の中心をなすバーキンの「星の均衡論」の伏線として、第 11 章の「ひな菊のシーン」が用意されている。「星の均衡論」と同様、バーキンの観念的な言い方に対するアーシュラの批判がここにも登場する。

「人間の偽りの生」を憎悪するバーキンは、人間の「愛の欺瞞性」を批判する。まずは、「人間の偽りの生」に対する批判は次のようなものだ。

> It could go, and there would be no ABSOLUTE loss, if every human being perished tomorrow. The reality would be untouched. Nay, it would be better. The real tree of life would then be rid of the most ghastly, heavy crop of Dead Sea Fruit, the intolerable burden of myriad simulacra of people, an infinite weight of mortal lies.（ＷＬ p.127, CH11 “An Island”）
> たとえ明日にでも人間が一人残らず絶滅してしまったとしても、地球はあり続け、 なんら絶対的な損失はない。現実というものは、なんら変わることはない。いや、むしろよくなるくらいだ。「真の生命の樹」が「死海の果実」という最も陰惨な、重い作物から取り除かれる。つまり、無数の人間という偽物の耐え難い重荷、人間の

> 嘘という計り知れぬ重みから逃れることができるわけだ。（『恋する女たち』p. 98）

第一次大戦を引き起こすような世界を作ってしまった情けない人間は、絶滅した方がよいと、ロレンスは本気でそう思っている。おそらくロレンスはこのように登場人物の口を借りて彼の思想を作品の中で力説しているのであろう。バーキンはロレンスに成り代わって「創造ですら人間がいなくたってなされる。“Do you think that creation depends on MAN?! It merely doesn't.”（*WL* p.128 ）」とまで言う。現代文明において、「人間中心主義」が自然との生きた関係を破壊し人間の生命を荒廃させた、とロレンスは糾弾しているのだ。アーシュラは､「世界を救済しようとする」観念的なバーキンに憎しみを感じたので、言い争いを避けるため、間をおいて、池の水上に「ひな菊」を摘み取って浮かべる。

> “Why are they so lovely,” she cried. “Why do I think them so lovely?’ ‘They are nice flowers,” he said, her emotional tones putting a constraint on him. “You know that a daisy is a company of florets, a concourse, become individual. Don't the botanists put it highest in the line of development? I believe they do.” “The compositae, yes, I think so,” said Ursula, who was never very sure of anything. Things she knew perfectly well, at one moment, seemed to become doubtful the next. “Explain it so, then,” he said. “The daisy is a perfect little democracy, so it's the highest of flowers, hence its charm.” ‘No,’ she cried, ‘no--never. It isn't democratic.” “No,” he admitted. “It's the golden mob of the proletariat, surrounded by a showy white fence of the idle rich.” “How hateful--your hateful social orders!” she cried. “Quite! It's a daisy--we'll leave it alone.” “Do. Let it be a dark horse for once,” she said: “if anything can be a dark horse to you,”

she added satirically.（*WL* p. 131, CH11 “An Island”）

「どうしてあのひな菊はあんなに美しいんでしょう」と彼女は叫んだ。「なぜ私はこんなに美しいと思うのかしら？」「いい花だね」と彼は言った。彼女の感情的な声の調子は彼に圧迫感を感じさせた。「ひな菊は小花の集まりで、花びらひとつひとつが小さな花なんだ。キク科の小筒花でしょう、多くの花が集合して一つの花を形作っている。植物学者は花の進化の最高位に置いていませんか？確かそうだったと思うけれど」「菊科の花は確か、そうですわ」何事につけ、はっきり確信のもてない彼女はそう言った。ある瞬間には完全に理解したと思うことでも、次の瞬間では、すぐ疑わしく思われるのだった。「じゃ、こういうふうに説明してください」と彼は言った。「ひな菊は、小さな完全な民主主義である。だから花の中で最高の位置にある。そこからこの花が魅力的になるんだとね」「違います」と彼女は叫んだ。「それは違いますわ――決して民主主義的ではありませんわ」「そうだね」と彼は同意した。「有閑階級の華やかな白い垣根に取り囲まれた金色のプロレタリアート大衆ってところかな」「まあいやだわ―いやな社会的階層なんて持ち出して！」と彼女は叫んだ。「まったくだ、それは単なるひな菊だった。そのままにしておきましょう」「そうなさって。当座ひな菊は、ダークホースということにしておきましょう」と彼女は言った。「あなたにとって何かダークホースになるものがあるとしてのことですけど」と彼女は皮肉そうに言い添えた。（『恋する女たち』pp. 103-104）

感情的になることをバーキンは恥ずかしいことだと思う。だから、彼は「彼女の感情的な声音から圧迫感を感じた」のである。バーキンは、たえず理論的に考えようとする。ひな菊を「民主主義」や「プロレタリアート」の大衆に見立てることは、バーキンが本来は嫌っているはずの人間社会の仕

組みについての観念的な思考である。「男性性」は、分析や論理を好む。「女性性」は、分析せずに総合的、全体的にものを感じ取ることを好む。本来は、バーキンは「アニマ」を充分蓄えているはずなので、真逆の態度をとるはずなのだが、アーシュラの前では、むしろ「男性性」が前面に出てしまう。だから、「まあいやだわ—いやな社会的階層なんて持ち出して！」と彼女に言われて、すぐにその言葉を受けて「まったくだ、それは単なるひな菊だった。そのままにしておきましょう」とあっさり降参するのである。アーシュラもバーキンも似たものカップルである。このようにバーキンは「意識」と「無意識」の二面性を持っていて、バランスが比較的取れている人間である。アーシュラを前にして、たとえば「星の均衡」を説く場合、バーキンは理論的になってしまうが、これは仕方のないことである。他者には、思想は言葉で編んだ理論でしか伝えることができないのも事実である。アーシュラは直観的にそれがわかっている上で、バーキンを相手にするときは、「論理的思考」に陥りやすいバーキンをわざとたしなめるのである。バーキンもそれはわかっている。微妙な描写だ。すでに二人の間には「星の均衡」が保たれていると言っていいのではないだろうか。したがって、「当座ひな菊は、ダークホース（一種の「啓示」あるいは「特別の存在」という意味）ということにしておきましょう。あなたにとってダークホースになりなるものがあるとしてのことですけど」という帰結になることは二人の間では想定内である。「ある瞬間には完全に理解したと思うことでも、次の瞬間では、すぐ疑わしく思われるのだった」というアーシュラの態度は、彼女の「こころ」の源泉が「無意識」の中にあるので、論理的思考が彼女にとってふさわしくないことを示していると言えよう。ところが、このように論理的思考を超越しているので、論理的思考が彼女にとってふさわしくないと言っても、アーシュラの精神力が弱いわけではないことに注意したい。

「愛」についても、バーキンは次のような「愛」についての論理的思考

を展開する。

> I don’t believe in love at all---that is, any more than I believe in hate, or in grief. Love is one of the emotions like all the others—and so it is all right whilst you feel it. But I can’t see how it becomes an absolute. It is just part of human relationships, no more. And it is only part of ANY human relationship. And why one should be required ALWAYS to feel it, any more than one always feels sorrow or distant joy, I cannot conceive. Love isn’t a desideratum---it is an emotion you feel or you don’t feel, according to circumstance.（*WL* p. 129, CH11 “An Island”）
> 僕は愛というものを全然信用していない――すなわち、憎しみとか悲しみを信用していないのと同様です。愛は他の情緒と同じような情緒のひとつです――だから、愛を感じている間はそれでよい。しかし、愛がどのように絶対的なものになるのかはわからない。愛は人間関係の一部にすぎず、それ以上のものではない。しかも、どのような人間関係をとってみても、愛なんてその一部にすぎないのです。だから、愛をいつも感じていなければならぬなんていうことが、いつも悲しみとか過ぎ去った喜びを感じていなければならぬということ以上に必要かどうか、どうも僕にはわかりませんね。愛は必要不可欠なものじゃない――状況に応じて、感じたり感じなかったりする情緒にすぎないんだ。（『恋する女たち』pp. 100-101）

ロレンス文学の最もわかりにくい部分である。ところが、ユング心理学の考え方でいくと、上の文章はわかりやすくなる。つまり、「愛し合う」というのは、お互いに「アニマ」「アニムス」という元型を投影しあうわけで、愛の本質は「状況に振り回される愛」すなわち「情緒」ではなくて、元型であるから、個人の感情を超越している。ユング心理学で言えば、「愛し

合う」ことは、それはいわば「宇宙の出来事」なのであり、「聖的な」意味合いを持っているということなのだ。「男性性」と「女性性」の関係が互いの「個性化」を育み、それぞれの人間が自分の「自己」に到達することが男女の愛の究極の目標である。「愛がどのように絶対的なものになるのかはわからない。」と言ったのはそのことを指して言っている。バーキンにすら、愛の究極の目標が「個性化」にあることが、この時点では、明確ではない。

3.3. ロレンスの「人間炭素論」は「元型論」なのか

愛を考える際、個人を「元素」として考えるロレンスのやり方は、ロレンス研究者の中では「人物炭素論」として有名な、エドワード・ガーネットへ宛てた手紙が参考になる。ロレンスは、「個人の感情を超越しているもの」＝「元型」を説明するのに、「元素」をもってきたのである。長いが引用する。

> エドワード・ガーネットへ　　イタリア、スペチア湾岸にて
> 1914・6・5
> 「親愛なるガーネット様
> ・・・・・・わたしは女が――何を感ずるか―言葉の普通の用い方においてです――には、あまり関心がありません。それは感ずるための自我を仮定するからです。私は女が何であるかに関心があるだけです。その動詞の使い方どおり、非人間的に、生理的に、物質的に、女が何であるかに関心があるだけなのです。私にとっての人間の知覚作用に従って女が何を感ずるかという代わりに、一つの現象として（あるいはより大きな非人間的意志として）女が何であるかに関心があるのです。・・・・私の小説の中に人物の固定した自我をお求めになってはいけません。別の自我があるのです。別の自我の動

きに従えば、個人というものは認められず、そしてそれを発見するには、われわれはこれまで使い慣れたどんな感覚よりもいっそう深い感覚を必要としますが、やはり根本的には不変の単一元素が見せる状態が認められます。（たとえばダイアモンドと石炭とが炭素と言う純粋な同一元素であるように。普通の小説は、ダイアモンドの話を跡づけるでしょう――しかし私は言います。ダイアモンドだって！これは炭素だ、と。そして私のダイアモンドは石炭か煤かもしれません。私のテーマは炭素なのです）。私の小説は不完全ではあります。というのは自分のしようと思うことに熟練していないからです。けれども、あなたが何とおっしゃろうとも、それは本物です。そして、今でなくても、やがて私は歓迎されるでしょう。もう一度いいますが、小説の展開がある人物の線に沿うことを求めないでください。人物はある種の他の韻律的形式の形を取るのです。」[6]

『恋する女たち』が従来の小説とはちがった雰囲気をもつのは、ロレンスが、上のような新しい小説の形式をとっていたからだということがわかる。感情は一つ一つの現象であって、根本的な「元型的」特質が深奥にある。それは、男女で言うならば、「アニマ」・「アニムス」であるが、ロレンスが「別の自我」と言っているのは、明らかに元型「自己」である。ロレンスはバーキンの口を借りて、愛は「ひとつの情緒」であって、「元型」に即した恋愛がその奥にあるはずだ、と言う。愛は「自己」に到達する「個性化過程」を歩むにちがいないので、「感情的自我」に、振り回されてはならないと説くのである。

3.4.　ジェラルドの虚無

『サイコアナリティカル英文学論叢 38 号、同名の論文（１）』で挙げたエーリッヒ・ノイマンの「自我―自己軸」は、「自我」が「自己」を目標に（「無

意識」の存在を「意識」が理解しながら）「意識」を発達させ、最終的には「自我」と「自己」がそれぞれの立場を尊重しながら、「統合」するというものであった。それがすなわち「個性化」であることも示した。私たちが注意しなければならないのは、たえず「自己」を目標とすること、すなわち、しっかりと「自我―自己軸」から逸脱しないようにすることである。「自我」の源泉は「自己」にある。ハーマイオニは、「自我―自己軸」を拒否し、ジェラルドは「自我―自己軸」がわからないままである。そこで、「自己受容」の機会を失っているジェラルドは、しだいに生きている意味がわからなくなり、愛するということ（男女が協力して「個性化」すること）も知らず、内面の空虚（「無意識」の内容の豊富さを知ることなく）をかかえながら、焦燥感にかられるのである。人が「自己」を見出していくという目的意識を失って極端に走ると果ては、殺人や自殺、狂気に陥ることになる（実際にのちにジェラルドは狂気に陥り、グドルーンを殺害しようとし、自殺していくのである）。これは、「自己疎外」と呼ばれ、多くの文学や芸術の作品のモチーフとなっている。彼の「自己疎外」は、どのようにしてもたらされたのだろうか。それはユング心理学でいうところの「自我肥大」の作用である。これはハーマイオニにもあてはまる性向である。ジェラルドの「自我」が彼の「とてつもない仮面性＝常軌を逸したペルソナ」を作り上げ、「生の有機的な働き＝『無意識』の働き」を阻害する。「生の有機的な働き」を阻害することで、彼の「生」が成り立っている。そして彼の内面が空洞化し、「自我―自己軸」が外され、「自己疎外」が生まれる。ジェラルドは、炭鉱経営においても、彼の「意志」（「自我」）の行使の場と見なし、石炭という物質ですらも、自分の意志に従わせるといった「観念による目的遂行」の対象としたのであった。炭鉱に近代的な機械を導入し、従業員も「機械」とみなして、その「機能性」を追求し、とうとうジェラルドは「機械の神様」（“deus ex machina,” *WL* p. 228, “The Industrial Magnate”）になるのである。このように彼は、「自我肥大」の「仮

面の人」となり、「自己」を追求する「個性化過程」を見いだせず、「自己」の有機的な働きを抑圧する人間となりはててしまった。

ジェラルドのように「自我―自己軸」から外れることは、「個性化過程」を歩むことができないことを意味し、男女の共同作業の中で自我を育んで、互いの「個性化」を完成していく「救済ある結婚」をも成し遂げられないことを意味する。

4. 第 12 章　絨毯　(Carpeting)

4.1. 第 12 章のあらすじ

水車場の住居では、すでにハーマイオニとジェラルドが到着していた。アーシュラは住居を見に来た理由をハーマイオニに説明する。アーシュラはバーキンに部屋を見に来ないかと誘われた。ハーマイオニはバーキンが部屋に住むための準備のために来ていた。巻き尺で部屋を測ることから始める。ハーマイオニにとってバーキンといっしょに仕事をするのは、大きな喜びだった。食堂、書斎と測量し、ハーマイオニは「書斎に敷くペルシャ絨毯を献呈したい」と言い出した。バーキンは最初断ったが、ハーマイオニがどうしても、と言うのでもらうことにした。しばらく休憩ということで、アーシュラとジェラルドと共に近くの土手の上でお茶にすることにした。アーシュラが先日、馬を踏切でトロッコの列車に向かって手綱（たづな）を引いて怖がらせたことの話をする。ジェラルドは馬の調教をしていたと言う。さらにジェラルドは、「馬は自分が使用するために存在するのだ」と言う。ハーマイオニもその考え方に同意して、「下等な動物の生涯を自分たちの必要のために使う勇気を持たなければならないわ」と言う。ジェラルドは、「馬には二つの意志がある。一つは人間の力のままになりたいという意志。もう一つは自由になり野性をとりもどしたいという意志。この二つがからみあっている」という。馬が人間の力に身を委ねるという考え方にバーキンが口をはさむ。「女も馬と同じです。二つの意志が馬の中

で相対立して働く。一方の意志で、完全に相手に服従しようとするもう一方の意志で、急に駆けだし、騎手を地獄に振り落そうとする」と言う。ハーマイオニとアーシュラはいっしょに土手に沿って歩き始める。「何もかも頭で理解しなければならないと考えるのは、ひどい思い上がりよ。神様にまかすべきものが何かしらあるものよ」というアーシュラにハーマイオニは賛同する。二人の意見が一致すると、アーシュラの心の中に、急にハーマイオニに対する不信感がもたげる。ハーマイオニは本心を言ったわけではないからだ。ハーマイオニと奇妙な一致があったあとで、アーシュラはバーキンの存在を強く感じていた。バーキンに挑戦するということは、自分を「個性化」に向かう「新しい生」に至る戦いを始めることになるのだ。

4.2. 二つの意志

第 9 章において、ジェラルドが踏切で馬の顔を列車の方向に手綱を向けたが、その行動が第 12 章で蒸し返されて、議論の対象となる。ジェラルドは、相手が人間であろうと、動物であろうと、支配と服従の関係の中の「支配」の力を行使する人間である。グドルーンは、踏切の馬のシーンでジェラルドを非難しながらも、彼の強い力に魅了された。ジェラルドは、「いやがる馬を踏切のところで無理やり列車に近づけたのは、機関車の音に我慢できるよう馬を仕込んでいたのだ」と言う。また彼によると、「馬にも人間同様の意志があるので、人間の意志が主人にならなければ馬が人間の主人になってしまう」。つまり、「支配と服従の関係」がここで持ち出されてくるわけである。バーキンの分析では、「馬の意志には、二つの意志があって、まず一つ目の意志は、『完全に人間の力のままになりたいとのぞむ意志』である。もう一つの意志は、『自由になり野性をとりもどしたいと望む意志』である」という。バーキンは、女性も馬と同様、同様の意志をもつと次のように言う。

> And woman is the same as horses: two wills act in opposition inside her. With one will, she wants to subject herself utterly. With the other she wants to bolt, and pitch her rider to perdition.（*WL* p. 141, CH12 “Carpeting”）
> そして女も馬と同じです。二つの意志が女の中で相対立して働く。一方の意志で、完全に相手に服従しようとする。もう一方の意志で、急に駆け出し、騎手を地獄に振り落そうとする。（『恋する女たち』p. 114）

ジェラルドはバーキンの「二つの意志」説の話がもう少し聞きたかったが、ハーマイオニは聞きたがらなかった。ハーマイオニが相手を自分の意志の力で服従させようとする張本人だからである。ハーマイオニはそんな心情を隠そうとして、わざとらしく、美しい日暮れの風景を褒めたたえる。アーシュラも個人を超えた自然に対する深い感動に没入する。ハーマイオニは「事物はあるがままに美しさや全体性、自然のままの神聖さはそっとしておいて、眺めたい。これ以上知識を得るなんてごめんよ」などと嘘丸見えのことを言うが、アーシュラはそれに賛同する。そしてアーシュラは「いっさいのものを頭で理解しなければならないと考えるのはひどい思い上がりよ。神様にまかすべきものがなにかしらあるのよ」と言う。ハーマイオニの言葉は嘘だが、アーシュラは本当の気持ちからそう言っている。ハーマイオニとアーシュラは、バーキンのように物事を細かく裁断して分析して調べることに反発する態度をとることで意気投合した。だが、ハーマイオニの言葉はどうも嘘くさいとアーシュラは漠然と思っている。実は、バーキンはハーマイオニの中に、「権力への意志」が彼女にあることをそれとなく皮肉った。それと同時に、アーシュラにそういう人に近づかないように警告しているのである。議論を活発にさせる上で、露悪趣味的に、ジェラルドの考えを代弁しているにすぎない。すなわち、ユング心理学で言う

ところの「影」をジェラルドに投影しているわけだが、投影した内容をあえて口にしているだけの話だ。バーキンはすでに「意識」と「無意識」のバランスのとれた思考をもっているために、即座に「投影の引き戻し」をすることができるのである（したがって、表面的にはいつものバーキンらしくない考え方を披露した）。この屈折した小説の運び方は、トリッキーであり、注意しないと、読み誤る可能性がある。（バーキンのいつもの主張と矛盾しているからだ）とにかく、アーシュラは、そんな意図があるとも知らずにバーキンの分析に反発しようとするが、本能的にバーキンの真意に気づくところがさすがである。アーシュラは次のように悟る。

> Only now and again, violent little shudders would come over her, out of her subconsciousness, and she knew it was the fact that she had stated her challenge to Birkin, and he had, consciously or unconsciously, accepted. It was a fight to the death between them--or to new life: though in what the conflict lay, no one could say.（*WL* p. 143, CH12 “Carpeting”）
> ただ、ときおり、烈しい、小刻みな身震いが、無意識からやってきて、彼女の全身を襲った。彼女にはわかっていた。彼女がバーキンに挑戦したのは事実で、彼が意識的にせよ、無意識的にせよ、その挑戦を受けたということなのだ。それは二人の間の命がけの戦い――あるいは「新しい生」にいたる戦いなのだ。もっとも戦いがどういうところにあるのか、だれにもわからない。（『恋する女たち』p. 117）

つまり、バーキンはわざと「二つの意志」の話を持ち出して、アーシュラに「二つの意志」を反面教師とすることによって、アーシュラ自身がそれとは対極的な豊穣な無意識を内包していることに気づかせようとしているのである。アーシュラが言うように「個性化」の道は命がけの茨の道である。茨の道ではあるが、「新しい生」＝「個性化」という展望があるため

に前途は明るい。

5. 第 13 章　ミノー（Mino）

5.1. 第 13 章のあらすじ

数日後バーキンは、アーシュラに、グドルーンと一緒に町の自分の下宿に来ないかという誘いの手紙を出す。アーシュラは一人で行くことにした。下宿では、バーキンは思いつめたように「二人が関係を結ぼうとするなら、何か究極的なものが供（そな）わらなければならない」という自分の考えを述べ始める。バーキンは、さらに「僕のさしだすのは愛であるとは言えない。僕の欲しいのは、愛ではなく、はるかに非人間的な、さびしく、めったにないものです。愛は究極的には無力になるからです。愛は派生的なものだ。根本は愛を超越するものだ」と続ける。そして、バーキンは、アーシュラの「自我（エゴ）」ではなくて、「本来の自分」＝「自己（セルフ）」を見つめていたい、と次のように言う。「僕は自分自身の存在もわからないようなところで、君を見つけ出したいんだ。それは君の常識的な自我が完全に否定するような君だ」。バーキンは「星の均衡」とも言うべき関係をアーシュラに対して説く。「僕がのぞんでいるのは、君との『ある不可思議な結合』なのだ。平衡ということ、二つの個体が純粋につり合いを保つということがある。星がお互いに釣り合いを保っているように」。ソファーの上で眠っていた若い灰色の猫、「ミノー」が窓から飛び出して、庭にいる野良猫の牝猫を追いかけ始めた。ミノーが牝猫に一撃をくらわすと、牝猫はおとなしくなった。バーキンは二匹の猫が仲良しだという。アーシュラには、それが「弱い者いじめ」にしか見えない。バーキンは「それは弱い者いじめではなく宿命で、二匹は安定的な関係を望んでいる」という。それを聞いたアーシュラは、「星の均衡も実は男性の優越を前提にしている」と言う。「馬を相手にするジュラルド・クリッチとそっくりだわ。まさに権力意志よ。あなたは衛星が欲しいのよ」。バーキンは、それに対

し「僕は衛星が欲しいなんて言ってない。私が言いたいのは、二つの個別の平等な星がむすびあって釣り合いがとれているということです」とアーシュラに反論する。バーキンは、「愛なんというものは、自分のエゴイズムの助けになるような愛、自分に役立つ愛をもとめているにすぎない」と言う。そう言うアーシュラに対してバーキンは反発しながらも、アーシュラの吸引力に勝てない。「君を愛している。ほかのことはもうたくさんだ」と一時的にバーキンは降参する。

5.2.「星の均衡論」

第 13 章（「ミノー」）で、いよいよバーキンによる男女の愛についての「星の均衡論」が登場する。小説は、対照的なジェラルドとバーキンの生き方を描く。ジェラルドの生き方は、物質主義的な繁栄を追求するものであり、活動的ではあるが、心にしっかりとした安定感がない。そのため絶えず空虚な心をいだきながら、働いて、働いて、走りつづけなければならない。つまり、彼は、自分を「知る」ことのために、自分との闘いを永久に続けなければならないのだ。それは、母から無理やり押し付けられた偽物の自我―ペルソナ（仮面）をかぶり続けなければならないからである。ジェラルドの母親は、その高貴でエリート意識の強い考え方を息子のジェラルドに押し付けてきた。ジェラルドは、自我意識の強い母の考えに従って成長してきたので、ユング心理学の「個性化」のゴール、「自己」を全く意識しておらず、「自分の理想とする自我」を目標とする「自我同一性」を人生の真実だと思い込んでいる。そこで、ジェラルドはたくましくも物質的に満ち足りたエリートの道を突き進む。だが全く、「無意識」=「自己」に到達する「個性化」の道を歩んでいない。したがって、「個性化」への重要な方策ともいうべき「救済ある結婚」のための女性というパートナーを見つけることがジェラルドにはできない。これはグドルーンのせいというよりも、まず、ジェラルド自身が「個性化過程」を歩む決心をしなけれ

ばならない問題である。

「救済ある結婚」をめざして、アーシュラとバーキンは進んでいくのだが、彼らでさえも、なかなか順調には進んでいかない。アーシュラは第 12 章（「絨毯」）で一歩前進したようではあるが、「救済ある結婚」までは、まだまだ道半ばである。

図 1

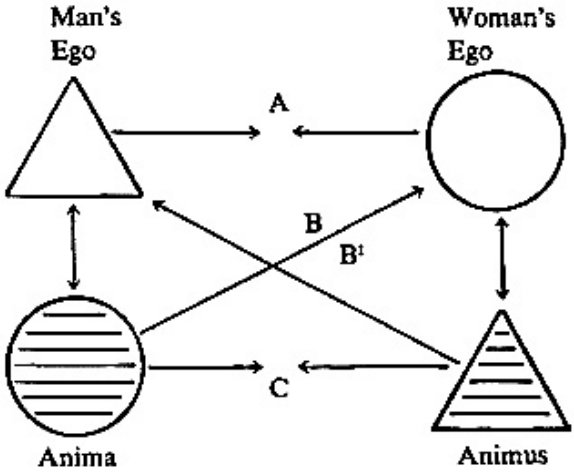


図 1 は、『サイコアナリティカル英文学論叢第 38 号（p. 59）』、『同第 39 号（p. 82）』でも掲載した図である。[7] グドルーンとジェラルドは上図の「自我」と「自我」の A の関係である。B 線と B^1 線によって男女がたがいに肯定的な「アニマ」・「アニムス」を投影し合うが、「投影の引き戻し」、すなわち、自らの「アニマ」・「アニムス」の存在を見つけ、現実の相手との比較を通して、互いの「アニマ―アニムス」の C 線に移行していくことが、「愛の深化」である。C 線は、独立した個人を前提とする。これが、「星の均衡」である。互いに独立した存在でないと、「投影の引き戻し」のチャ

ンスを失ってしまう。「個」が確立していないと、「無意識」の理解が進まない。

互いに独立した存在というのは、「自我―自己軸」をきちんと据えている人間のことを言う。言い換えれば「自己意識」の確立、ともいうべきものである。男女二人の関係の場合、これが、C 線へ移行する前提条件となる。その場合、「アニマ」・「アニムス」の存在に気づくこと（投影の引き戻し）」が大切であることは言うまでもない。元型「アニマ」・「アニムス」、および元型「自己」を意識することによって、「愛」といった「人間的」で「世俗的」なものではなく、宇宙的な、神的な、聖的な関係において「元型」の性質を感じ取ることができるのである。バーキンは次のように言う。

> If we are going to make a relationship, even of friendship, there must be something final and infallible about it.…I can't say it is love I have to offer--and it isn't love I want. It is something much more impersonal and harder--and rarer…. At the very last, one is alone, beyond the influence of love. There is a real impersonal me, that is beyond love, beyond any emotional relationship. So it is with you. But we want to delude ourselves that love is the root. It isn't. It is only the branches. The root is beyond love, a naked kind of isolation, an isolated me, that does NOT meet and mingle, and never can.（*WL* p. 145, CH13 "Mino"）
> もし、私たちが友人の関係にしろ、ある関係を結ぼうとするなら、それには、究極的なもの、絶対確実なものがなければならない。･･･僕が差し出すのは、愛であるとは言えない――僕の欲しいのは、愛ではない。それははるかに非人間的な、きびしい――そしてめったにないものなのです。・・・究極において、人間は孤独であって、愛の力も及ばぬものです。真に非人間的なわたしが存在する。それは愛を超越し、いかなる感情的関係も超越したものだ。きみにでも

> 同じことだ。けれど、わたしたちは愛が根源であると言っておのれを欺こうとする。そうじゃないんだ。愛は派生的なものだ。根源は愛を超越している。赤裸々な孤立、孤立した自我だ。それは、相まみえることも混ざり合うこともない、けっしてそうできないものだ。（『恋する女たち』pp. 119―120、第 13 章「ミノー」）

この「はるかに非人間的な」「愛を超越し、いかなる感情的関係も超越したもの」「根源は愛を超越している」という部分は、「元型」という意味合いをもって来なければ、理解に苦しむものである。上の文章は、男女の関係が、個人的でロマンチックなものではなく、宇宙的なもの、普遍的なもの、すなわち、「シンボル」の世界、「イメージ」の世界、「イマジネーション」の世界、「集合的無意識」の世界へ一足飛びに我々をいざなうものだ。

バーキンは、次のように「星の均衡論」を展開する。

> I want to find you, where you don't know your own existence, the you that your common self denies utterly…. What I want is a strange **conjunction** with you…. an equilibrium, a pure balance of two single beings--as the stars balance each other.（*WL* pp. 147―148, CH13, "Mino"）
> 僕は君が自分自身の存在もわからないようなところで、君を見つけだしたいんだ。それは君の常識的な自我が完全に否定するような君だ。･･･僕が望んでいるのは、君とのある不可思議な結合なのだ。･･･平衡ということ、二つの個体が純粋につり合いを保つことがある。――星がお互いに釣り合いを保っているように。（『恋する女たち』pp. 122―123 第 13 章「ミノー」）

いわゆる「星の均衡論」である。「結合」というのは「対立物の結合」である。「男性性」と「女性性」の統合である「対立物の結合」（コニウンク

チオ）のイメージは、人格内部の対立物、意識と無意識の統合を象徴するイメージとなっている。対立物の結合は、さきに述べたように、投影・被投影の男女の「間」ではなく、「個人の人格の中」で成就するものである。バーキンが男女間について述べる「星の均衡」は、その「個人の人格の中」で起こることを示している。つまり、「自我―自己軸」を充分意識したそれぞれの「自己意識」が、「星の均衡」さらには、「対立物の結合」の基本条件であることを押さえておきたい。

男女の「結合」という観点で考えると、バーキンによると、「星の均衡」という「神秘的な結合」は「自己」という根源的なものを両者で維持していくことに他ならない。バーキンは、次のように言う。

> "I do think," he said, "that the world is only held together by the mystic conjunction, the ultimate unison between people--a bond. And the immediate bond is between man and woman…. it is the law of creation. One is committed. One must commit oneself to a conjunction with the other--for ever. But it is not selfless--it is a maintaining of **the self** in mystic balance and integrity--like a star balanced with another star."（*WL* p. 152, CH13 "Mino"）
>
> 「ぼくは考えるんだが、この世界は神秘的な結合、人々の間の究極的な調和――ひとつの絆があることによってはじめて結束しているのではないだろうか。そして、もっと直接的な絆は男と女のあいだにあるものだ。・・・それは創造の法則ですよ。人は身を委ねさせられているのです。人は他者との結合に身を委ねなければならない――永遠に。けれども、それは自分をなくすということではないのです――それは神秘的な均衡と全一性において「自己」を維持することなのです――星が他の星と均衡を保っているように。」と彼は言った。（『恋する女たち』pp. 128―129　第 13 章「ミノー」）

「救済ある結婚」＝「個性化過程」はまさに元型論的な、いわば宇宙論的な男女の関係であり、「元型」という人間のイメージを基盤として、個と個がまるで「星の均衡」を保ちながら移動するように、究極の結合をめざすと同時に、自らの「自己」を維持するという「個性化過程」なのである。これが、ユングが提唱した「人生の目的」としての「個性化過程」の本質である。この「生の目的意識＝個性化過程」を見失うと「人生の意味」を喪失することになると言ってよい。

「星の均衡」を説くバーキンは観念的に思われるが、理論的に「個性化過程」を述べようとすると、仕方がないかもしれない。一方、「星の均衡」を説かれているアーシュラは、実を言うと、すでに「自己実現」はなされていて、バーキンは、アーシュラの前では、まるで子供である。釈迦の手のひらの「筋斗雲」に乗った孫悟空であるといえるだろう。[8]「無意識」と「意識」のバランスをとっているはずの、バーキンも、「アニマ」＝「無意識」の化身とも言うべきアーシュラの方が、一枚も二枚も上手であり、バーキンはもともと個性化が出来ているといってもよいアーシュラが発するアニマの吸引力に勝てない。したがって第 13 章の終わりでは、「君を愛している。ほかのことはもうたくさんだ」とアーシュラに対して、一時的に降参するしかないというバーキンがいる。単に女性の肉体的な魅力にバーキンは負けたのではなく、意識と無意識をすでに統合しているアーシュラに対して降参をしていることに他ならない。

おわりに

人は「アニマ」・「アニムス」と対面し、目の前の異性を通し、自身の内面と向かい合う。目の前の異性に不満をもったり、惹かれたりするのは、それが自身の中にあるからである。「アニマ」・「アニムス」を意識できないまま振り回されるのではなくて、そこにある個人的な意味を読み取り、

「影」の処理のときのように、「引き戻し」をして、自分自身に馴染ませ、最終的にそれを生きる。目の前の人と一緒に生きながら、自分自身も生きる。「個性化」という自己実現を他者とともに意識的に努めるのである。「アニマ」・「アニムス」をもつ男女の場合、「救済ある結婚」の意義をよく認識して、男女ともに、「個性化」に努めなければならない。ユングは、「より自分らしいあり方」、すなわち「自己」に到達する「個性化」をとても重要視した。

「アニマ」・「アニムス」は、内面心理に生起する理想の異性像であり、プラトン哲学でいうイデア界に存在する理想的な「異性のイデア」である。不完全な自分を意識し、それぞれの性において欠如している異性のイメージ（女性性・男性性）を憧憬して恋慕する先天的・遺伝的要素を人間は持っている。性的・精神的な成熟を迎える思春期頃から、人はひたすら自らの「アニマ」・「アニムス」のイメージに近似する異性を追い求めるようになる。「アニマ」・「アニムス」は、男性と女性の恋愛関係や結婚関係、性愛の元型であり、私たち個々人の「異性に対する感情生活や性行動」を根底において規定する「集合的無意識」である。私たちは精神的な内界において、本能的に「アニマ」・「アニムス」との肉体的・精神的合一を望み、不完全な自己に欠けている性的要素を異性と一体化することによって相補的に満たそうとする。

そういった「アニマ」・「アニムス」を基盤とし、「結婚」を「制度としての結婚」や「幸福を求める結婚」ではなく、「魂（無意識）の部分での結婚」＝「救済としての結婚」を追求すべきであると、ユングもロレンスも言いたいのだ。相手に投影したイメージと現実とをはっきりと区別し、無意識内の内容を少しずつ丁寧に統合していく（「引き戻し」をしている）と、自然に「自己」にたどりつく。それが、「救済ある結婚」＝「個性化」の真の愛の形であった。バーキンは、アーシュラに「星の均衡」を説いて、「救済ある結婚」をほのめかすが、アーシュラは実はすでに「個性化」してお

り、バーキンは、アーシュラに「アニマ」＝「無意識」を投影して、アーシュラのアニマを吸収しているにすぎない。だが、理論的に言葉でこの思想をまとめなければならず、ロレンスは、バーキンの口を借りて、「無意識」の役割を作品の中で述べていくのである。

男女の高い次元の「無意識の中で行われる霊的なやり取り」はイメージの世界で語るしかなく、シンボリズムで語るロレンスの文体は詩的であるとともに、観念的で難解である。「個性化」に向かって二項対立から統合へ向かう「コニウンクチオ」の実践である男女の愛の形は、それぞれの「アニマ」と「アニムス」を投影し、統合し合って、お互いが「自己」に到達することによって「人格」を完成する「個性化」の形に他ならない。アーシュラとバーキン、グドルーンとジェラルドの男女関係を考察して、「アニマ」・「アニムス」を通した「個性化過程」を本論と同様、次の論文でさらに追究する。

Notes

1 視学官とは、教育行政として学事の視察と事務をつかさどる官吏で学事の連絡や指導・助言を行う職である。

2 二組の男女とは、アーシュラとバーキン、グドルーンとジェラルドである。

3 エーリッヒ・ノイマン『女性の深層』松代洋一・鎌田輝男訳（東京：紀伊國屋書店、1980. 年）、p.18 を参考にした。以下、この本からの引用、参考は（『女性の深層』頁数）とする。

4 ペルソナの語源は、古代ギリシャで役者がかぶった「仮面」のことである。社会的な「態度」や「役割」を「仮面」になぞらえ、それをユングは元型「ペルソナ」と呼ぶ。「ペルソナ」を形成することで周囲との階層や調和を維持する。社会的に受け入れられやすい「ペルソナ」と権力維持のための強制的「ペルソナ」もあるが、人間の成長とともに洗練されていく。受け入れられない「ペルソナ」は無意識（個人的無意識）の中に追いやられ、抑圧されてゆく。それが、「影」を形成する一因となる。

5 「こころ」と「ひらがな」にしたのは、意識と無意識をふくめた「こころ」の全体性を示すためである。

6 オルダス・ハックスレー『Ｄ．Ｈ．ロレンスの手紙』伊藤整・永松定訳（東京：彌生書房、1980 年）、pp. 141-142）から引用し、原文にあたって、自分の訳をつけた。この箇所は有名であり、よく引用されるが、ユングの「元型論」に照らして説明したのは、これが初めてであろう。

7 John A. Sanford *The Invisible Partners* (New York: Paulist Press, 1980), p.17. 訳書は、ジョン・A・サンフォード『見えざる異性：アニマ・アニムスの不思議な力』長田光展訳（東京：創元社 , 1995）、p.27. 以後、（『見えざる異性』、頁数）と記す。

8 孫悟空は「筋斗雲」で得意げにお釈迦様の巨大な手のひらから遥か遠くまで飛び立って、宇宙の果てにある柱に証拠の印を書いて戻ってくる。しかし、その柱は実はお釈迦様の手の指で、孫悟空は一歩もお釈迦様の手のひらから出ていなかった。

魂の闇との対峙

―― 正に満ちた世界を希求するメルヴィル ――

横　田　和　憲

はじめに

人間の意識下構造について学問的な規定を与えたのはフロイト（Sigmund Freud [1856-1939]）である。だが既に古代の民族は、魂の古層である無意識界を覗いて、それを地獄という形で現している。地の獄（ひとや）とは、罪悪感に苛まれる魂であり、苦悩の在り処としての魂である。人類史の黎明期のメソポタミアに存在した謎の民族シュメール（Sumer）[1] が地獄思想を最初に形象化したという説もある。ダンテ（Dante Alighieri [1265-1321]）の『神曲』（*Divine Comedy*, 1302-21）や ミルトン（John Milton [1608-74]）の『失楽園』（*Paradise Lost*, 1667）、『復楽園』（*Paradise Regained*, 1671）などの作品に思想的には先立つ。地の底の牢獄たる地獄は死への怖れと深く結び付いた人間の魂の奥底だと考えられる。ユング（Carl Gustav Jung [1875-1961]）的な語彙が思い起こされる。ギリシア語のネキイーア（Nekyia）は「･･･地獄へと堕ち沈潜することであり、心理学的には普遍的（集団的）な無意識との邂逅（かいこう）である（. . . a descent to the underworld; psychologically, an encounter with the collective unconscious.）」。[2]

死への怖れは、内なる歪さ、無限に深い魂の闇、つまり人間の歪さと重なる。メルヴィル（Herman Melville [1819-91]）は魂の奥底に潜む多様な拭い難い歪さを強く意識していたが、同時に、正に満ちた世界への架け橋となる霊智（Mystic Wisdom）をも確信していた。多様な歪さは、魂に潜む歪さを携えた個人を構成員とする社会や世界にも存在し、そのような歪さは消し去り難い。現世は、基本的に、災禍や悲惨や苦悩などが途切れる

ことなく連続する負のスパイラルに覆い尽くされている。メルヴィルは、現世は歪さという負が連鎖する世界だと強く認識しているが、その歪さに拱手傍観（きょうしゅぼうかん）を決め込む虚無的なニヒリストではない。逆に、なぜ人間は歪なのかという疑念を抱きつつ、この歪さを突き抜ける道を探ろうとする。歪さへの盲信を強いるカルヴィン主義とは決別し、歪さを直視すると同時に、霊智を重んじ二元的な世界観を唱導するグノーシス主義（Gnosticism）へと傾斜していく。そして、カルヴィン主義的な自然の楽園とは異なる、グノーシス主義の唱える正に満ちた世界への回帰の可能性を希求する。

本稿では先ず、メルヴィルの幾つかの作品を取り上げ、そこに表象される魂の闇に対峙するメルヴィルの姿を追う。次に、モービィ・ディックの永遠不滅さを象徴する純「白」の皮膚と巨大で歪な体躯をもって、この漆「黒」の歪さを具現化していることを検討する。最後に、メルヴィルが追い求める、霊智と繋がる正に満ちた世界について考察してみたい。

1.　負が連鎖する現世

現世は災禍や悲惨や苦悩など負のスパイラルに覆い尽くされている。人は誰もが歪さという闇、内なる悪ともいえる様々な歪さを、それぞれ意識・無意識のうちに拭い難く隠蔽している。歪さは社会や世界にも多様な拭い難い闇として実在する。歴史的に回顧すれば、混沌とした激動の時代ゆえに現出する、例えば戦争など拭い難い歪さも存在する。攻撃は報復を呼ぶから歪さという負の連鎖は留まることを知らない。さらに認識の問題が輪を掛けて事を複雑にする。物の本質や実在の最後の根拠は、認識や経験の外を超越していて、人間には知ることが出来ないという不可知論がある。認識は一つではないという、意味の不明瞭性とか歯痒さ、もやもや感を伴う曖昧性、両義性が頑として存在する。複雑かつ曖昧な性に対する意識も想起される。事実（Fact）と真実（Truth）の問題もある。歪められ歪曲され、捏造（ねつぞう）された事実もあるが、この事実は真実ではない。正と負の見極め

には表と裏の問題が絡む。面従腹背という言葉があり、善意に潜む悪意とか、善意が返って逆になる迷惑もある。微笑みの背後に潜む阿修羅の如き強い殺意、社会的な名士が内包する隠蔽という闇など、真実は表相の背後に意義深く潜む。世間は、秩序の維持のため、自己規制に基づく常識という仮面を強要する。自己規制を外し本心や本性を吐露できる場は、発狂、アルツハイマー、異常との直面、病的な傲慢さ、あるいは自裁に限定され、ここでのみ自己を誠実に暴露できるのかも知れない。しかしその「誠実さ」は人々に「逸脱」、「歪み」としてしか理解されず、場合によっては「施設」への「隔離」の対象とされてしまう。

犯罪、邪淫、愛欲、名利欲、貪欲、嫉妬、怒り、虚欺、捏造、冤罪、思い込み、怨念。錦の御旗の裏に潜む屈辱感。群れて徒党を組む輩。悪質なデマ。体の良い殺戮。体の良い窃盗。歪な自己正当化や劣等感など。魂の奥底に潜む歪さに果ては無い。必ずしも魂の歪さが源ではないが肉体的な病魔やパンデミック（世界的に流行する病弊）もある。大地震、台風、潤沢な豊穣の源である大自然が孕む飢餓や自然災害が追い打ちを掛ける。

これらの歪さをメルヴィルは、現代を先取りする形で、様々な登場人物を通して抉り出す。幾つかの作品に描かれる、魂の歪さに対峙するメルヴィルの姿を、簡潔に追ってみたい。次項でも触れるようにエイハブ（Ahab）が海の藻屑と成り果てた後、次作の『ピエール』（*Pierre; or, The Ambiguities*, 1852）では、魂の闇の奥底に塒を巻きながら確かに存在する歪さを壮絶に追う。意識下の、あるいは識閾の、自制不能なマグマ（Magma）やリビドー（Libido）がピエールを襲う。異母弟ピエールに「誠実さ」を強要する異母姉イザベル（Isabel）自身の「誠実さ」は眉唾物だし、イザベルを救おうとするピエールの「正義」も果たして「正義」と言えるかどうか怪しい。メルヴィルは、正気と狂気の間を彷徨う、人間存在の悲惨さを具現したジミー・ローズ（Jimmy Rose）を描き出す（1855）。さらに、負の連鎖する現世に対し一切の否定を具現する、沈黙の人物バートルビー

（Bartleby）を創出する（1853）。それでも「魔の群島」（“The Encantadas, or Enchanted Isles,” 1854）の SKETCH SECOND: TWO SIDES TO A TORTOISE では一抹の希望を認めてもいる。「・・・陸亀でさえ、仰向けになった時には黒く陰鬱であるのだが、それでも明るい面もある。時には腹部や胸元が仄かな黄金色に染まることがある（. . . yet even the tortoise, dark and melancholy as it is upon the back, still possesses a bright side; its calipee or breast-plate being sometimes of a faint yellowish golden tinge.）」。[3] 負のスパイラルに覆い尽くされた現世を象徴するかのような陰鬱な群島を蠢（うごめ）く陸亀の胸元に、希望の仄かな糸屑が絡まりついているのである。「ベニト・セレノ」（“Benito Cereno,” 1855）における黒人の反乱首謀者バボ（Babo）。「サンドミニク」（*San Dominick*）号の小船室（the cuddy）で繰り広げられる髭剃りの場面（NN Vol. 9, pp. 84-86）での、演者バボの順順さの背後に潜む鋭い殺意は、裏と表の不気味な二面性を象徴している。

『信用詐欺師』（*The Confidence-Man: His Masquerade*, 1857）の第 6 章で義足の男（the man with the wooden leg）が語る言葉「一体あの悪魔はイヴを唆（そそのか）して、なんぼ、巻きあげたんじゃい？（. . . How much money did the devil make by gulling Eve?）」（NN Vol. 10, p. 32）は、アダムとイヴの犯した原罪が、Devil (=Satan) に乗ぜられたものであることを示している。生得の堕落が詐欺の原型であり、詐欺は、人間であるがゆえの歪な愚かさに起因している。しかしその醜く歪んだ詐欺師（的な人間）の顔は、仮面の背後に隠されているために、見極め難くなっている。こうして愚かな人間はまんまと騙され、詐欺師はますます図に乗る、という構図が出来上がる。この真実の捉え難さについて、一連の入れ子（Chinese box）の連鎖という形象でこの作品の複雑さを捉えながら、ジェームズ・ケイツ（James P. Kaetz）はこう述べる。「他の多くの作品と同様に、メルヴィルの意図するところは、メルヴィルの描き出す複雑な虚構の世界を、確定された歴史上の、つまり実際の世界の複雑さに反映させることなのだ。どちらの世界に

おいても、真実を見極めることは、至難の業である（As in so many of his other works, Melville's aim is to make the complexity of his fictive world reflect the complexity of the historically determinate world. Truth is rarely easy to find in either.）」。[4] メルヴィルは仮面という表相を突き破り、その背後に潜む実相を、また生そのものの目的や意義や価値を惑わす曖昧さのベールを剥ぎ続ける。歪な魂を死の直前まで追い続けたメルヴィルが描き出した負の人物は、死後出版（1924）された『船乗りビリー・バッド』（*Billy Budd, Sailor*, 1891）における、最古参の先任衛兵伍長（Master-at-arms）クラガート（John Claggart）である。自然の楽園を彷彿とさせる純粋無垢なビリーへの、自己破滅的で屈折した愛の中のみにしか見出せない、偏執狂である。

手短かにではあるが幾つかの作品に描かれる魂の歪さなどについて考察してみた。歪さという負のスパイラルが覆い尽くす現世において真実は、二重、三重の入れ子の奥のまた奥に潜んでいる。仮面に包まれたこの真実を、見抜こうとする者、見抜かれまいとする者。両者の葛藤や緊張、動揺、躊躇、憤慨、高揚、怨嗟（えんさ）を描くメルヴィルの気迫に、読者は圧倒される。

２．闇の根源としてのモービィ・ディック

沈黙を貫く白鯨モービィ・ディックの象徴に関しては幾つかの見解がある[5]が、魂に潜む多様な歪さの根源だと、考えてみたい。白鯨の体躯は歪んで醜い。なぜなら、その醜さは人間の魂の歪さを象徴しているからだ。モービィ・ディックが白い鯨であることについては、白という色が魂に特異な恐怖感を与えるからだ、と考えたい。白という色について語り手イシュメール（Ishmael）が『白鯨』第 42 章（「鯨の白さ」“The Whiteness of the Whale”）で様々な考察を施す。「人は、時と次第によって、白に崇高優美なものを象徴させることがあるにしても、白がその最も深遠で観念的な意味を担う時には、必ずや人の魂に特異な恐怖感を呼び起こすことを誰も否定することは出来ない（. . . in his other moods, symbolize whatever grand

or gracious thing he will by whiteness, no man can deny that in its profoundest idealized significance it calls up a peculiar apparition to the soul.）」（NN Vol. ６, p. 192）という記述には目を見張りたい。

メルヴィルは、社会や世界の歪さの源となる、個々の魂に潜む多様な歪さが強力かつ永遠不滅であることを認識し絶望していた。この魂の闇の根源として、皮肉にも神格化された白鯨を殺害すべく、エイハブを宿命的な航海に旅立たせる。傲慢という歪さを体現し、ホモ・デウス（Homo Deus 人間神化）を目指すエイハブを最終的には海の藻屑として破滅させる。

メルヴィルは魂の奥底を凝視するホーソーン（Nathaniel Hawthorne [1804-64]）を高く評価した書評『ホーソーンと彼の苔』(“Hawthorne and His Mosses,” 1850) の中でこう述べている。「・・・闇が有するこの偉大な力が、生得の堕落とか原罪というカルヴィン主義的な意識に対する関心から、その力を得ているということは間違いない。深く思索する人間ならば、如何なる形であれ、その配剤から完全に身を躱（かわ）すことなど出来はしないのだ［訳は橋本安央『痕跡と祈り――メルヴィルの小説世界』（松柏社、2017）p. 269 を参考にした］（Certain it is . . . this great power of blackness . . . derives its force from its appeals to that Calvinistic sense of Innate Depravity and Original Sin, from whose visitations, in some shape or other, no deeply thinking mind is always and wholly free.）」（NN Vol. 9, p. 243）。メルヴィルは「魂の歪さを認識できる能力」を、逆説的にではあるが、「闇の偉大な力（The Power of Blackness）」と呼ぶ。

闇の力をメルヴィルの美意識に絡めながらクリストファー・フリーバーグ（Christopher Freeburg）は、ハリー・レヴィン（Harry Levin）の『闇の力』（*The Power of Blackness*）を、こう援用している。

> ・・・ハリー・レヴィンは魂の闇がメルヴィルの美意識に与えた強い影響を詳細かつ綿密に論じている。そして魂の闇がメルヴィルの

心理的、霊的、政治的な叡智を反映していると主張する。レヴィンの目には、魂の闇に関するメルヴィルの考えが、好ましからざる真実に対応しているように見える。その真実とは、読者が目を反らすだろうとメルヴィルが推測する、死とか破綻した民主主義とか精神的な怖れである。

. . . Harry Levin labored intensely over the impact of blackness on Melville's aesthetics, claiming that it reflects Melville's deepest psychological, spiritual, and political wisdom. In Levin's eyes, Melville's idea of blackness corresponds to unwelcome truths about death, the failures of democracy, and psychic terror that Melville imagined his audience shied away from. [6]

洞察力あるメルヴィル自身が自負するように、深く思索する人間は「闇の力」によって他者の、そして自らの歪な魂を認識し、かくして魂は歪な存在となる。認識したからといって歪さを矯正できるわけではないが、先ずは、この歪な魂を認識することが要諦である。だが、メルヴィルは、負のスパイラルに凌駕された世界の歪さに悲観し傍観するだけの単なるニヒリストではない。逆に、想像を絶する聡明さと強力なパワーを持った神が、なぜ人間に魂の闇を付与し、この世に多様な歪さを顕現させたのか、という根源的な疑念を投げかける。人間の魂には歪さだけしか潜在しないのか。世界は負の連鎖、一色に、覆い尽くされ続けるだけなのか。歪で狂気の強力な、なにか、別の大きな怪物が存在するのか。何倍にも強力で奥の根深い悪意に覆われた世界に、束の間でこそあれ、光輝の善意は存在するのか。正に満ちた世界は何処に在るのか。

現世には多種多様な神が存在するが、プロテスタントの一派オランダ改革派教会（Dutch Reformed Church）で洗礼を受けたメルヴィルの場合には、

カルヴィン主義的な神と見なして間違いないだろう。『ホーソーンと彼の苔』で述べる闇の力、つまり魂の闇を認識できる偉大な力も、生得の堕落とか原罪というカルヴィン的な意識から、その着想を得ているのだ。メルヴィルの本質の構成要素としてグノーシス主義、巨人主義、虚無主義を挙げながら、寺田建比古は、この点について「メルヴィルにとって、カルヴィニズムの育ちは、それなくしては彼の生がありえなかった生存の根幹であり、しかも、それとの決別なしには人間的な生がなりたちえない故郷である」[7] と指摘している。

寺田は「故郷」からの離脱についてこう続ける。人間は幼少期を経て成長の途に着くことになるのだが、この幼少期における「故郷」とは、成長への基盤である。成長は不可逆的な移動であり「故郷からの離脱は、人間が人間であることの厳しく不可避的な運命であり、かくて、生は、絶え間なく故郷をふり返りながら、絶え間なくそれに告げる訣別の連鎖において成立する」(*loc.cit.*)。こうしてメルヴィルは、カルヴィン主義という故郷と、不可逆的に決別することになる。

この世界を創造したのは、カルヴィン主義などキリスト教の正統派の唱導では、旧約聖書の神ヤファエイ (Yahweh) でありエホバ (Jehovah) である。なぜ神は歪さを内包した人間を創造したのか。なぜ現世は、無限に深い歪な魂を源とする負の連鎖の蔓延に、甘んじなければならないのか。カルヴィン主義的な神からの決別をメルヴィルに強いたのはこの根本的な疑念である。この点に関して坂下昇はメルヴィルをエイハブに重ねながら「もっと直接［的］には、『沈黙し、遍在し、不可視の』――空洞化――カルヴィンの神に対する反逆を試みる」[8] と述べている。カルヴィン主義的な神から決別し、正に満ちた世界を追い求めるメルヴィルの不可逆的な心情が察せられる。

さらに坂下は人類が経てきた幾多の宗教的な緊張について「合理による神の概念の空洞化を神話とシンボルによって直感的に補完しようとすれば

するほど、人智学では分裂の深度を増す」（*op. cit.*［第七巻］p. 398）と説明している。人智学は逐語的には「人間の叡智」を意味するが、この引用は、歴史上の宗教的な緊張を育んで来た根本的なパラドックスを的確に記している。「故郷」を離脱したメルヴィルは、負が連鎖する現世におけるアリアドネーの糸としての、正に満ちた世界を求めて放浪を重ねることになる。

３．原初の正なる世界

メルヴィルは、カルヴィン主義的な神から決別し、正に満ちた世界を求めて放浪を重ねる。放浪の最中、決別の連鎖を強いながらも常に郷愁を誘うのは、その根幹にカルヴィン主義的な自然の楽園が深く影を落としているからだ。寺田は楽園への郷愁について、楽園は人間がどう足掻いても後戻り出来ない夢にすぎないが、同時に「絶え間なくノスタルジアを以て誘(いざな)いつづける、現存する過去、故郷でもある」（*op. cit.* 51）と述べている。この放浪と郷愁との板ばさみ、宙づり状態は、アメリカ的な一つの特質でもある。[9]

宙づり状態からメルヴィルは脱カルヴィン主義を果たし、正に満ちた世界を希求するが、その内的な要因は魂の闇であり世界の多様な歪さである。この内的な要因に外的なそれが拍車を掛ける。アメリカが独立を果たした 18 世紀末には、国力の増大も相まって、人間の可能性を謳い上げるアメリカ独特のロマン主義が生まれた。古代オリエントを担う時代的な思想やスウェーデンボルグ（Emanuel Swedenborg [1688-1772]）の神秘思想を始め、東洋の仏教思想などが、エマスン（Ralph Waldo Emerson [1803-82]）、ソロー（Henry David Thoreau [1817-62]）、メルヴィルなどアメリカン・ルネッサンス期の多くの知識人に多大な影響を与えた。幾つかの思想、宗教的な流れを経て、神を中心とせず人間を中心とした生き方や考え方が現出することになる。まず、厳格なピューリタン神学を否定し、原罪説や予定説を否定

する単一主義（Uniterianism）。信仰における理性を重視し、旧約的でピューリタン的な神から人間を解放する神学であるが、平面的で奥行きに欠ける。神を人間のレヴェルに下降させるのではなく、逆方向に、人間が神の次元にまで飛翔する努力をすべきであった。次に、神秘性や深遠さを保持しつつ、人間の解放を押し進めた超越主義（Transcendentalism）。魂の絶対性や人間の絶対的な尊厳を主張し、人間の魂に内在する神性を自覚し、飛翔を目指すことを唱導する。

とりわけメルヴィルを魅了した思想はグノーシス主義であった。魂の闇や多様な歪さを抱えた社会について絶望していたメルヴィルは、こう、苦悶していたからである。魂の歪さという負が永遠不滅で払拭できないのであれば、この窮境から、どう脱出すればよいのか。正に満ちた世界は何処に在るのか。グノーシス主義は、現世は災禍や悲惨や苦悩など負のスパイラルに覆い尽くされており、否定的な秩序が現世には存在すると考える。そして、現世は歪な世界あるいは狂気の世界であるが、原初には完全かつ理想的な天上の世界があったのだと考える。グノーシス主義は、善悪・正負・聖邪の二神を意匠し、霊智によって回帰できる原初の正なる天上の世界を唱導する。

ここで『世界神秘学事典』[10] などの説明を踏まえてグノーシス主義について概説を施しておきたい。まず、グノーシス（Gnosis）とはギリシア語で知識を意味する語であるが、考えることによって得られる通常の知識ではない。直観･閃きによって、啓示と呼ばれる体験で、個人が直接、得る、より優れた知識のことである。真実を見抜く直感的な霊智であり霊的な認識である。1 世紀に生まれ、3 世紀から 4 世紀にかけて勢力を持ったグノーシス主義は、古代バビロニアの天文学と古代ペルシャのゾロアスター教（Zoroastrianism）が古代エジプト・ギリシアの神秘学派の思想と混じり合い、新プラトン主義の流出的な宇宙論が加わってグノーシス主義は全盛期を迎える。グノーシス主義は宗教思想でもある。キリスト教は絶対的な善

なる一神、無からの創造を唱えるが、グノーシス主義は善悪・正負・聖邪の二神と流出的な宇宙の創造を唱導する。

現世の元々の状態である原初の正なる天上の世界をプレーローマ（Pleroma：充満した状態）と呼ぶ。この世界を司る絶対的な始原としての至高の存在のことでもある。プレーローマは完全であるため限定を付与することになる固有の名前は無い。至高の存在の資質アイオーン（Aion：永遠に続くもの）の一つであるソフィア（Sophia：知恵）は、その持てる力を発揮しようとして、ヤルダバオート（Yaldabaoth）あるいはデミウルゴス（Demiuruge）と呼ばれる歪で狂気の神を創出した。ヤルダバオートは、自らの出自を忘却しており、自らのほかに神はないという認識を有している。グノーシス主義は、この狂悪なヤルダバオートの作り出した世界こそが、現世であると捉える。だから現世は災禍や悲惨や苦悩など負のスパイラルに覆い尽くされているのだ。ソフィアは自分の指定されていた位置を去り、原初の正なる天上の世界から下降し、プレーローマは元々の完全さを失うことになる。ソフィアの下降は現世に多様で拭い難い歪さが存在する理由となる一方で、ソフィアが天上の世界からの光を負の現世に持ち込んだため、現世は原初の正なる天上の世界と僅かではあるが一筋の繋がりを保っている。ソフィアの下降に続いて、至高の存在の資質アイオーンが段階的に流出して、現世が形成されることになる。本来の人間は至高の存在の一部であり、魂の奥底の霊智を認識できれば、ホモ・デウスへの起爆剤にも成り得る。人間は誰でも霊的な次元との繋がりを先天的に保持しているのである。現世は至高の存在が段階的に流出して出来たのだから、この段階を逆に辿れば、理論的には人間は霊智によって至高の存在が司る正なる原初の世界に回帰できると考えられる。

メルヴィルの脱カルヴィン主義とグノーシス主義への傾斜を幾つか簡潔に見ておきたい。『白鯨』では第 1 章（「まぼろし」“Loomings”）から、自由意志と宿命というグノーシス的な二元性が、ナルキッソス（Narcissus）

神話を踏まえた「捉え難い生の幻（the ungraspable phantom of life）」（NN Vol. 6, p.5）として語られている。このファントムとは何を意味するのだろうか。「死」だという説もある[11]が、魂の奥底に潜む拭い難い歪さという闇であり、原初の正なる天上の世界へと誘う霊智でもあると考えたい。セント･エルモの火（The corpusants）を中心にしながら、『白鯨』の第 119 章（「ロウソク」“The Candles”）は、冒頭からグノーシス的な二元性を展開している。『信用詐欺師』第 9 章の “Arimanius”（NN Vol. 10, p.50）については「ゾロアスター教の悪の神と解する・・・よりも、テキストのままグノーシスの始祖、Arius または十七世紀、三位一体を否定する Armian と解するのが、カルヴィニズムの歴史に則していよう」（*op. cit.* 坂下［十一巻］p. 248）という注が付されている。さらに『船乗りビリー･バッド』第 6 章の “Captain the Honorable Edward Fairfax Vere” に関して、開祖 クリスチャン・ローゼンクロイツ（Christian Rosenkreuz [1378-1484]）を戴くグノーシス派の薔薇十字教団に触れながら、艦長の名と「真の到達者 “vere-adeq’eus”」（*op. cit.* 坂下［第十巻］p. 110）との関連が示唆されている。

メルヴィルは白鯨モービィ・ディックを永遠不滅の存在に神格化させた。歪な魂が強力かつ永遠不滅であることを絶望的に認識していたからである。だが魂の奥底にメルヴィルは原初の正なる天上の世界への架け橋となる霊智（Mystic Wisdom）をも認識している。霊智による、カルヴィン主義的な自然の楽園とは異なる、グノーシス主義の唱える原初の正なる理想の世界への回帰をメルヴィルは模索する。ホーソーンに宛てた 1851 年 11 月（おそらく 17 日）付けの書簡で、「悪い本を書きました、でも、子羊のような清々しい気持ちでいます（I have written a wicked book, and feel spotless as the lamb.）」と記している。「悪い本」とは、自己の最も本質的なディオニュソス（Dionysus）・負・歪・エイハブ的な内面についての、メルヴィルのアポロ（Apollo）・正・霊智・イシュメール的な自己表白なのであろう。さらに同書簡でメルヴィルは、『白鯨』に対するホーソー

ンの貴重な好意に心からの謝意を吐露しながら、「だから白鯨モービィ・ディックのことは、もう２人だけの祝福とし、これからの話題については主題を変えることにしましょう。リヴァイアサンは最大の魚ではないのです。私はクラーケン[12]のことを耳にしたことがあります（So, now, let us add Moby Dick to our blessing, and step from that. Leviathan is not the biggest fish; ― I have heard of Krakens.）」。[13] ここには、とめどなく沸き上がる創作への衝動に身を任せてしまいたい誘惑に駆られつつも、着実に一歩、また一歩、駒を進めていこうとするメルヴィルの強靭な意思が表明されている。

おわりに

メルヴィルは『白鯨』以降の、詩作も含めた諸作品を通して、魂の闇と対峙すると同時に、霊智による、至高の存在が司る原初の正なる天上の世界プレーローマへの回帰を希求し続ける。魂の奥底は神秘である。神を求めてホモ・デウスを促した近代、18 世紀から 19 世紀末にかけて社会を席捲した自然科学は、自然を相手に真実を究めるという闘いを繰り広げた。結果的に科学は万能の地位を確立したが、皮肉にも逆に、科学によっては知り得ない神秘の領域が存在することが認識されるようになった。その神秘の領域の覇者がモービィ・ディックである。

地の底の牢獄たる地獄は、死への怖れと深く結び付いた、魂の奥底である。死への怖れは多様で無限に深い罪悪感、苦悩、歪さと永遠に重なり合う。歪で狂気の神ヤルダバオート（デミウルゴス）ゆえの、多様で拭い難い歪さを携えた個を構成員とした社会や世界にも、歪さは蔓延する。だが魂の奥底にはプレーローマへの架け橋となる霊智も認識される。ユングは、霊的な人間性と肉体との関係について、「・・・無意識領域の諸力（例えば感情とか直観）を自己コントロールし、それらの支配から脱すること・・・これこそ完全なる本来的自己の誕生である」（世界神秘学事典 85）と述べている。魂の闇つまり人間の歪さであれ、霊智であれ、まずは個人の自覚

が要諦である。

もし、闇の根源モービィ・ディックがエイハブに首尾よく仕留められたとしたら、どのような世界が現出することになるのか。あるいは、グノーシス的な原初の正なる天上の世界プレーローマとは、どのような世界なのか。善・正・聖から成る白光の世界なのだろうか。さらに、また、グノーシス主義がどのようにメルヴィルの作品空間に現出されているのか。これらの点についてはメルヴィル後期の長編詩 *Clarel* (1876) を中心にして稿を改めたい。

Notes

1 シュメール民族は、紀元前 3800~3500 年ごろに、メソポタミアに興った最古の都市文明を育んだ。高橋睦郎『地獄を読む』(駸々堂出版、1977)pp. 13-14 を参照。梅原猛『地獄の思想』（中公新書 134、1967）p. 50 にも言及がある。

2 Edward F. Edinger, *Melville's Moby-Dick: An American Nekyia* (Toronto: Inner City Books, 1995), p. 142.

3 James P. Kaetz, "Layers of Fiction: Melville's 'The Metaphysics of Indian-Hating'," *Melville Society EXTRACTS*, 79 (November 1989): 12.

4 Herman Melville, "The Encantadas, or Enchanted Isles" in *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839—1860*, eds. Harrison Hayford, et al. (Evanston: Northwestern UP; Chicago: The Newberry Library, 1987; Print. Vol. 9 of *The Writings of Herman Melville*), p. 130.　なお、本稿におけるメルヴィルの諸作品からの引用は全て Northwestern Newberry 版からとし、（NN Vol. #, p. #）の形で示す。

5 精神分析学的な解釈としては、当然、白鯨は超自我（Superego）ということになる。だが、作品のみならず作者の本質を見誤らないために、『白鯨』は元より、どの作品についても、恣意的な解釈は避けるよう留意したい。

6 Christopher Freeburg, *Melville and the Idea of Blackness: Race and Imperialism in Nineteenth-Century America* (New York: Cambridge UP, 2012), p. 2.

7 寺田建比古『神の沈黙』（筑摩書房、1968）p. 39.

8 坂下昇『メルヴィル全集　第八巻』（国書刊行会、1982）p. 322.

9　特に建国前のアメリカ東部植民地の民にとっては、過去は禁忌（taboo）であり、それぞれの故国との決別なしには現在は無となる。とは言っても、そう簡単に過去、故国を捨て去る事など出来はしない。この放浪と郷愁との狭間での宙づりを余儀なくされている人間存在の先駆として、オースティン（William Austin (1778-1841)）が描く、さまよう男ピーター・ラグ（Peter Rugg）なる人物を思い起こす。本稿の第 2 項でも触れたレヴィンは「ピーター・ラグが非常にアメリカ的だと思える理由は、家郷を後にしたラグが常に故郷に思いを馳せているためであり、また放浪と郷愁との狭間で宙づりになっているためである（. . . Peter Rugg seems so uniquely American . . . because the missing man, having left his home behind, keeps looking homeward: because he exists in a state of suspense between wanderlust and nostalgia.）」[Harry Levin, *The Power of Blackness: Hawthorne, Poe, Melville* (New York: Alfred A. Knopf, 1958; 1970), p. 4.] と述べている。ラグは、単にアメリカだけに留まらず、何らかの夢（理想）を追い求める放浪と郷愁との板ばさみになっている人間存在の普遍性をも具現している。

10　荒俣宏編『世界神秘学事典』（平川出版社、1981）。

11　柴田元幸「アメリカのナルシス」（THE RISING GENERATION, February 1, 1988. Vol. CXXXIII. ― No.11, p. 4）には「『捉え得ぬ生の幻』が、実は死にほかならないこと､それが「白鯨」全体を貫く逆説なのである」と記されている。

12　クラーケン（Kraken）は、巨大なイカからの想像と推定される、ノルウェーの沖合いで大きな渦巻を起こすといわれる伝説上の海の怪物である。Web.2nd は “[Nor. Dial. *Krake* (the final *n* is the article.) A fabulous Scandinavian sea monster.” と、OED 2nd は “A mythical sea-monster of enormous size, said to have been seen at times off the coast of Norway.” と記している。また *Correspondence*（NN Vol. 14, p. 211）にはメルヴィルがクラーケンに言及した経緯についての説明がある。

13　Jay Leyda, *The Melville Log* (New York: Gordian P), vol. 1, p. 435.

【研究ノート】

学問の Borderless 化と「人間の心」

倉　橋　淑　子

AI の急速な発展により、社会は大きく変貌しつつある。キャッシュレス、ペーパーレスなどは生活には勿論、研究活動にも大きな影響を与えている。世の中は、あげてスピード化し、利便性が大きな価値として尊重される時代である。その中で、一番の核となる「人間の心」はどう位置づけられるのだろうか。日常生活が無意識のうちに、単なる作業として流されていくとしたら、研究も、目標も明確に設定しないうちに、「研究のための研究」が行われていくのではないか。それはやがて将来の「文明の危機」にも繋がることである。

本「研究ノート」では、大学で実施されて来た、教育課程の中に位置づけられている、諸科目、例えば別部門に属する「文学」と「経済」という科目の解体と融合という大きな変更が現法規即ち「学校教育法」および「大学設置基準」に抵触しないのか、という危惧がある。その危惧を解消するために、上記の２法規について条文に当たることを最初の作業としている。

次に上記「整合性」を確認した上で、部門の異なる２つの科目について、ここでは「文学」と「経済」という科目の融合を想定して新しい可能性を探る。例えば精神分析学者の C. G. ユングが別部門の「宗教」、特に東洋的瞑想に、S. フロイトが W. シェイクスピアに傾倒していたように、研究者にとって未知のテーマに取り組むことは、大きな不安であり、期待であり又、喜びである。

先ず、最近の、大学における学科目名の変更並びに新設等に関し、その由来と大学教育が拠って立つ「学校教育法」について述べる。本法は終戦後間もないこともあり、「米国使節団」の勧告に基づいて文部省（当時）

がその草案を閣議に提出、昭和 22 年（1947）4 月に施行された。第五章「大学」では学術の中心としての「大学の使命等」が規定されている。又その五十二条には「大学の目的」が続き、第五十三条には「大学には学部を置くことを常例とする。」と明記してあるが、ここでは画一化した学科目は示されず、平たく言えば教科科目名は各大学に任されているようである。更に、「大学設置基準」（昭和 31（1956）年 10 月文部省令）第二章教育研究上の基本組織、第四条には、「学部には、専攻により学科を設ける。２前項の学科は、それぞれの専攻分野を教育研究するに必要な組織を備えたものとする。」とあり、これも極めて弾力的である。当時の教育雑誌、『法学セミナー』（季刊『教育法』別冊、有倉遼吉他　日本評論社、1972）、p. 164. によれば、「1971 年度の 4 年制大学 389 校に設けられている学部総数は昼間部 877、夜間部 135，総数 1012 に及びその中には、教養学部、文理学部、学芸学部、社会福祉学部、衛生学部、海洋学部など、旧制大学にはみられなかった新しい専門分野における学部がみられる。」とあるが、これは、昭和の時代と余り変わらないようである。現在の、学部教科科目名の変更の潮流は世界からの又、日本の社会からの要請を受けての改革であろう。しかし一方、世界の諸国が政治的に populism に走り一国至上主義に走る傾向も否めない。先端技術の進歩も、人々に期待とともに「心の落ち着く場のない不安」を与えている。このような状況の中で、研究者は専門知のみならず学術全般に深く研究の根を張り、人々が「心の平安」を得られるよう、「役に立つ研究」を心がけたいものである。

ここで学科目融合の一例として、「文学」と「経済学」の融合を取り上げる。

宇沢弘文（1928 － 2014、経済学者、元東大教授、1997 年文化勲章受章）は、『人間の経済学』の中で次のように述べている。

「リベラルアーツというのは、教育の仕上げの段階で重要な役割を果たすものです。つまり、学問や芸術、知識であれ文学であれ、専門を問わず、先祖が残した貴重な遺産をひたすら学び吸収し、同時にそれらを次の世代

へ受け渡すという営為をする場所だということです。」（宇沢弘文『人間の経済』新潮社、2017, pp. 85-86.）後の、彼の「社会的共通資本としての教育」という考え方の原点である。今日、彼の提唱する「行動心理学」の原点でもある。その主張するところは、「人間の経済活動は、利益をあげられるかどうか、その行為によって自分が得をするかどうかという利益優先の考え方にのみ拘わるのではなく、むしろ「心の動き」が最終的にはその物の値を決める、ということである。」極端な例ではあるが、資本主義原理の最も冷酷な例として「サブプライム問題」をあげることができる。これは「ローンを貸しても延滞する可能性が高い（＝信用リスクの高い）顧客層への住宅ローンを指す。（以下『サブプライム問題の正しい考え方』から引用）「これらのローンが証券化され世界中の投資家にばらまかれた後に当初予想していなかったような延滞が発生し、証券化商品の価格が暴落し始めた。この結果何が起こったか。欧米の金融機関の巨額損失、イギリス・アメリカにおける景気後退の懸念、世界の株式市場の株の暴落、とりわけ初めから返却が難しいと考えられていた層（信用リスクが高い）への住宅ローンの貸付は惨憺たる結果を招いた。」彼らは、返金が出来ないためにローンで購入した家を失い、その上ローンは残った。貧しい者は更なる貧困に陥った。同書は、巻末で「「温かい心」は経済学の中で、あるいは実際の経済の中で失われつつあるのではないか。われわれは札束や給与明細書や人事考課表の顔ではなく、「人間の顔をした資本主義」を必要としているのである。」（倉橋透・小林正宏『サブプライム問題の正しい考え方』中央公論社、2008 年、pp.4-5）「冷静な頭脳」だけでなく、「温かい心」を求める経済学者たちが、「行動心理学」への道筋を作ったのであろう。又、その「心」こそが文学の精神分析学的アプローチの核となるものである。

以上は「研究テーマの融合」の一例にすぎない。文学を主体的に考えれば、「宗教」との、或いは「哲学」、他に「法学」「歴史学」等他の研究テーマとの融合についても可能であろう。

学問研究は、どの分野の統合であれ、方法論は異なっても究極的には「人間の心」の研究に帰結し、研究者は様々な学問分野の英知を結集することで立派な成果をあげることが出来るだろう。

SYNOPSIS

“Past, Future and the Old Man in “Delta Autumn”

Makiko Udo

Soon after writing an original draft, William Faulkner revised “Delta Autumn” to make it a sequel to “The Bear.” Both stories focus on Isaac（Ike）McCaslin, the former on his juniority while the latter on his senility. Mindful of this fact as well as psychoanalytical theories Freudian, Lacanian, and Žižekian, I examine “Delta Autumn” to demonstrate how indelible the past in Ike’s mind still is to the consequently depressed man and how unsuccessful he is in grasping an actual image of what he dreamed about the South, an image symbolized by an interracial baby begotten by his own relative.

SYNOPSIS

Sherwood Anderson's Literature and his View of Womankind

Toshiyuki Kozono

Sherwood Anderson (1876-1941) was born into a poor family. The poverty of the Andersons was caused not only by his father's character but also the trend of the change from the age of handiwork to that of the machine industry.

By psychoanalyzing Sherwood Anderson I explicate what is the real cause for why he could not help writing about the themes common throughout all of his works. Moreover, psychoanalyzing the cause of his neurasthenia will show why he relinquished his office, deserted two sons, one daughter and his wife、who was attractive, well educated, socially refined, and ultimately why he chose a career in writing.

Looking over Sherwood Anderson's life history in the light of Freudian theory, I notice that a typical instance of the Oedipus complex is found.

Generally, eager to be loved by his mother, the son is at the pains of being on intimate terms with his father, thinking that he must grow into a man like him. As for Sherwood, he preferred his mother over his father. The latter was addicted to drinking, thinking little of his family, and only being guided by self-interest. Therefore, Sherwood despised his father and assumed a defiant attitude toward him. Sherwood must have monopolized his mother's love, perhaps feeling only this love necessary in his upbringing and succoring his mother. He lived with much dependence on his and her ego-image (Ich-Bild), and wished to unite both in a single body. Therefore, he identified himself with her, and imitated

her manner and her actions, absorbing her point of view, sympathizing with her feelings, and so on. Because she worked very hard at various jobs to maintain the family, Sherwood also, like his fictional counterpart in *Tar: A Midwest Childhood*, hustled at every job he could find, eager to work his way up. Accordingly, he became known as 'Jobby' Anderson, a bright, alert boy who was willing to work hard at anything which he could make money from. That is caused by Anderson's libidinal fixation to the phase of the Oedipus complex. Therefore, he was very saddened by the death of his mother as if it were the very death of his sweetheart or wife, or an essential part of himself.

When one whose libido has become fixed to the phase of the Oedipus complex grows up, one never fails to achieve an erotic wish-fulfillment through perverse sexual activity or the medium of a member of the opposite sex like one's parent of the opposite sex. As for Anderson, he desired a woman who closely resembled his mother. I consider why Anderson was married four times in his life. Anderson exemplifies the Freudian theory that one whose libido has become fixed to the phase of the Oedipus complex cannot be satisfied with the object of one's love whomever one falls in love with because there is always the lurking idea of the perfect woman (one's mother) or the perfect man (one's father) in one's mind.

SYNOPSIS

Absurdities of an Oedipal Story: Hawthorne's "Roger Malvin's Burial"

Eitetsu Sasaki

In the early nineteenth century Americans lost their previous faith upon which their society had stood but instead dedicated themselves to establishing a society based on "democracy" though not in the genuine sense. How did they come to terms with this society or, looking at this from a psychological perspective, how did they get along with adult society represented by the father figure? For this question, it is appropriate to investigate some of the works by Hawthorne, the self-professed timid and unsocial writer who established his goal in "open[ing] an intercourse with the world."

In this paper, I deal with "Roger Malvin's Burial" (1832). This work focuses on belated mourning work for the father in law. In order to unravel complicated relationships between the (stunted) mental growth of the individual and the sociohistorical development of America, I refer to both psychological theories and the Bible. I take into consideration that at the time when Hawthorne was writing this story, American society saw Evangelicalism replacing Puritanism, Christians returning to Bible centricity, and the imperialistic westward movement being both justified and glorified. In "Roger Malvin's Burial," the author exposes a failed paternity to portray the result of the belated and tragic funeral held by the son for his father in law. Hawthorne, it turns out, did not necessarily impeach Puritan patriarchic society specifically for its rigidity. Nor did he necessarily accuse contemporary society of its imperialism and its disregard of the presence

of minorities. Rather, the author stressed the importance to accept and get through an apparently absurd oedipally distorted world.

SYNOPSIS

Two Victims in the Theatrical Wedding: A Freudian Analysis of Mark Twain's "Wapping Alice"

Takashi Suzuki

Angered by a man's seduction of one of the girl servants in his house, Mark Twain quickly held a wedding ceremony, a shotgun wedding, in a theatrical manner to grant her seeming wish to marry the man. Thirty years later, Twain turned the event into the shocking short story, "Wapping Alice," where Twain changed the girl into a man in the story. This paper attempts to interpret this work psychoanalytically, in which a hitherto unexplored view becomes visible.

Twain discovered a few years after the wedding that the girl in fact had lied to him about being seduced. We can easily imagine that his self-respect was severely wounded. In this fictitious short story, based on real events which took place in his house, it might be explained that Twain, rather than the girl servant, seized the initiative. As a result, instead of being deceived by her lies, Twain held a theatrical wedding of his own creation, and was thus able to regain his self-esteem. Furthermore, if his performing the wedding was an act of obedience to the Freudian "id," then we can say that Twain also put the other victim, the seductive man, into a corner unnecessarily on a false and careless charge by the author. By turning "the story of a man seducing a woman" into "a farce of a marriage between two men," it can be said that Twain's ego, feeling guilty about the false charge, followed his superego's order and succeeded in eliminating his own guilt.

SYNOPSIS

A Psychoanalytical Consideration on *Summer and Smoke*

Eriko Taira

Summer and Smoke (1948) is an early work by Tennessee Williams (1911-1983). This play consists of twelve scenes.

Alma Winemiller, a teacher of vocal music, is in her middle twenties. Her father is a minister while her mother suffers from a mental disease.

This drama contains a prologue to explain Alma's girlhood. Her childhood friend, John Buchanan, the son of a doctor lost his mother at the age of five. Alma has loved him since she was ten years old. However her strictly pious father did not allow her to intimately associate with John. Her love for him is so strong that she even goes so far as to peep into John's room, hiding behind the curtained window of her house.

Initially, John does not want to be a doctor like his father and leads a life of debauchery. When he plans to escape to South America with a Mexican girl named Rosa, Alma tries to stop it, and subsequently Dr. Buchanan is fatally shot by Rosa's father.

John takes over his father's research and succeeds at becoming a doctor. John then engages with Nellie, one of Alma's vocal music students. In reaction, Alma, through her desperation, becomes promiscuous with a strange traveling salesman.

In this paper, I focus on and consider Alma's and John's behavior by adopting the psychoanalytical theories of Freud. Thus, from this point of view, it could be said that Alma's super-ego has a strong influence over her. I also examine John whose libido is set in the Oedipus complex phase.

SYNOPSIS

Dalila's Polarity in *Samson Agonistes*: Focusing on the Image of the Great Mother

Toshihisa Nomura

This paper demonstrates how John Milton adapted the Biblical Delilah as his Dalila in *Samson Agonistes* (1671) by using what Carl Gustav Jung calls the archetype of the Great Mother. Milton portrays Dalila with both positive and negative qualities. Jung explains that the Great Mother simultaneously nurtures and devours, and Dalila exemplifies these very qualities. Milton arguably recognizes them in the figure of Delilah, and then reconstructs this Biblical woman into the figure of Dalila, the protector / provider as well as the seducer of Samson.

SYNOPSIS

Modernism and the Crisis in the Interwar Period
—— Rethinking James Joyce's *Ulysses* ——

Hiroki Matsuyama

In this paper, I aim to clarify the essential yet paradoxical relationship between Modernism and Fascism, using James Joyce's *Ulysses* (1922) as an example, and relying on some psychoanalytical theories, especially Freud's.

Firstly, various Modernist literary works along with *Ulysses* are discussed to show that they have a close relationship with the industrialized civilization during the interwar period. Then, the machine civilization is again examined in connection with Fascism, and its preoccupation in preparation for war. Thus, Literary Modernism and Fascism have a strong affinity. On the other hand, however, *Ulysses* contains some strange contradictions between the two in spite of their similarities. Therefore, Joyce adopted a cunning literary strategy to survive the interwar period, exemplified in the text of *Ulysses*.

SYNOPSIS

A Jungian Approach to D. H. Lawrence's *Women in Love* (III) —— The Anima-Animus in "Star-Equilibrium" ——

Minoru Morioka

In *Women in Love* by David Herbert Lawrence (1885—1930), we are introduced to the two Brangwen sisters, Gudrun and Ursula. The former's partner, Gerald Crich, is the hereditary owner of a coal mine. The latter's partner, Rupert Birkin, is a School Inspector. From the viewpoint of Jungian psychology, it may be argued that the complex relationship of these two couples portrays a picture of the "Ego" alienated from the "Self." The novel also alludes to the possible homosexual relationship between Rupert and Gerald.

Resorting to the Jungian "Individuation Theory" as a working hypothesis, I consider why one couple is successful while the other is unsuccessful in their respective quest for "self-realization." To understand the two male-female couples on a psychological level, this paper needs to adequately explain the concept of "anima" and "animus," or the Jungian paired archetypes."Star-Equilibrium" which Birkin claims corresponds to the concept of "anima" and "animus," and represents the ideal combination between male-female couples. The"Star-Equilibrium" between Birkin and Ursula also explains the Jungian "Individuation Theory." This paper deals with chapters 9 to 13 of the novel's 31 chapters, and the rest will be dealt with in my following papers.

SYNOPSIS

Confronting with the Blackness of the Soul: Melville's Persistent Pursuit of a Positive World

Kazunori Yokota

What Melville recognizes in the inner depths of human nature is the blackness spread over the warped human soul or the blackness hidden behind the mask of deceiving features. Against this blackness he pits Gnostic wisdom or a clue for a positive world. Because each man becomes one of its members, society is inevitably distorted. The present world is, essentially, fraught with the constant spiral of such negative aspects as calamities, misfortunes, and miseries.

Melville symbolizes Moby Dick as the radical source of these distortions. Through the figure of Moby Dick, the warped human soul and social distortions are immortalized, while Ahab is doomed to be drowned at sea. Though Melville recognizes these eternally negative aspects, he is not a nihilist who is content with these distortions. With a radical suspicion about why the Calvinistic God created the warped human soul, he pursues the positive world of dualistic Gnosticism.

In a letter dated in November of 1851, Melville wrote to Hawthorne: "I have written a wicked book, and feel spotless as the lamb. . . . So, now, let us add Moby Dick to our blessing, and step from that. Leviathan is not the biggest fish; ─I have heard of Krakens." Confronting the warped individual human soul, through the works following *Moby-Dick*, Melville endlessly voyages to find, with recourse to individual mystic wisdom, the ultimate truth in the primordial positive world, or so-called Pleroma.

執筆者紹介

学術論文

（アメリカ文学）

有働　牧子　　熊本県立大学　非常勤講師
サイコアナリティカル英文学会　運営委員・事務局長

小園　敏幸　　元　熊本県立大学　教授
サイコアナリティカル英文学会　会長・常任理事・理事・編集長

佐々木英哲　　桃山学院大学　教授
サイコアナリティカル英文学会　理事・運営委員・編集委員

鈴木　　孝　　日本大学　理工学部　教授
サイコアナリティカル英文学会　常任理事・理事・運営委員

平　恵理子　　元　都立高等学校　教諭

（イギリス文学）

野村　宗央　　松山大学　経営学部　特任准教授

松山　博樹　　日本大学　法学部　准教授
サイコアナリティカル英文学会　編集委員

森岡　　稔　　元　星城高等学校　教諭
名城大学　非常勤講師
サイコアナリティカル英文学会　運営委員

（アメリカ文学）

横田　和憲　　金城学院大学　名誉教授
サイコアナリティカル英文学会　常任理事・理事

研究ノート

倉橋　淑子　　元　昭和女子大学　教授
サイコアナリティカル英文学会　副会長・常任理事・理事

サイコアナリティカル英文学協会
［1974（昭和49）年7月20日創立］

サイコアナリティカル英文学会
［1983（昭和58）年4月1日改称］

初代名誉会長　大槻　憲二
第２代名誉会長（初代会長）　今田　準造（創立者）

１．サイコアナリティカル英文学会

〒752－0997　山口県下関市前田2丁目27－43
会　　長：小園　敏幸　　℡　090－8297－0729
E-mail: kozono.toshiyuki@silk.plala.or.jp
事務局長：有働　牧子　　℡　080－1733－1554
E-mail: udou@pu-kumamoto.ac.jp
ホームページ：psell.sakura.ne.jp

２．役員［任期3年：2017（平成29）年4月1日～2020年3月31日］

顧　　問：林　　暁雄
会　　長：小園　敏幸
副 会 長：木村　保司、倉橋　淑子
常任理事：金丸　千雪、木村　保司、倉橋　淑子、小園　敏幸、鈴木　　孝、湯谷　和女、横田　和憲
理　　事：石田美佐江、伊藤　太郎、金丸　千雪、木村　保司、倉橋　淑子、小園　敏幸、佐々木英哲、鈴木　　孝、藤見　直子、町田　哲司、湯谷　和女、横田　和憲
会計監査：藤見　直子、松尾かな子
運営委員：有吉登志子、石田美佐江、有働　牧子、上滝　圭介、佐々木英哲、鈴木　　孝、中尾香代子、藤見　直子、松尾かな子、森岡　　稔
論叢編集委員：飯田啓治朗、倉橋　淑子、小園　敏幸（編集長）、佐々木英哲、松山　博樹
事務局長：有働　牧子

【新役員】

役員　［任期 3 年:2020 年（令和 2）年 4 月 1 日～ 2023 年（令和 5）年 3 月 31 日］

顧　　問：倉橋　淑子、林　　暁雄
会　　長：小園　敏幸
副 会 長：湯谷　和女、横田　和憲
常任理事：石田美佐江、小園　敏幸、佐々木英哲、鈴木　　孝、
関谷　武史、湯谷　和女、横田　和憲
理　　事：石田美佐江、上滝　圭介、小園　敏幸、佐々木英哲、
鈴木　　孝、関谷　武史、藤見　直子、町田　哲司、
松山　博樹、湯谷　和女、横田　和憲
会計監査：藤見　直子、松尾かな子
運営委員：有吉登志子、石田美佐江、有働　牧子、上滝　圭介、
佐々木英哲、中尾香代子、松尾かな子、森岡　　稔
論叢編集委員：飯田啓治朗、倉橋　淑子、小園　敏幸（編集長）、
佐々木英哲、松山　博樹
事務局長：有働　牧子

【付記】
「名誉会長」および「顧問」は、常任理事会および理事会を欠席する場合には、事前に、会長宛に文書あるいは電話で意見を述べる。会長はその主旨を常任理事会および理事会で報告し、必要に応じて議題とする。また、上記の会は「名誉会長」および「顧問」に助言を求めることができる。

サイコアナリティカル英文学会会則

第１節　　総　則

第１条　本会は、サイコアナリティカル英文学会という。

第２条　本会は、本部を会長の本務校又は自宅に置く。
事務局については、別途理事会において決定する。

第２節　　目的と事業

第３条　本会は、精神分析学の立場から、英米の言語及び文学を研究することを目的とする。

第４条　本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

１．学術研究会、講演会

２．会誌の発行

３．その他、本会の目的を達成するために必要な事業

第３節　　会　員

第５条　本会の会員は、次の通りとする。

１．本邦大学課程またはそれに準ずる教育をうけた者及び相当教育機関の在籍者で、本会の目的に賛同する者を会員とする。会員は維持会員および一般会員で構成する。維持会員は会員の中の有志とする。

２．本会に功績のあった者で会長が役員会に諮って推挙する者を名誉会員または賛助会員とする。

第６条　本会に入会を希望する者は、所定の申込書を事務局に提出し、理事会の承認を得なければならない。

第７条　会員は、本会の開催する学術研究会において研究発表をすることができる。

第８条　会員は所定の会費を納入しなければならない。
名誉会員は会費を納入することを要しない。

第９条　年会費は維持会員1万円（内、3,000円は寄付）、一般会員7,000円。
但し、大学院生は3,500円とする。

第10条　退会を希望する者は、退会願いを事務局に提出し、理事会の承認を得なければならない。

第４節　　運　営

第11条　本会には役員として会長1名、副会長2名、会計監査2名、常任理事、理事及び運営委員、論叢編集委員若干名を置く。
尚、名誉会長及び顧問を置くことができる。

第12条　（理事）　理事は会員の推挙により選出する。

第13条　（常任理事）　常任理事は理事の中から推挙により選出する。

第14条　（会長）　会長は常任理事の中から推挙により選出する。

第15条　（副会長）　副会長は会長が常任理事の中から選任する。

第16条　（運営委員）　運営委員は会員の中から推挙により選出する。

第17条　（会計監査）　会計監査は会員の中から推挙により選出する。但し、2名のうち少なくとも1名は理事を兼ねることができない。

第18条　（『論叢』編集委員）　『論叢』編集委員は会員の中から推挙により選出する。

第19条　（役員会）　会長は必要に応じ役員会を招集する。

第20条　（理事会）　会長は原則として年１回理事会を招集する。
会長は前項理事会に必要に応じ運営委員の出席を求めることができる。

第21条　（常任理事会）　会長は随時常任理事会を招集することができる。

会長は前項常任理事会に必要に応じ運営委員の出席を求めることができる。

常任理事会の決議事項は理事会の議を経て効力を発するものとする。

第22条　役員の任期は3年とし、重任を妨げない。

第23条　本会の経費は年会費、寄付金その他を以って賄う。

第24条　本会は年1回総会を開き、役員の決定、年会費の決定、事務会計の報告等を行う。総会に続いて、学術研究会を開催し、会員の研究業績の発表及び討議を行う。

第25条　本会則の変更は、理事会の審議を経て総会に提出され、総会出席者の3分の2以上の賛成を得なければならない。

補則　本会則は昭和49年7月20日より施行する。

昭和49年12月１日　第１回大会　改正
昭和51年12月５日　第３回大会　改正
昭和52年12月４日　第４回大会　改正
昭和53年12月３日　第５回大会　改正
昭和54年12月１日　第６回大会　改正
昭和55年12月６日　第７回大会　改正
昭和57年12月４日　第９回大会　改正
平成３年11月９日　第18回大会　改正
平成８年10月19日　第23回大会　改正
平成９年10月４日　第24回大会　改正
平成12年９月30日　第27回大会　改正
平成14年10月５日　第29回大会　改正
平成16年10月５日　第31回大会　改正
平成23年10月22日　第38回大会　改正

平成27年10月3日　第42回大会　改正

付記
この規程の他に、名誉会長・顧問・名誉会員に関する内規を別に定める。

『サイコアナリティカル英文学論叢』
投　稿　規　程

1．投稿論文は未発表のものであること。ただし、口頭発表はその旨を明記すれば可。

2．内容は精神分析学の立場から、英米の言語及び文学を研究した論文であること。

3．応募者は本学会会員であること。

4．原稿（論文及び英文シノプシス、書評）は全て、パーソナルコンピューターによること。審査用として、プリントアウトしたものを４部（コピー可）提出し、英文によるシノプシス（200 語程度）４部を添付すること。（書評の場合には、英文シノプシスは不要である。）

論文の書き方の大枠については、次の通りである。

⑴　本文の後には、Notes の項目のみ設ける。Bibliography や Works Cited の項目は設けない。

⑵「注（註）」は Notes とする。

⑶　短い引用文（Two sentences 以下）の場合は、Double quotation marks（“　　”）でくくって、地の文の中に入れる。その出典が地の文の中に明示されていない場合には、closing mark（”）の右上肩に番号を打って、Notes の中で出典を明示する。

⑷　長い引用文は、地の文と区別し、indent し、この quotation と地の文との space は double space とする。

⑸　Notes には、次の略語を使用する。

ibid. . . . . .　同一著者の同一著作に連続して言及する時に用いる。

op. cit. . . .　著者 (surname) と page number は必ず示す。

loc. cit. . . .　同一著書の同一頁から連続して引用する場合にのみ用いる。

(6) シノプシスには英文のタイトルとローマ字による執筆者の氏名を記入すること。

Notes の具体例は、次の 1 － 12 を参考にしてください。

Notes

1. Sherwood Anderson, *Poor White* (New York: B. W. Huebsch, 1920), p. 12.
   以下、同書からの引用は全てページ数を括弧に入れて本文中に記す。
2. William James, *The Principles of Psychology* (New York: Henry Holt, 1890), p. 190.
3. *Loc. cit.*
4. *Ibid*., p. 58.
5. Irving Howe, *Sherwood Anderson: A Biographical and Critical Study* (California: Stanford University Press, 1966), p. 124.
6. James, *op. cit*., pp. 56 － 8. 参照。
7. Trigant Burrow, *A Search for Man's Sanity* (New York: Oxford University Press, 1985), p. 561.
8. James, *op. cit*., p. 205.
9. Howe, *op. cit*., pp. 250 － 62. 参照。
10. *Ibid*., p. 38.
11. Burrow, *loc. cit.*
12. 村上仁『異常心理学』（東京：岩波書店、1952）、pp. 56 － 7. 参照。

（但し、論文で扱う、所謂 Text に相当するものについては、例えば上記の Notes 1. のように「以下、同書からの引用は全てページ数を括弧に入れて本文中に記す」としても可。但し、その場合、例えば 15 ページであれば、（15）ではなく（p. 15）と表記すること。

あるいは、Text であっても他の引用と同様の表記の仕方でも可。）

５．原稿の採否および掲載の時期は編集委員会が決定する。
６．執筆者は編集委員から採用の連絡があり次第、電子メールによる添付ファイルにて原稿を事務局に送付すること。（またはフロッピーディスク、メモリースティック或いはＣＤ等による提出も可。）
７．採用論文の執筆者は論叢印刷費用の一部を負担する。詳細は内規による。
８．原稿の締め切りは９月末日とする（厳守のこと）。
９．論叢発行の際に、執筆者には抜刷 30 部が送られる。

付記
学会の依頼による執筆の場合は、この規程を適用しない。
この規程の他に、『サイコアナリティカル英文学論叢』に関する内規を別に定める。

サイコアナリティカル英文学会の図書出版に関する規程

本学会は「著作が精神分析学の立場から英米の言語や文学を研究している」場合に、執筆者の申し出により可能な限りのサポートをする。（執筆者は本学会会員であること。）

1．編集委員が著作の査読を行い、必要に応じて助言し、著作内容の一層の充実のために協力する。
2．印刷会社については原則として執筆者が直接交渉するものとするが要望があれば、紹介等の便宜をはかる。
3．完成本については、学会に献本するものとする。

編 集 後 記

小 園 敏 幸

サイコアナリティカル英文学会は、精神分析学の立場から、英米の言語及び文学を研究することを目的として、1974（昭和 49）年 7 月 20 日に創設され、この 7 月で創立 46 周年を迎えます。

Sigmund Freud（1856-1939）によって創始された精神分析学の日本への導入は、本学会の初代名誉会長である大槻憲二先生の手によるのが最初で、フロイド著作の翻訳として『フロイド精神分析学全集』十巻（春陽堂、1929 － 1933）を出版しました。そして 1933 年、大槻憲二先生は日本初の精神分析学の雑誌『精神分析』を創刊されました。今日では精神分析学が心理学、医学、教育学ばかりでなく、文学、芸術、宗教、司法、政治、その他あらゆる方面の研究分野において応用されていることは周知の通りです。

文学批評の方法としては、たとえば、美学的批評、倫理的批評、社会学的批評、心理学的批評、原型批評、新批評等が挙げられますが、これらの何れの批評方法を駆使しても文学作品が内包する意味の多元性を遺憾なく探究することは不可能です。何故ならば、その何れの方法も一面的解釈に過ぎないからです。精神分析学的批評もこの例外ではなく、他の批評方法と同様、そこには自ずと限界があります。しかしながら、精神分析学的理論を援用して考察することが科学的かつ有効な文学研究方法であることもまた事実です。

さて、今年度大会（第 46 回〔令和元年度〕大会）は、2019 年 11 月 23 日（土）に日本大学法学部神田三崎町キャンパスで開催されました。大会当日は大雨に見舞われましたが、非常に多くの参加者があり、「研究発表会」および「懇親会」ともに盛会裏に終わりました。

因みに研究発表は（発表順・敬称略）有働牧子、岡田善明、平　恵理子、森岡　稔、関谷武史の 5 名でした。

来年度大会（第 47 回〔令和２年年度〕大会）は、2020 年 11 月 21 日（土）に桃山学院大学で開催される予定です。

『論叢』第 40 号の投稿論文の査読については、編集委員 5 名（敬称略：飯田啓治朗、倉橋淑子、佐々木英哲、松山博樹、小園敏幸）で行いました。各編集委員が全ての投稿論文に目を通すことを前提に、文学作品が内包する意味を可能な限り理解しながら執筆者の意図を汲み取りつつ、膨大な時間をかけて綿密に査読しました。各編集委員から出されたコメントについては最大公約数的に集約し、執筆者に提言をしたことを付記します。『論叢』第 40 号には、最終的に学術論文 9 本（イギリス文学 3 本、アメリカ文学 6 本）と久々に研究ノート 1 本を掲載することになりました。その掲載順序について特に意図はありませんが、学術論文に関してはイギリス文学・アメリカ文学に関係なく執筆者名の五十音順に掲載いたしました。何れの論文も、「人間の心理の広大な部分が無意識界であり、この広大無辺な無意識界から人間は絶大な支配を受けているが故に、人間のこの無意識界に、人生の多くの真実が存在する」という精神分析学の前提に立脚しつつ、解釈・批評の行われた独創的かつ読み応えのある学術論文です。

是非とも読者のご高見を承りたく、宜しくお願い申し上げます。

扨、あと 10 日余りで新年度を迎えます。実は、本学会の会員である佐々木英哲先生（桃山学院大学　国際教養学部長・教授、本学会の理事・編集委員・運営委員）が、5 月 21 ～ 24 日、サンディエゴで開催される ALA（the American Literature Association）の大会で研究発表をされることが決定しました。これは佐々木先生にとっては申すに及ばず、本学会にとっても、大いに光栄とするところです。

因みに、佐々木先生の「研究テーマ」および「発表要旨」について、書面にてご回答がありましたので、原文のままご紹介させて頂きます。

「研究テーマ」は 19 世紀アメリカ文学、特に Herman Melville、Nathaniel Hawthorne。歴史的コンテクストを踏まえたうえで、精神分析理論をはじめ様々な文学理論を援用しつつ、作品に新しい解釈をもたらしたい、と思っている。2018 年に引き続き、今回 2020 年の ALA（the American Literature Association）の大会（San Diego, CA, May 21-24）で発表することとなった。ただ、その後、新型コロナウイルスの世界的流行という想定外の事態が発生した。そのため今後については、予断を許さない状況になっている。

「発表要旨」は以下の通り。

The Sacred Father De-gendered: Chillingworth in *The Scarlet Letter*

What if Chillingworth the cunning (quasi-) father figure in *The Scarlet Letter* loses the anchorage of fatherhood, i.e., the male gender? He is suspected, by his own ex-wife, of his depleted vital energy, sterility, and impotence: “blight[ing] . . . the tender grass of early spring, and show[ing] the wavering track of his footsteps, sere and brown, across the cheerful verdure.”

Chillingworth regresses to the sphere directly related to life-supporting bodily activities such as taking nourishment, excreting fecal matter, having sexual intercourse, and creating offspring, in a word, the sphere of abject / maternal / female body. Craving for fatherhood, Chillingworth ironically turns out to be a witchlike (m)other, “with a basket on one arm, and a staff in the other hand, stooping along the ground, in quest of roots and herbs to concoct his medicines withal.” Along the lines of Kristeva, the feminist scholar of Lacanian psychology, we may argue that, if deprived of the male gender, the excessive physicality presents itself, replaces the de-corporealed physicality — or the Emersonian “transparent eyeball” you might say — that the men in the hegemonic position

boast of, and renders them unable to differentiate themselves from the women, the inferior — so they believe — beings who are regarded physically prominent like Hester with the letter “A” on her bosom.

Hawthorne, emitting a queer aura in a way slightly different from Chillingworth, recognizes the impossibility and futility of maintaining the prerogative masculine position as a patriarch, receives from Chillingworth what is in tune with himself, and spontaneously undertakes the load of the de-gendered subaltern.

ALA 大会での佐々木英哲先生の研究発表が無事に成功裏に終わることを祈念しております。

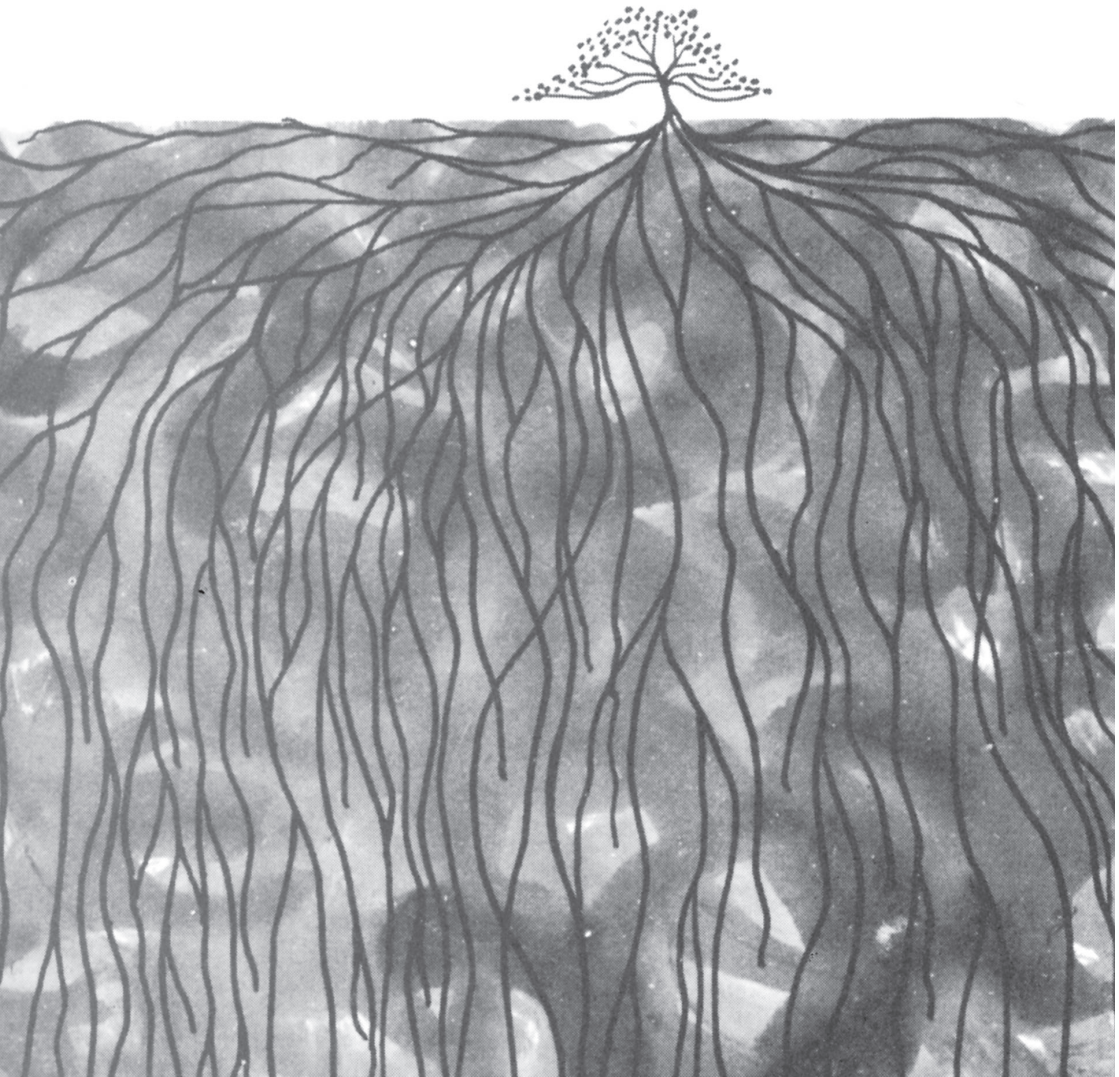
最後に、長年に亘り、本学会の機関誌『サイコアナリティカル英文学会論叢』の印刷・製本を快く引き受けてくださっている啓文社に、また企画の段階からいろいろお世話になっている同社の相良徹氏および有働牧子氏に、衷心より感謝を申し上げます。

2020（令和 2 年）年 3 月吉日

サイコアナリティカル英文学会

会長・編集長　小園敏幸

サイコアナリティカル英文学論叢
――英語・英米文学の精神分析学的研究――　（第 40 号）

発　行　者　　サイコアナリティカル英文学会
会長　小園　敏幸
印　刷　所　　㈱啓文社　〒861-3102　熊本県上益城郡嘉島町下六嘉1765
TEL 096(368)8100　　FAX 096(369)2677
発　行　所　　サイコアナリティカル英文学会
〒752-0997　山口県下関市前田2丁目27-43
会　　長　小園　敏幸　TEL 090-8297-0729
E-mail：kozono.toshiyuki@silk.plala.or.jp
事務局長　有働　牧子　TEL 080-1733-1554
E-mail：udou@pu-kumamoto.ac.jp
ホームページ：psell.sakura.ne.jp
郵便局の青色の「払込取扱票」について
口座番号：０１５００－９－２８９４９
加入者名：サイコアナリティカル英文学会

2020（令和 2）年 3 月 20 日発行